

寺庭婦人の手帖

現代宗教研究所編

寺庭婦人の手帳

日蓮宗宗務院教務部

序

今般、『寺庭婦人のしおり』の改訂増補版として『寺庭婦人の手帖』を再刊する事に相成りました。

申すまでもなく、寺庭婦人は寺庭の要であると同時に、宗門寺院の住職・主管を補佐して檀信徒教導の一翼を担い、延いては宗門教化の礎石たらんとする重大な役目をもつてであります。

小衲が年来の念願は、宗門寺院の檀信徒を宗祖日蓮大聖人の檀越・信徒として固い信仰を持して行くよう指導し、教化せんことであります。幸いに推挙を得て宗務総長に就任し、再三任したので護法運動の昂揚によって、宗門が本然として要請している、日蓮大聖人の御精神の脈々として躍動せんとする宗門に再建せんとするものであります。

漸く護法運動もその緒についた今日、愈々宗門は挙げてその理想に邁進せねばならぬと痛感するものであります。

此の時に當って、宗門各寺院・教会の住職・主管各聖の教化活動に期待するところ広大なるものがありますが、と同時に、寺庭婦人の役割は愈々以て重且つ大であると言わねばならぬのであります。

冀くは須らく寺庭婦人は本書によって信仰増進の糧とし、住職・主管補佐の用意となし、且つ寺院日常の具体的教化活動の指南とされんことを切に希望するものであります。本書を手引とされた上は、更に不断の心掛けによって種々の書物を踏破されんことを願うものであります。

一言以って縁由を記し、執筆者ならびに改訂に當った日蓮宗現代宗教研究所の法勞に謝すると共に、各位の御精進に期待するものであります。

日蓮宗々務総長

片山日幹

改訂の序

現在、世界は急激な展開の渦中にあり、文化や人間の在り方も根底から問い直され、日本でもまた、そうした事象がずっとあられております。

七百五十年前に日蓮聖人は、法華経のみおしえ、大聖釈尊の御本懷を色心に実践され末法を救済する教えを顕現されましたが、その真髓を本當に活かして行くのは今からだと考えます。

宗祖日蓮聖人の法華経色説の世界は単なる理論でもなく、また真髓から離れた単なる活動であってもなりません。日蓮宗の教師のひとりひとりが宗祖の真精神を体現して社会にはたらきかけ、すべての檀信徒が日蓮聖人のみこころに本當に生きて行くことでなければなりません。

住職・管理者が心を安んじて教化に専念するためには、寺族、ことに寺庭婦人の輔佐に負うところ大であります。そのような意味合いから、かつて、昭和三十六年に、及川真学教務部長の御努力で『寺庭婦人のしおり』が刊行されましたが、その後、大方の好評裡に絶版になってしまいました

た。

その後も御希望がひきつづきあり、また種々改訂増補すべきだとの御意見もありましたので、松村寿顕前教務部長が再刊を企画され、それに従って今回、茂田井教亨教授、高橋玄浄師御執筆の、『しおり』に若干の改訂増補をほどこし、また編集を検討し、題名を『寺庭婦人の手帖』と改めて再版することに致しました。改訂にあたっては、日蓮宗現代宗教研究所長茂田井教亨教授に依頼し、御努力をいただきました。

寺庭生活はまことにあわただしく、書物をひもとく暇を見出すことはたやすいことではありません。しかし、その場その場の必要に応じて、どこからでも結構ですから、本書を開いていただきたい。そして、疑問の点は更に究めていただきたい。そうしてこそ、日常の護法運動がしっかりと行なわれることになると思います。

昭和四十四年二月十六日

日蓮宗教務部長 田 中 日 堂

初 版 序

戦後日本の政治や、経済は相当に復興し、戦前以上に伸張した面もあるといわれる反面に、精神的な復興がこれに伴わず、却つて道徳生活宗教生活の上にはこのままではと、その将来を危ぶむ声がかなり強い。

日蓮聖人の流れをくむ本宗寺院の教師たちが、戦後諸種の悪条件の中で懸命に法灯を掲げて灯びを点じ続けてきた努力は容易なものではなく、又その蔭にあつて住職を扶け子弟の教育檀信徒との応接に万全の意を払つてきた寺庭婦人の働きにはただただありがたく感謝の意を表したい。それにつけても、寺庭婦人の職責は今後いよいよ重く、又その活動については住職担任はもとより一般檀信徒の期待は婦人自身が考えているより遙かに大きいものがある。

宗門としては、これら全国寺庭婦人の護法心と愛宗の力を高め且つは又一段とその資質の向上を図るために格別の意を注がねばならないが、今回「寺庭婦人のしおり」を発売し、普く寺門に配布して寺庭の子女の熟読を求める所以も又ここにある。繁忙な寺務の間に本書をひらくことはたやすいことではない。殆んど無理な要求とも思ふ一面、又このことだけは是非知つて欲しいという気持ちから、敢えてあなたのお手元にこれをお送りす

る。

内容は(一)日蓮宗の教義 (二)宗祖略伝 (三)犀浦沙弥訓から (四)寺庭事典の四部に分れている。

(一)は茂田井教亨教授 (二) (三) (四)は高橋玄浄師の執筆によつたもので、いずれも寺門の留守担当者として身につけて頂く最少限のものが記されてある。しかし用語や意味に多少難解な点があるかも知れないが是非反すうそしやくし、又住職担任の指導によつて理解して頂きたい。住職担任の方々も復習、研鑽の心をもつて一読し、寺庭子女を教導されんことをお願いする次第である。

終りに、寺庭事典については石井日章僧正の御教示があつたことを附記して前の二師と共々厚く御法勞を感謝する。

昭和三十六年六月吉日

日蓮宗教務部長 及 川 真 学

目次

序	片山日幹	(2)
改訂の序	田中日堂	(4)
初版序	及川真学	(6)
第一章 「日蓮宗・宗義大綱」とその精神		(12)
一、 「日蓮宗・宗義大綱」		(12)
二、 「宗義大綱」の精神		(18)
第二章 日蓮宗の教義と寺庭婦人		(24)

一、宗祖日蓮聖人について……………	(24)
(1)開宗の意義……………	(24)
(2)御法難の意義……………	(29)
(3)御書について……………	(32)
二、法華経に示された釈尊の信心……………	(40)
三、御本尊の意義……………	(45)
四、御題目のころ……………	(51)
五、日蓮宗の安心と寺庭婦人……………	(53)
(1)個人の安心……………	(54)
(2)家庭の安心……………	(56)
(3)国家社会の安心……………	(58)
六、御回向の意義……………	(60)
七、寺庭婦人の心がまえ……………	(64)

第三章 日蓮聖人略伝……………(70)

第四章 信行とお給仕……………(83)

1、お給仕の心がまえ……………(83)

2、御本尊とお仏壇……………(86)

3、日常の勤行……………(90)

4、寺庭生活のあり方……………(93)

第五章 檀信徒への接し方……………(99)

1、寺庭婦人の立場……………(98)

2、人と接する心の基本……………(101)

3、現実を見る心・学ぶ心……………(105)

4、接する人の様々な立場について……………(109)

5、話の心・人と接する心……………(113)

第六章 仏事の知識……………(117)

1、法要と葬儀……………(117)

2、法衣と法要式具……………(122)

3、仏具……………(127)

4、建造物……………(130)

第七章 特殊法要式と年中行事……………(133)

1、特殊法要式……………(133)

2、年中行事……………(136)

附・回 向 文……………(144)

宗門のこよみ……………(147)

日蓮宗の機構……………(150)

参考書目……………(157)

聖跡巡拝の手引……………(164)

あとがき

第一章 日蓮宗・宗義大綱とその精神

一、日蓮宗・宗義大綱

1、宗義の体系

日蓮宗は、日蓮聖人が信解体得せられた法華経を、本宗における理・教・行・証の基本とし、これによって五綱と三秘を構成し、もって宗義の体系とする。

2、五綱の意義

五綱は、日蓮聖人が法華経を信解体得せられるに当り、考察の基盤とされた教・機・時・国・師（序）の五箇の教判であって、教と理とを明らかにする。更にそれは、宗教活動における自覚と弘教の方軌を示すものである。

教は、一念三千を包む法華經寿量品の肝心、南無妙法蓮華經をいい、五重相對・四種三段等の教判によって詮顯されたものである。

機は、教が与えられる対象で、末法の凡夫をいい、等しく下種の大益を享受する。時は、教と必然的に相應する末法今時の意味である。

国は、教の流布する場であり、日本を始めとする全世界が国である。

師は、教・機・時・国の意義と次第とを知り、これを自覺し、実践する仏教者である。

3、三秘の意義

三大秘法は、本門の教主釈尊が末法の衆生のために、本化の菩薩に付屬された南無妙法蓮華經の一大秘法に基づいて、開出されたものである。日蓮聖人は、この一大秘法を行法として「本門の本尊」「本門の題目」「本門の戒壇」と開示された。末法の

衆生は、この三大秘法を行ずることによって、仏の証悟に安住する。

本門の本尊は、伽耶成道の釈尊が、寿量品でみづから久遠常住の如来であることを開顯された仏である。宗祖は、この仏を本尊と仰がれた。そして釈尊の悟りを南無妙法蓮華經に現わし、虚空會上に來集した諸仏諸尊が、その法に歸一している境界を圖示されたのが大曼荼羅である。

本門の題目は、釈尊の悟りの一念三千を南無妙法蓮華經に具象したものである。仏は、これを教法として衆生に与え、我等凡夫は、これを三業（身口意）に受持して行法を成就する。

本門の戒壇は、題目を受持するところにそのまゝ現前する。これを即是道場の事の戒壇という。四海歸妙の曉に建立さるべき事相莊嚴の事の戒壇は、我等宗徒の願行であって、末法一同の強盛の行業によって実現しなければならない。

4、信行の意義

本宗の信行は、本門の本尊に帰依し、仏智の題目を唱え、本門戒壇の信心に安住するを本旨とする。機に従って、読、誦、解説、書写等の助行を用いて、自行、化他に亘る信心を増益せしめる。

5、成仏の意義

本門本尊への信は、成仏の正因であり、その相は口業の唱題となり、身業には菩薩の道行となる。この菩薩道に即した生活活動がそのまゝ成仏の相である。

6、靈山往詣

来世は、現世と相即する。現在の即身成仏は、来世成仏の意義をもつ。妙法信受の

当所に成仏が決定し、靈山の釈迦仏のみもとに在るのである。故に靈山往詣は未来のみのものでなく、現身のわが信心の場にある。宗祖はこの境界を大曼荼羅に図顯された。

7、摂受と折伏

折伏は邪見・邪法に執するものに対して、これをくだき、正法に帰伏せしめることであり、摂受は寛容なる態度をもって正法に導き入れることである。かように、この両者は、教を弘める方法であるが、その精神は共に大慈悲心に基づかなければならない。しかも破邪が顯正の為の破邪であるように、折伏と摂受にはその行用に前後があり、また機によっても進退がある。

8、祈禱の意義

いのりは、大慈悲心に基づく真実の表白である。本宗の祈禱には自行化他に亘って

成仏のいのりと、生活のいのりとはあるが、後者といえども信仰生活の助道となるものでなければならぬ。

9、宗 祖

宗祖は、みずから本化上行の自覚に立ち、仏使として釈尊と法華經への信仰を指示された宗徒の師表であり、直道を導く大導師である。

10、出家と在家

出家と在家とは、信仰に両者の別はないが、その使命を異にする。出家は専ら伝道教化を使命とし、自己の信仰を確立するとともに、進んで宗教者としての行学の二道をはげむべきである。在家は、信仰を世務に生かすことに務め、分に応じて出家の伝道を扶けることが、仏道を行ずることである。

二、「宗義大綱」の精神

このたび日蓮宗務院で宗会承認のもとに発表しました「宗義大綱」は、わが日蓮聖人の教えとそれに対するわれわれの心構えのようなものを、今日の立場に立って、いちおう簡明に整理し、叙述したものであります。もとより、力の及ばないところもあって、十分なものとは申せませんが、大体の骨子はつかめるようになっております。

寺院にあって、日夜、住職の補佐や子弟の養育、また、檀徒の接待に暇のないご婦人方に、この「大綱」を把握して欲しいということは酷と思いますので、これだけは知っておいていただきたいという、この「大綱」の裏にある精神とでもいったものを簡単に述べてみたいと存じます。

ご承知のように、日蓮聖人は十二歳で勉強のため清澄山に上られ、十六歳の時出家得度なされましたが、最初から一つの目的がお有りになったのであります。それは、仏教を習いきわめて仏となり、恩ある人びとを救いまいらせよう、ということでした。これは当時の、無常を感じて出家された多くの祖師方とは、大へん質が違っているところであります。つまり、仏教の教主である釈迦牟尼世尊のほんとうのお心持はどこにあり、それをどういたadaki、どう行じていったらよいか、ということが、聖人の最初からの問題であつたわけであります。それには、まず、自分を捨てて、ひたすらに釈尊の御声（法）に聞く、という態度にならなければなりません。聖人は、遂にそこに踏み

切ったということを、後年身延から恩師道善房のご霊前へ送られた『報恩抄』という御書にお書きになっています。

このことは、些細なことのようですが、じつは大事なことでして、ここに出発点のあった聖人の求道は、ついに弘教の生涯を通じて最後まで、そこに生きたもうことになったからであります。すなわち、聖人の教えには、いつもこのご精神で貫かれているものがある、ということを知らねばなりません。

では、聖人が最後に把握された釈尊の神（たましい）とは、何であつたでしょうか、それは、いうまでもなく「法華経」でありました。法華経こそ釈尊のたましいであり、今の世から未来の世までも救う教えであると、釈尊の信心を読まれた聖人は、そこに生き、そこに死にたもうたのであります。法華経が釈尊の数多い教えのなかで、最も勝れた教えであるということだけは、多くの人が認めていたことでしたが、それがただ番付の上で上位にあるというようなことだけでなく、この御経こそ釈尊が未来の人びとのために説き残された唯一の教えであると、釈尊の信心を読まれたところに聖人独特の法華経観というものがありました。そこに「南無妙法蓮華経」のお題目が出てくるのであります。

歴史の上では釈尊はすでにご入滅になった仏であります。が、じつは御寿（おんいのち）は、永遠に生きてわれらを導き、救い、護りたもう仏なのであります。皆さまがお読みになる「お自我偈」は、そのことが説かれています。すなわち、「心よこしまで狂っている者には、わたしが傍にいて

も見る事ができないが、素直で心の柔順（にゅうなん）な、一心にわたしを見奉ろうと樂（ねが）う者には、きつとわたしは弟子たちと共に姿を示し、いつもここにいて滅することは無いのだ。方便の力をもって見えたり、見えなかったりするが、どこでも信樂（しんぎょう）する者があれば、わたしは姿を示して語りかけるであろう」というお経のおことばは、そのことをお説きになっているのであります。

それはなぜかと申しますと、釈尊のご入滅になってから歳が経った時代になるほど、人の心は仏教から遠ざかり、小悋口になって、生意氣なことはいうけれども、ほんとうの意味からは信仰心が薄らぐものなのです。そこで釈尊は、そういう時代——それが今なのですが——の人びとに心を痛められ、とくにご自身の全精神を残そうと誓われたのであります。恰も、父母は七人の子に平等でないことはないが、一人の病弱な子には、ひとえに心を痛めるもの——とのたとえをお説きになって、そのご心境を述べておられます。わたくしどもは、この病弱の一子なのであります。

この、み心を痛めていつもわれらと共にと誓われた釈尊を、ご本尊と仰ぎ、その全精神を傾けて語りたもうおことばを、お題目として、わたくしどもは受持するのであります。眼の前に仰がれる釈尊は、外の仏（そと）のようです、南無妙法蓮華経と受持し奉るときには、そのまゝ内の仏（うち）として、われらの心のなかに住みたもう仏であります。外の仏が内の仏となつて活き／＼と感じられれば感じられるほど、眼の前の釈尊は外の仏として尊く仰がれてくるのであります。この信心の世界を、日蓮聖人は大マンドラ御本尊として図顕遊ばされたと拝したらよいと存じます。つまり、一つの螢光

灯に、両端の電気が交流しますと、パツと明るくなるように、南無妙法蓮華經と受持するわたくしどもの声は、わたくしどもの声でありながら、釈尊が「われときに衆生に語る」と仰せられた語（ことば）としてのみ声であり、わたくしたちの見たてまつらんとする一心の現われでもあって、一つのお題目に両者が交わっているのです。これを「信心成仏」「受持成仏」といっております。それは、「信心すれば成仏する」「受持すれば成仏する」という意味ではなく、「信心」が「成仏」であり、「受持」が「成仏」である、という意味であります。すなわち、信心も受持も同じであります。この信心や受持のほかに成仏というものはない、ということをつかむことが大切であります。これは本堂の御宝前においても、庫裡のお内仏においても変りはありません。そこで題目が受持され、信心決定したところが成仏であって、本門の戒壇なのであります。そのことを御經には、「住不退地（じゅうふたいち）」とも、「入正定聚（にゅうしょうじょうじゅ）」とも説かれております。「不退地」というのは、菩薩がいよ／＼仏に成る段階であります。もう逆戻りはしない、仏になることが決定する境地でありますから「不退」というのであります。「正定聚」というのは、坊さんでも在家でも、また、男でも女でも、仏に成ることが決定したなかまのこととて、正しい信心に安住できた人のことであります。「正定聚に入って諸仏に護念せられる」と御經にありますが、不退地に住するにしても、正定聚に入るにしても、いずれも南無妙法蓮華經の受持の当処にそれが実現されていると心得ることが肝心であります。そこに御經にあるとおり、「諸仏皆（みな）歡喜」したもう姿が現前しますので、その場を「本門の戒壇」と申すのであります。

以上は「宗義大綱」にいう「三大秘法」の意味を、ほんとうに砕いて申し述べたに過ぎません。要するに、日蓮聖人は、釈尊のご精神は法華經にあることをお悟りになり、それも末代といわれる今日においては、「寿量品」にもありますように、南無妙法蓮華經というお題目にしぼって、釈尊はご自身の全生命を留められたとお受け取りになった、ということが骨子でありまして、そこを外して日蓮聖人の法華經はない、したがって、日蓮宗の教えも、これを軸として廻るものだということを心得ていただくことが肝心であります。

そして他の宗派と違うところは、その釈尊の南無妙法蓮華經を、末代の今日弘められた日蓮聖人が、仏の御使いという自覺に生きられた祖師をもつ、ということであります。どの宗の祖師方も、いずれも先人のまだ述べなかつた独自の教義を宣布（せんぶ）されたところに、祖師としての資格をもっておられると思うのでありますが、日蓮聖人の場合は、法華經のなかで、末世に南無妙法蓮華經と我も持（たも）ち、人にも持（たも）たしめることを誓った上行菩薩と、ご自身とが全く同じことになったというところに、他の祖師達と異った点があるのであります。もう少しくわしく申しますと、末代における法華經の布教者には、甚だしい迫害がつきまとうことがお経に説かれ、これを忍んで受けることができる釈尊の久遠の弟子という無數の菩薩が選ばれました。これはいままでどのお経にも名も出なかつた上行・無辺行・浄行・安立行という四菩薩をリーダーとする地から湧き出た無數の菩薩です。ところが、この菩薩が甘んじて受けねばならぬ迫害は、見事その通り日蓮聖人に実現しました。そこで聖人は、御經に説かれた予言的道理と、ご自分の歴史的事実とが一

致したところから、「わが身經文に符合せり」と仰せられ、仏の御使という自覺を深められたのであります。これは法華經がインド、シナ、日本と三国に流伝してきた歴史上、始めて示された大事で、この一事をもつてしても、法華經の南無妙法蓮華經が、未來までも流布（るふ）することの確實性は否定できないのであります。

こういう祖師を宗祖と仰ぎ、その教えを遵奉（じゅんぽう）する宗徒の誇は忘れてはなりません。しかし、それだからといって、みだりに宗祖を本仏にまで高めてしまうことは、聖人の仰せられた「悪しくうやまう」ことになって、仏教の根本義の顛倒（てんどう）であります。その点をよくわきまえて寺庭婦人であることを自覺し、その本分を尽すことこそ、「宗義大綱」の精神にほかなりません。

第二章 日蓮宗の教義と寺庭婦人

一、宗祖日蓮聖人について

1、開宗の意義

日蓮宗は日蓮 わたくしどもの寺院や教会は、いずれも日蓮宗という宗団に属しています。そこに聖人の嫡系 わたくしたちは、まず、誇りをもちたねばなりません。というのは、日蓮宗は、日蓮聖人の得られたご信仰を中心として団結した教団の正系だからであります。日蓮聖人の流れは、歴史の上ではいくつかの宗派に分れるに至りましたが、わが日蓮宗は、その本流に立ち、七百年來、その嫡系を保つてきた教団なのであります。日蓮宗寺院、教会に住しているわたくしどもは、それを誇りとするとともに、そこに感謝の念を持たねばなりません。

仏教の各宗は、それぞれその宗派の宗祖というものがありますが、祖師といえ、まず、日蓮宗の宗祖日蓮聖人をお呼びする名称となってしまうました。そこで、ここではしたしみ易いことばとして、聖人のことを「お祖師さま」とよびお祖師さまのごく簡単な伝記をお話し、どこがお祖師さまのえらかったところかということを知っていただきたいと存じます。

お祖師さまの

お祖師さまは今からおよそ七百四十年前、貞応元年（一二二二）二月十六日、いま

出家と祈念

の千葉県安房郡小湊にお生まれになりました。素姓については昔からいろいろな説

をたててお祖師さまをえらくしようとするところがありました。ご自身では「漁夫の子」とおっしゃり、「せんだらが家より出でたり」とおっしゃっていますから、えらい方の血筋のようにつくり上げない方が、お祖師さまのお心になつてゐるのではないかとおもいます。「せんだら」というのは、インドの言葉で一番低い身分のことです。しかし、お祖師さまの十二才の年ご両親が、お祖師さまと同じ郷の清澄の寺に上げて学問につかせておられるところからみれば、何も知らぬ根からの漁師でもなかったらうと思われまゝす。

お祖師さまは十二の時から十六才になるまで、清澄の諸仏房の道善について勉強をなされ、十六才の時、出家得度して正式に沙門となり、是聖房と名のられるようになりました。お祖師さまはひじょうに聡明利発なお方で、もうこのころから仏教に対するいろいろな疑問をもたれ、師友にも訊きただしたり、勉強もなさいましたが、少しも解決のいとぐちがつかめませんので、清澄寺に安置されてある虚空蔵菩薩に願いをかけ、「日本第一の智者となしたまえ」と祈られるに至つたのであります。

「智者」というのは「物知り」「学者」ということや、「利巧者」ということではなく、ものの道理をよくみわけ、真実の仏教を見きわめる眼をもった人、という意味です。これは本当の仏教を知りたい、という可憐な少年の願ひのようですが、これがのちのお祖師さまをつくる土台となる方

向を示しているものでありますから、十分注意していただく必要があります。

お祖師さまの宗教は、単なる感情や希望から生まれたものでなく、その感情が深い人間の智というものによって支えられ、それを無比の意志力によって貫かれたところに生まれ出たものでありますから、強いところもやさしいところもあって、ひじように複雑に見えるのであります。したがって好意ももたず、共感もない人にはチョツト分りにくい点があります。そこでお寺にいるわれわれは、誰にもわかってもらえるように、まず、自分自身がお祖師さまやその宗教の性格をよく知っておく必要があろうと存じます。

「虚空蔵菩薩、眼前に高僧とならせたまひて智慧の宝珠を授けさせたまひき」とは、後年たびたびお書きになったお言葉ですから、お祖師さまは、虚空蔵菩薩からなにかご利生をいただかれたことと思われまゝ。ここで大事なことは、靈驗があったとか、ご利生をいただいたということでおしまいにしておられないことであります。すなわち、ご利生があればあるで、なおさら勇気を加えて各宗の研究にいそまれたということであります。これは、いうまでもなく、お祖師さまの凡庸でないことを物語っているのであります。

法華經こそ　そこでまず、当時の政治の中心地であり、新しい宗派がどしどし入って来る鎌倉を目**真実の仏教**　指して、最初の草鞋をはかれましたが、一たん清澄へ戻られてのち、ふたたび、旅装をととのえ、日本仏教の中心である比叡山に向われました。そして爾来十二年間、比叡山を中心に京都、奈良、高野と、各宗の碩学を訪うて、真実の仏教はいずれであるかを探究されたのであります。

す。

最後の仕上げは、むろん天台宗の本山である比叡山でなされたと思われませんが、ついにお祖師さまは、釈尊の真のご精神、したがって、真実の仏教は、『法華経』であることを突きとめられたのであります。それは建長五年お祖師さまの三十二才の時でありました。法華経はいうまでもなく天台宗で聖典と仰いでいるお経であり当時の社会にもずいぶん信仰されていたお経であります。ここに改めてお祖師さまによって見直された法華経というのは、それらとは少しく趣きの変った『法華経』だったのであります。「当時われも法華経を信ぜり、われも法華経を持てりといへども、法華経にてはあらず」という意味のことをおっしゃっていますが、ここが大事なところであります。それはただお経を丸呑みにして一生懸命読んでみたり、法華経を読みながらお念仏してみたりするような、法華経の信じ方ではなく、お経の精神は、いま、どう活かされるのか、釈尊のご精神は法華経をとおして今日どう活かされるのか、ということを深く考えて掴まれた法華経だったのであります。これは大へん進歩的なお考えと申せますが、ただたんに進歩的考えというだけのものではなく、お経から呼びかけられている大責任者としての、自覚をもった人としての法華経の受取り方だったのであります。ですから、当時の無自覚にお経を崇拜している人々とは大へんちがっていますから、その掴んだままのお経を、また信仰を、そのままむき出しに出せば、容易ならぬ事態をひき起します。また、当時の人びとの信仰状態をそのままは認しては、本当の法華経、時代に生きる法華経が現われませんから、どうしてもそれらを否定し是正しなくてはなりません。そうすれば

自身はいうまでもなく、父母・兄弟・師匠等にいろいろの迫害が、つまりテロが起ってまいりましょう。じつに容易ならぬことになるのであります。これは一時的気分や、思いつきぐらいではどうていやって行けるものではありません。

立教開宗　そこでお祖師さまは、大へんお考えになってしまいました。この自分のつかんだ法華經の御決意　を人びとに語ろうか、語るまいか、とつおいづいぶんご思案なさいました。だまっていれば自身の生活に不安がないようだが、釈尊のご命令に背くことになるし、後生は地獄へ落ちることは必定である。しかし、思い切って言い出せば、種々の迫害が身に降ってくることも必定である。途中でくじけるようなことになるのなら、初めからやらぬ方がましだ。どちらにしても苦はまぬがれぬ運命である。——こうお考えになったお祖師さまは、子供のところ、虚空藏菩薩に願をかけられたことを思い出されたのであります。それは決して高名心のために智者となしたまえと祈ったのではなかった。本当の仏教を習いきわめ、世の中を救おうというためであつたはずだ。本より學問し候しことは、仏教を習い、仏となり、恩ある人もたすけんと思う心からではなかったのか。——ここにお祖師さまにはりん然たる勇氣が湧き起つたのであります。はじめに、お祖師さまの宗教は、たんなる感情ではなく、その底には深い智慧と、それをつらぬく意志とが渾然としているのだということを申しましたが、それはここなのであります。みずから、師子王の如き心をもてる者かならず仏となるべし。例せば日蓮がごとしと仰せられているのもここであります。

そこでお祖師さまは、こういう決心ができたのも、虚空藏菩薩や恩師道善御房の御恩による、こ

のご恩に報いなければと、建長五年の四月二十八日、東天に昇る朝日に向ってお題目をお唱えになり、その日の正午を期して、諸仏房の持仏堂の南面で参集の大衆に向い、始めて法華経信仰の在り方を告白されたのであります。

これがすなわち、お祖師さまの立教開宗といわれるものであります。

2、御法難の意義

お祖師さま ご承知のように、お祖師さまほど一生の間に、多くの難を受けたお坊さまはありません。のこ法難 ン。建長五年（一二五三）四月二十八日の立教開宗の日には、まず、地頭東条景信の怒りを受け、いよいよ鎌倉に居を構えられてからは、いわゆる四ヶ度の大難をお受けになっていきます。わかり易く列挙いたしますと、

文応元年（一二六〇）八月二十六日

松葉ヶ谷御草庵焼討

（聖人三十九才）

弘長元年（一二六一）五月十二日

伊豆伊東御流罪

（〃 四十才）

文永元年（一二六四）十一月十一日

小松原御法難

（〃 四十三才）

文永八年（一二七一）九月十二日

佐渡御流罪その夜竜の口頸の座

（〃 五十才）

これを四大法難と呼びますが、この他にも、悪口罵詈、弟子檀那へのきびしい弾圧は、ほとんど数えきれないほどでありまして、竜の口の御法難の時は、お祖師さまの教団は、全く潰滅してしまつた、といつていいくらい全体に亘つての大法難でありました。まえにも申しましたように、お祖

師さまはそれを覚悟のうえで、法華經をお弘めになったのであります。そしてこのことは、お祖師さまがお祖師さまとなる大切な条件でありますので、よく知っておいて頂きたいのであります。

ご法難と それはまず、法華經というお経はどういうお経であるかということから心得ることが**第法華經** 一であります。お経のことについてはのちの章でお話いたしますので、ここでは**ご法難と法華經**との関係について申し上げましょう。

法華經では、このお経を信仰し、心を深くたもつ人びとを、みな菩薩（ぼさつ）と呼んでおります。ぼさつというと、人は頭に宝冠をいただいて美しい姿形をした。仏さまのような気高いお姿をすぐ想像しますが、法華經というぼさつは、けっしてそういうぼさつではないのです。わたくしたちと少しも変らない平凡な人間でも、法華經の精神をもって生きている人たちは、男でも女でも、みな、ぼさつなのであります。そしてこのぼさつの代表者となる方がいわゆる上行菩薩（じようぎよう・ぼさつ）といわれる方であります。上行菩薩は、末世といわれる濁った世に出て、お釈迦さまのご精神を体し、法華經を身をもって行じる方となっています。ところが、この上行菩薩を中心として多くのぼさつが末の世に出て法華經を弘めるといふ時には大へんな反対者が出て、その布教を妨げるとお経には説かれております。元来、法華經のご精神というものは、仏教の教えの根本的なものであります。この仏教の根本精神には、仏さまのご在世でさえ、ひじような迫害があるのでありますから、仏さまの滅後ともなれば、一そう、その妨害はひどくなるのだと、お経には説かれてあります。ですから、上行菩薩はこの妨害に対して、どこまでも信念を曲げずに法華經に殉ず

る覚悟をもって、世にお出になることになるのであります。いや、迫害妨害を受けないような生まぬるい布教では、かえって法華經のご精神を生かしていないことになって、そんなことでは法華經を身をもって行ずるばさつとはいえないのであります。ですから、お祖師さまが「難に会うことは大いに悦ばし、大いに悦ばし」とおっしゃったのも、そこにあつたわけであります。

上行菩薩 すなわち、お祖師さまのご法難は人間的には艱難苦勞そのものでありましたが、ご信仰の**ご自覚** のうえからは、かえって悦ばしいことであつて、これあるがために、お祖師さまは法華經に予言されたばさつとなられたわけであります。ことに竜の口から佐渡へかけてのお祖師さまは完全に法華經に説かれた道をお進みになったことになって、ついに上行菩薩としてのご自覚を深められるに至つたのであります。わたくしどもがお祖師さまのことを「南無本化上行 高祖日蓮大菩薩」と呼びするのも、そのためであります。本化ということは、久遠のお釈迦さまのお弟子ということで、わたくしどもが始めから素直に法華經のお題目を唱える信者となれたのも、同じくこの久遠のお釈迦さまのお弟子である「本化」の一分であるということになるのです。まことにありがたい光榮なことだと、つくづく思うのであります。

つまりお祖師さまのご法難は、法華經を身に読まれたということになるので、じつはこれは法華經の求めている要求に、応えられたことになるのであります。のちにも申し上げることになると思いますが、法華經は、けっして口にだけ読まれればよいというお經ではなく、今の時代には法華經の精神で生きていくようにということを法華經自体がわたくしどもに求めているのであります。お

祖師さまは七百年の昔、それをその時代に適應したかたちで実践されたお方であります。つまり、ご法難は、たんにお祖師さまを劇的なご生涯に終らせたというようなものでなく、これがなければ法華経もお祖師さまも、本当のものにはなれなかったのだということを、よくよく知っておいていただきたいのであります。

3、御書について

身延へ お祖師さまはこれらの大難にお会いになられながらも、文永十一年（一二七四、聖人五十ご入山、三才）の五月十二日には、鎌倉を去って身延に向われ、その十七日に初めてこのお山にお入りになりました。『立正安国論』以来諸難にも屈せず、三度までも国をお諫めになりましたが、ついに幕府の聴くところとならないことをお見通しになると、「三度諫めて用いられなければ去る」といういにしえの人の言葉もあるから、というお氣持や、弟子たちにもいろいろ教えなければならぬということもあり、かたがた自身も、日本の国についていろいろとお考えにならなければならぬことがおありになって、南部氏のご縁で身延へお入りになり、存外ここが氣に入ったからとて、ここにお住いになることになったのであります。

それから八カ年、おおやけにはほとんどこのお山をお出になることはなく、弟子の教育とご信者への説法のほかは御著述に向われるという法華三昧（ほっけざんまい）のご生活をお続けになったのであります。弘安元年（一二七八）お年五十七才のころからお祖師さまのご健康は勝れず、その

後一進一退の状態で、ついに弘安五年（一二八二）の九月、常陸の湯に湯治の目的でお山をお出になりましたが途中、武蔵池上の右衛門大夫宗仲の邸にお着きになってからは、ここを御臨終の所とお決めになって、翌月の十三日、辰の刻すなわち今の朝八時に、ついに六十一年の御生涯を終えられたのであります。

日蓮聖人 この波瀾に満ちた六十一年の御生涯にお書きになったものは大へんな数で、ひと口に四の御書 百余篇の御書と申しておりますが、こんにち断片として残っているものを集めますと、七百篇以上になるのであります。この多くの御書のなかからいくつかの御書を選んで「何々御書」と呼ぶことがあります、その一番有名なものが「五大部御書」であります。五大部とは、

立正安国論 （りっしょうあんこくろん）

開目抄 （かいもくしょう）

観心本尊抄 （かんじんほんぞんしょう）

撰時抄 （せんじしょう）

報恩抄 （ほうおんしょう）

の五篇です。この五篇の御書はそれぞれ量からいっても内容からいっても、お祖師さまの御書を代表するものであります。もっとも、この他にも教義上大切な御書がたくさんありますが、いまはこの五篇を代表的御書として、そのあらましを申し上げましょう。

立正安国　まず、お書きになった順序からいいますと、『立正安国論』が最初であります。この書論の献上　は、当時年々にうち続いた天変地夭飢饉疫癘に大そう心を配られていたお祖師さまが、お年三十六才の時の正嘉元年（一二五七）八月二十三日に起きた大地震によって、ついに日本の国の危機ということをお感じになり、改めて一切経を見直されるべく駿州岩本（今の静岡県富士市）の実相寺の経藏にお入りになって、この災難の由って来るところの原因を、諸経の要文を集めてお示しになったものであります。この御書の出来上ったのはご入藏から三年経った文応元年（一二六〇）五月廿六日と伝えられていますがさらにその辞句を推敲（すいこう）され、浄書したものを幕府に献ぜられたのは、その年の七月十六日であります。

『安国論』によりますと、当時しきりに起る災厄は、日本の国民が正法に背いて邪法に帰依しているからで、その邪法は法然上人によって唱えられた念仏の教えであるというのであります。こんにち日本の危機といえ、東西陣営の対立や、原水爆というような不気味な兵器による恐怖などによって起る、世界の歴史の動きがもたらす危機をいうのであって、天災である地震や風水害、それから起る飢饉（ききん）や疫癘（えきれい）（流行病）などを社会国家の危機とはいわないのであります。しかし、お祖師さまの当時は、誰一人このうちつづく不安の状態を国家の危機として受け取った者はなく、徒らに祈禱やまじないでこれをはらおうとするだけであつたのですから、この問題を社会的危機として受取り、その抜本的方策を建言されたことは、宗教者として、じつに立派なご態度だといわねばなりません。ことにお祖師さまの教理のなかにはたとえ自然の異変であつて人

為的な現象ではないにしても、こういう現象、つまり、人間の住んでいるこの国土に、異変がうちつづくということは、そこにいる人間とそのことと、けっして因果的に無関係ではない、という深い仏教々理があるのであります。表面はきわめて単純に見えますが、よく考えてみますと、なかなか深い思想をもっておられたことがわかるのであります。

立正安国 それからもう一つ、この御書には、お祖師さまのご生涯を決定するような、大切な意義論と予言 が含まれているのです。すなわち、うちつづく天災のほかに、さらに戦乱が、国の外からと国の内からと起るであろうということをこの御書は予言しており、それは幸か不幸か文永九年二月の北条時輔（ほうじょうときすけ）の謀叛と、文永十一年十月の蒙古来寇とによってこの予言は中（あた）ってしまったのであります。これによってお祖師さまは「未萌（未来に起ること）を知る聖人（しょうにん）」というご自覚を深められ、またこの御書の建白がもとでこのちお会いになる法難も、お経の色説ということになり、「日蓮は日本第一の法華経の行者」というご自覚を得られたことと、この二つの面からも『安国論』には大切な意義が含まれておりますから、この点も十分認識しておいていただきます。

竜口法難と

『開目抄』は文永九年（一二七二、聖人五十才）の二月、佐渡塚原の雪の中で書か開目抄の撰述 れたものであります。お祖師さまのお書きになったもののうちでは、一番長いものであります。まえにもチョットふれましたが、文永八年九月十二日お祖師さまが竜の口の額の座に坐わられたときは、お弟子檀越それぞれに難が加わって、信仰を捨てざる者が続出し、教団はほとん

と潰滅（かいめつ）の状態に陥ったのであります。そこで、信仰を捨てずお祖師さまにつきしたがっているお弟子や檀越（だんのつ）のなかにも、「一体、お聖人さまは本当の法華經の行者なのだろうか。本当の行者なら、お經にあるとおり、諸天の守護があってもよいのではないか、それがないところを見ると、お聖人さまの布教のやり方に、間違ったところがおありになるのではないだろうか。」というような疑問がおきてきたのであります。『開目抄』はそういう人たちに對するお示しの御書で、お祖師さまが、いかに真剣に法華經と取組まれているかということが、じつによく現われている御書であります。

すなわち、『開目抄』は、お祖師さまがご自身のお立場を、法華經という明鏡に照してお考えになった御書で、法華經というものに、ご自分をすっかりうち入れてしまわれた、という感じの御書であります。それだけに、本当のお祖師さまを知るにはこの上もない大切な御書ですから、つぎに申し上げる『観心本尊抄』とともに、御書のなかの最重要御書といわれております。そしてお祖師さまの教義といわれるものは、ほとんどこの御書に現われているばかりでなく、どういうお覚悟で今の日本に法華經を背負って立っておられるのかということも、かの有名な三大誓願（さんだいいがん）の文によってお示しになっているのであります。

お祖師さまのご本懷を『観心本尊抄』は『開目抄』の成立した翌文永十年四月二十五日にお書き著わした観心本尊抄 上げになったものであります。この時はお祖師さまは、北条時輔の謀叛などに驚いた幕府が、佐渡の一の谷（いちのさわ）にお移しして、少しは待遇も改められたときのこ

とですが、佐渡の法敵たちはどうしてもお祖師さまの命を取ってしまおうと、昼夜狙っていたときのことですから、ずいぶん危険に晒らされておられましたし、もしここで死ぬようなことにでもなれば、残した弟子たちにも自分の本懐を示しておかなかったことになる、それでは不憫であるからというお思召と、佐渡の御流罪によって、完全に法華経を身に読んだことになれば、お経のなかに出ている末法の導師である上行菩薩とは自分のことであるという深いご自覚とから、南無妙法蓮華経の信心の極地をお書きになったのが、この観心本尊抄であります。つまり、末法の導師上行菩薩によって弘められる『法華経』とは、いかなるものかということをお示しになったのがこの御書です。ですから、お祖師さまにとっては一番大切なお仕事ということになり、これをお与えになった中山の富木殿へのお手紙にも、「この事日蓮当身の大事なり。……国難を顧みず、五五百才を期してこれを演説す。」とあります。「国難」とは、現在の佐渡の流罪は幕府によるおおよけの難であることを仰言っているのです。

この御書の内容はお祖師さまの御書のうちでも一番むずかしいものでありますし、後でいろいろな教義にわたることもお話いたしますから、それとの重複をさけてここでは除くことにいたします。予言的的中 『撰時抄』は、身延へお入りになった翌建治元年（一二七五、聖人五十四才）六月十と撰時抄 日にお著わしになったもので前年十月の蒙古来襲が御執筆の契機となっております。まえの『本尊抄』をお書きになった時は、『安国論』で予言された二つの兵火の難のうち、一つの自界叛逆（じかいほんぎやく）の難（自国のうちで争いが起るわざわい）は、文永九年二月に起っ

てまさしく的中したため、御自身もはっきり「この時地涌千界出現して」とまで御自覚のほどを示されましたが、残る一つの他国侵逼（たこくしんびつ）の難は（他国が攻撃してくるわざわい）まだ起きていませんでした。ところが文永十一年の十月に事実としてそれが現われたのですから、お祖師さまの予言は、不幸にもみなの中してしまったわけであります。

ここでお祖師さまの歴史のお立場というものは、全く確固としたものになったのであります。すなわち、法華経に予言された菩薩として流罪死罪や、悪口罵詈（あつくめりゝ悪口やののしり）にお会いになったこと、それから『安国論』で警告された予言がいずれも中（あた）ったこと、この二つの事実は、釈尊の御使としてこの世界に遣わされた者であり、未萌（みぼう）を知る聖人である、ということになります。してみると、法華経が描いている仏教の歴史というものは、お祖師さまによってみごとに証明されたことになります、つまり、お祖師さまは、法華経の歴史に選ばれてお生れになった方であるし、御自身にしてみれば、進んでそういう歴史を選ばれたのだ、ということにもなりましょう。ここが『撰時抄』という書名の出てくるゆえんであります。これは、『立正安国論』から出発された宗教者・信仰者としてのお祖師さまが、一つの完成をお示しになった段階でありまして、じつに大切な意義をもつものであります。

恩師の死去 『報恩抄』は、『撰時抄』ができました翌二年（一二七六、聖人五十八才）の三月十と報恩抄 六日に、恩師・道善御房（どうぜんごぼう）が清澄で亡くなれましたが、その追善としてお書きになり、その年の七月弟子日向上人に持たせて墓前で読ませたものであります。

御自身の生い立ち、学問に向った心構え、そして法華經のご精神を得てその行者となり、いままでになかった南無妙法蓮華經の大法を弘められるようになったこと、これらはみな恩師のお蔭であって、この廣大無辺な御功德は、花が根にかえり、真味が土にとどまるように、道善御房の精靈の御身に集まるであろうとお述べになったものであります。

お祖師さまの仏教修行の目的は、いichずくに報恩ということにありました。法華經に忠実に身命を捧げられたのは、教主釈尊の御恩徳に報いるためであり、立正安国を叫び、日本の国の謗法の科を諫められたのは、国恩・一切衆生の恩に報いられるためであつたのであります。そして、それができ得たのも師恩によるものであると、師の恩に対する報謝の倫理を示されたのが、この『報恩抄』なのであります。じつに知恩から始まって報恩に終られたのが、お祖師さまの宗教であつたといえるのであります。

信仰のすす この五大部御書の他にも大切な御書がたくさんあることはまえにも申しましたが、御めと書簡 著述としてお書きになったものでなく、檀越の御供養に対する御返事としてお与えになった、『何々御返事』『何々御消息』といわれるものにも、じつにありがたいものがたくさんございます。かえって、それらにこそお祖師さまのご人格が現われていて、ゆたかな人間味がうかがえるものが多く、みなさまも、ぜひ直接それらの御書についてお祖師さまを知っていただきたいと存じます。四条・南条・池上氏などにお与えになったお手紙類をごらんになればよいと思います。

二、法華經に示された釈尊のみ心

お釈迦さまの教 仏教には經・律・論の三藏（さんぞう）というものがあります。「經」（きょう）と經典の結集（う）はお釈迦さまのお説きになったものの「律」（りつ）はお釈迦さまの教団内で仏教徒のいろいろ守らねばならぬ掟として定められたもの、「論」（ろん）はお釈迦さまの滅後インドに出た論師といわれる多くの仏教の学者思想家たちによって、お經の思想を述べられたものといひます。この三藏の数は大へんなもので、ひと口に八万四千の法藏ともいわれております。ところが、この經典は、いずれもお釈迦さまが入滅された後にできたもので、とくに大乘經典といわれるひじょうにすぐれた内容をもった『法華經』とか『阿彌陀經』などのようなお經は、お釈迦さま滅後數世紀も経ったのちにできたものであります。してみると、「經」というものは、お釈迦さまのお説きになったものということにならないのではないか、という疑問も出てまいります。が古代のインドでは文字によって書くということが行われずお釈迦さまのみ教えも、みなお弟子たちの記憶が言葉として現われ、耳に伝えられて後世に残ったのでありますから、『法華經』を始めて文字に書き残された方も、恐らくそれをお釈迦さまの教えとして自分の心の奥底に受取ったものを真剣な氣持でつづられたことに相違ないと思うのであります。つまり、直接お釈迦さまのお口から出たお言葉ではないにしても、長いあいだ、仏弟子たちによって口伝てに伝えられたお釈迦さまの御精神が、弟子たちの真面目な深い体験をとおして、莊嚴なかたちとなって表現されたものが、

『法華經』であるといえるのであります。いつ、どこで、だれが、ということのはっきりといえないことは、それがとりもなおさず、自分を捨ててひたすらに仏さまの御精神を書きつづった証拠であらうと思います。こう考えてきますと、法華經は、そのまま釈迦さまの御精神が傑れた文学的表現力をかりて現わされたものと、受取れてくるのであります。いな、そう受取ってこそ、天台大師やお祖師さまのような、生きた法華經としてお経が自分のものになるのであります。

方便品 そこで法華經にはどのようなことが説かれてあるのか、というお話に入るのであります。**の内容** 専門的に勉強される必要もありませんから、ふつうおつとめの時などに恐らくお読みになっている、『方便品』と『壽量品』のあらましのお話をすすめたいと思います。法華經は全体で二十八品、つまり二十八章からなっております。前半は、仏という仏、すなわち、釈尊はもちろん、三世の諸仏はいずれも『妙法蓮華經』を説かんがために、世にお出ましになったのだということが説かれております。そしてこの妙法蓮華經すなわち法華經は、諸仏の御智慧であって、この御智慧はものの正しい見方をお示しになったものであります。ふつうわれわれが「よい」とか「わるい」とか差別的に見ることも、この仏の御智慧から見れば、けっして正しい判断ではなく、差別のすがたのなかに、そのまま真実のものがあると見るのが仏の御智慧の見方なのであります。そういう見方を『方便品（ほうべんほん）』には「仏の知見（ちけん）」とお説きになっています。そしてこの「仏の知見」は、仏さまからお説きになるときは「妙法蓮華經」というみ教えになるが、われわれ凡夫の心のなかには、元来、そういうものを持っているのだ、ということがくりかえし説か

れているのであります。つまり、「妙法蓮華經」はみ仏のお心の奥底に秘められた、お悟りとしての智慧であり、お言葉をとおせば法華經というみ教えになるが、同時に、人間だれの心の奥底にも平等に持っている宝珠である、というのが法華經前半のご趣旨であって、その骨子が『方便品』に説かれてあるのであります。いいかえれば、「妙法蓮華經」というのは、(一)この人間世界に起るありとあらゆる物事を、正しく素直に見る見方と、(二)それを悟られて智慧としておさとしになったみ仏のお言葉と、(三)われわれ人間が持っている本来尊い価値とを、一しよにしていゝ現わした言葉であります。

この三面の意味があるにしても、お経としては、(二)の、み仏の智慧としてのお言葉という意味が中心となっていて、『方便品』以下の第十四章までは、このみ教えがどういうぐあいに、末代のわれわれまで普及させられるか、ということがこん切に説かれております。

寿量品 後半の十四章は、いうまでもなく『寿量品』(じゅりょうほん)が中心となっていて、この**内容**の「妙法蓮華經」をお説きになっているお釈迦さまは、けっして最近、仏となられた方ではない、遠い久遠の昔に仏となられた本仏である、ということが説かれてあります。

仏が久遠の仏であるということはどういう意味があるのかと申しますと、さきの『方便品』のお立場だけに終りますと、尊いには尊い、何が手の届かない高い所にある宝のような感じがして、すぐには自分のものとならないといううらみがございます。すなわち、ただ理屈だけに終らないとも限らない、という気がするのであります。ところが、ここに『寿量品』が説かれて釈尊が永遠のみ仏であ

るとなりますと、み仏は現在だけのお方ではなくて、過去へも未来へもわたって、み仏の活動をおつづけになるお方であるということになります。過去・現在・未来にいつも常住するみ仏であるということとは、いつ、どこでもいらっしゃるみ仏ということ、いつ、どこでもということとは、わたくしが釈尊といつもご一しょにいる、ということでもあります。ご一しょにいるということになれば、さきの『方便品』でいう御智慧も、特別そういうものを磨き出さなくとも、釈尊のご功德とさせていただいていることになって、妙法蓮華経というものが自分のものとなったという感じに入るのであります。

法華経の肝 つまり、『方便品』を中心とする法華経の前半では、智慧を中心とした厳しい感じの心**〓**寿命品 する仏さまが、その御智慧を「妙法蓮華経」としてお説きになっていたものが寿命品を中心とした後半へはいりますと、久遠のみ仏は慈悲が中心となって、その御慈悲を「妙法蓮華経」として末代永遠にたちまち伝えさせるということが強くなっているのです。したがって「信」ということが仏さまの智をいただく根本条件となり、「信解」とか「随喜」とかいう言葉で仏と一つになることが強調されております。わたくしどもの随喜し、信心する姿こそ、み仏の御智慧と御功德とをいただいた姿なのであります。

お祖師さまの信者で下総（しもふさ〓今の千葉県）の曾谷（そや〓市川市曾谷）にいた曾谷教信という方がおられます。深く法華経の信仰にはいり、お祖師さまに帰依しておられました。お父上を亡くされてから十三年間というもの、毎朝「自我偈」を誦誦して御回向しておられました。そ

のことを身延のお祖師さまにお伝えしたとき、お祖師さまは大そうその孝心に感激され、一通のお手紙をお与えになっています。その御書を法蓮抄と呼んでおりますが、そのなかに

「今、法華經寿量品を持つ人は、諸仏の命を継ぐ人なり。」

というお言葉があります。このお手紙には「それ法華經は一代聖教の骨髓なり。自我偈は二十八品のたましいなり。三世の諸仏は寿量品を命とし、十方の菩薩も自我偈を眼目とす」というお言葉があつて、『寿量品』が肝要であることをねんごろにお示しになっているのです。

開目抄 それはどういうわけからであるかと申しますと、『開目抄』のなかに、じつに興味深い**ご説示** お示しがありますから、それをお借りして申し上げましょう。

『観無量寿經』を拝見すると、韋提希（いだいけ）夫人は惡逆の子阿闍世（あじゃせ）のために幽閉されて、すでに殺されようと思いますが、そのとき、夫人は心のなかで釈尊を念じ、「どういう因縁があつて、わたくしはこんな不孝の子と親子の關係をもつたのでしょうか。阿闍世の無道ぶりは、提婆達多（だいはだた）にそそのかされてのことですが、釈尊はまた、どうしてこんな惡人提婆とご血縁になんかつたのでしょうか」と訴えました。これに対して、『観經』では釈尊はなにもお答えになっていません。そこでお祖師さまは、「しかれども仏答えたまわず。されば觀經を誦誦せん人、法華經の提婆品へ入らずば、いたずらごととなるべし。——されば仏この疑いを晴させ給はずば、一代の聖教は泡沫にどうじ、一切衆生は疑網にかかるべし。寿量品の一品の大切なこれなり」と、『開目抄』にはお述べになったのです。

しかし、提婆（だいば）と釈尊とのご血縁、韋提希（いだいけ）と阿闍世（あじゃせ）とが親子であること、この疑いを晴らすためにも『寿量品』の一章が大切であるということは、ふつうの常識ではわからないことです。それはこういうわけなのです。寿量品では釈尊の久遠の御壽命が顕わされましたが、これを「過去常」（かこじょう）と申します。過去常とは始めのないということでもありますので、釈尊が無始の仏であらせられれば、三世の諸仏は皆釈尊の分身となります。そういうことになる、いままで各修各行といって、ばらばらに肩を並べていた諸仏も、釈尊と団体になってしまいますから、仏教に始めてたましいが入ってくるのであります。諸仏ばかりでなく、一切の人びとも久遠の釈尊とひとつの命につながってくるのであります。してみると、「いま、寿量品をたもつ人は諸仏の命をつぐ人」となつて、韋提希夫人の疑問も、ここにやっと解けてくるわけがあります。『法蓮抄』のお言葉は、そういう意味で『自我偈』を読みたてまつるわたくしどもの功德のさながらを、「仏の命をつぐ」と仰せられたのであります。

三、御本尊の意義

寺院に安置され たいていのお寺や教会に安置されてある御本尊は、いわゆる「一塔両尊四土」にいる御本尊 （いっとうりょうそんしし）と呼ばれている形式の御本尊であります。まえに述べました法華経のご精神がわかっていただければ、自然に御本尊の意味もわかっていただけるので

あります。法華經のご精神と申しまして、それは法華經の意味というようなものではなく、法華經のたましいであります。『寿量品』が法華經の肝心かなめであるということ、いうまでもなくお釈迦さま御一代の教えのたましいということなのであります、そのお心が、御本尊のお姿に表現されているのであります。

まず、一塔兩尊四士の形からご説明いたしましょう。中央が宝塔をかたどった「南無妙法蓮華經」で、その向って左が「釈迦牟尼仏」、右が「多宝如来」です。多宝仏の右に「上行菩薩」「無辺行菩薩」の順にお並びになり、釈迦仏の左に「浄行菩薩」「安立行菩薩」の順にお並びになります。それから四菩薩の前面左右に「文殊菩薩」と「普賢菩薩」とが大たい安置されて居ります。わかり易く図示してみます。

持国天王	不動明王	広目天王
無辺行菩薩		
上行菩薩	文殊師利菩薩	
多宝如来		
南無妙法蓮華經	日蓮大聖人	
釈迦牟尼仏		
浄行菩薩	普賢菩薩	
安立行菩薩		
毘沙門天王	愛染明王	増長天王

このうち「文殊」と「普賢」の二菩薩の安置されていないお寺も多いことと思ひますが、なくともさしつかえはないのです。「一塔」というのは中央のお題目、「両尊」というのは、「釈迦」「多宝」の二仏「四土」とは、「上行」「無辺行」「浄行」「安立行」の「四菩薩」のことで、これで御本尊の急所は尽きていますのであります。もっとも、お祖師さまのおマンガラを複写したものが安置されていれば、それに越したことはなく、先師の書写されたおマンガラでも同じことであります。お木像にした「一塔両尊四土」というのは、このお祖師さまのおマンガラを中心をお木像で表わしたまでのことであります。

御本尊という意味は、教義のうえではいろいろむづかしい説明もありますが、平たく申せば、「われわれの帰命したてまつる、根本の仏」「信心のこころを託したてまつるとともに、み仏の光がその信心をお包み下さる依止所」とでも申すべきものであります。むかしから、阿弥陀如来や薬師如来を本尊としたお寺はたくさんありましたが、この寿量品の如来を御本尊としたお寺は、インド、シナ、日本のどこにもなかったもので、釈尊御入滅後、二千二百二十余年を経て、お祖師さまが始めてお現わしになったものであります。まえにも「諸仏の命」というお言葉を出しましたが、寿量品の久遠のお釈迦さまは、弥陀も薬師もすべての仏を久遠の御寿命の中に包んでしまわれたお方で、ただ「南無妙法蓮華経」と申し上げるより他にいい現わし方がないのです。この有限と思われたお釈迦さまが無限絶対のみ仏となられたのは、法華経の第十一章宝塔品のとく、その宝塔の中の多宝仏とお並びになった釈迦仏が、第十五章の涌出品で上行、無辺行等の無数の大菩薩を大地

からお召しになって、「われ仏を得てよりこのかた寿命は無量無辺あそうぎこうである」とお仰せになった『寿量品』のときであります。この釈尊の無限の御寿命を現わすためには、四大菩薩を代表とするいわゆる「地涌のぼさつ」の御出現が必要だったのです。そこで、久遠の釈迦仏を表現するにはこの四士を脇士としなければなりません。そしてこの久遠の如来は、ただわれわれにお拜まされるみ仏というだけでなく、同時に久遠の御寿命の種をわれわれに相続させて下さる如来でもありますから、「南無妙法蓮華経」と七字をもって象徴するのであります。いままでの仏教の御本尊は「下から上へ」という意をもった本尊ばかりでありましたが、お祖師さまのお現わしになったこの寿量品の御本尊は、「下から上へ」と共に、「上から下へ」の意をもった未曾有の御本尊であります。ゆえにお祖師さまはおマンガラに、「仏滅後二千二百二十余年の間一閻浮提（世界中）に「未曾有」とお書きになったわけであります。平たく申して、御本尊が的となると同時に、矢となるというような意味の御本尊は、じっさいいままでにどこにもなかったものであります。これはお祖師さまが深く法華経の御心を読まれ、第十五章から第二十二章までの世界に、ほんとうの一念三千の仏種の心を御信仰をもって汲み取られたためにほかなりません。ですから、わたくしどもはこの御本尊に対したてまつり、朝夕、自分の信心をいただくともにお預けしなければならぬのであります。

つぎに「持国、増長、広目、毘沙門」や「不動、愛染」等の諸天が、なにゆえ四方に陣取られたかと申しますと、これは寿量品の如来を東西南北から御守護申し上げるという意味と、信心の行者

である。われわれをも御守護下さる意味とが現われておるのであります。そしてお祖師さまの御木像を安置するわけは、昔は「御影堂」といって別棟のお堂に安置しましたが、唯今は小さな寺では広い敷地もございませんし、この御本尊を法華經の心から感受し、お現わしになったわれらの大導師として、御本尊の中央下段に御安置するのであります。

一尊四士形 それからだだ今の寺院・教会ではあまり拝見いたしません。お木像で「一尊（釈式の御本尊 尊）四士（上行等の四菩薩）」とお呼びする御本尊の形体もございます。お祖師さまの御在世にすでに有力なご信者方には造立なされた方もあるのでございまして、これもおマンガラや一塔兩尊四士とところは同じであります。ただ、お祖師さまから弟子、信者に下されたおマンガラは、数に限りもありますので、しぜん今日のような御本尊の形を木像に刻むようになったものであります。

最後に、「創価学会」が間違った考えから、われわれの寺院の御本尊をけなしたり、悪くいってありますので、そのことについてひとこと申し上げておきましょう。

御本尊の意義と形式 御本尊の意義はまえにも申しましたように、根本の帰依仏として寿量品の如来、久遠の釈迦牟尼仏と、はっきりきまっておるのであります。それをお祖師さまは大マンガラに御図顕になり、御信者の方のなかにはさらに一尊四士として造立されたのであります。今日われわれ寺院、教会のいわゆる一塔兩尊士は、それと何ら差別のあるものではありません。お祖師さまも、「一念三千の仏種がなければ、木像も画像も、本尊としてのみたてまつることは無意味

である」という意味のことを仰せられています。一念三千の仏種こそ、寿量品の久遠の釈尊によって成就せられた御功德でありますから、形式の相違はあっても、その仏さまを現わしたてまつたマンガラも、一尊四士も一塔両尊四士も、みな同じであるべきであります。

それをかれらは、弘安二年にお祖師さまがお書きになったというおマンガラを、楠板に彫ったいわゆる板マンガラでなければ、本当の御本尊ではないというのは、お祖師さまがどこにもお仰せになっていない、出鱈目な説であります。まして、その彫ったもののおマンガラも、お祖師さまの御筆ではないというに至っては、言語道断のふるまいといわねばなりません。ですから、かれらが何とぼざいても、けっしてそれにかかずらわる必要はございません。今日学会の人たちや大石寺派の方でやっている本尊自慢は、その派祖である日興上人でさえ、何ら書きのこされていない後世の人によってでっち上げられた虚説でありますから、いわばかれらは恩師に敵対する無道の者なのであります。

御本尊と　そこでついですから、どこのお寺にもよくおまつりしてある、「鬼子母神さま」とか**守護神**　「毘沙門さま」について、お間違いのないようにご注意申し上げます。

鬼子母神にしても、毘沙門さまにしても、また、帝釈さまにしても、いずれも法華経にそのお名まえが出てくるお方で、みな法華経が未来永遠にわたって流れて行くことを念じ、その流れていくとする願や誓いのお手伝いをする法華経信仰者を、みずから守護することをお釈迦さまの御前で誓った方々であります。ゆえに、法華経の信仰をもつわたくしたちをお守り下さる方でありますか

ら、しぜん別にこれを勧請して拝もうという心持になるのも道理であります。これはけっしていけないことではありませんが、御本尊としてはさきに述べたように、げんぜんときまっていることではありませんから、これを御本尊だと思つてはなりません。お祖師さまも、日天・月天・梵天・帝釈等にお祈りになっていらつしやることもありますから、さしつかえありませんが、御本尊の釈迦仏とは、はっきり区別した心がまえが必要です。そしてどちらかといえば、余りたくさんそういう方々をおまつりしない方がよく、おまつりするばあいは、できればその鬼子母神なり毘沙門のうしろに「南無妙法蓮華経」のお題目を掲げたほうがよいと思います。しかし、お題目さえ掲げたら狐でも狸でもまつつてよいということはずつたにない、そんなことをすれば、それこそ創価学会の人たちに非難されるものとなります。

四、御題目のこころ

釈尊御一 日蓮宗の信者の方は、他宗の人と違って、よく御経を読みます。少し熱心な信者でした**代の眼目** ら、方便品や自我偈は朝飯前で、提婆品なども読む方がおります。まことに結構なことであります。それだけにお経をチットも読めない方は、「私はお経はチットも読めないのです……」といつて恥かしがられるようですが、そういう方にはぜひ「お経がよめなくとも、心の底から信じているお題目が唱えられれば結構なのです」と、教えて上げていただきたいのです。

では、なぜそんなにお題目が尊いのであるか、これからそれについて申し上げましょう。まえに法華經のお話を申し上げたときにも述べましたが、法華經はお釈迦さま御一代のみ教えのなかの肝心で、寿命品はその法華經の肝心ということになります。そして「南無妙法蓮華經」はこの寿命品の肝心でありまして、仏御一代のたましいということになります。これは法華經のころをよまれたお祖師さまの御信仰から得られた結論であります。たんにお祖師さまの独断ではなく、シナの大台大師というお方もそう見られ、お祖師さまはそれを身をもって実証せられたのであります。御法難の意義がわかっていただければ、それはおのずから明らかとなります。

末世の衆生へ たしかに法華經のご文を見れば、お釈迦さまがお弟子に説かれている御説法である**の仏陀の慈悲**で、お釈迦さまのおいでになったその時だけのことがらのように思えますが、この經の第十章から第十一章以下のご文は、明らかに仏御入滅後のわれわれのためにとどめおく御經であることが説かれているのであります。そして末世の今日では、それがお題目、すなわち、南無妙法蓮華經の形で広まっていく、ということが示されているのであります。まことに釈迦牟尼如来の広大な御慈悲に感激せざるを得ません。むしろ、法華經は仏さまのお弟子のためではなく、わたくしたちのためのものなのです。その御慈悲のお姿が、あの御本尊でありまして、その御慈悲のみ声が、このお題目なのであります。お祖師さまは、「釈尊の菩薩のときに積まれた御功德も、仏と成られてからの御功德も、みなこの妙法蓮華經の五字に具足している。ゆえにわたくしたちがこの五字を受持すれば、しぜんにその御功德はゆずり与えられているのである。」ということ『観心本

尊抄』に仰せられています。（「受持」ということは、深い信心によって手ばなさずに唱えたもつことでもあります。）つまり、「南無妙法蓮華經」とお唱えしているわたくしたちの敬虔な姿は、そのまま久遠の釈迦如来の御姿なのでございます。仏さまはつねにそれを末世のわれわれに語ろうとされているので、いわば、わたくしたちの唱えるお題目のこえは、釈迦如来の御こえなのであります。お自我偈のなかに、「一心に仏を見たまつらんと欲してみずから身命を惜まぬ者の前に、如来は大勢のみ弟子と共に姿を現わし、その人に向って語るであろう」という意味のお言葉がありますが、そのお姿こそ御本尊の姿であり、この「語る」という如来の御こえこそ、わたくしたちの唱える「南無妙法蓮華經」なのであります。なんと有難い御經であり、お題目であります。ゆえにお祖師さまは、「お題目に一分でも疑いの心をもっている者は、成仏はできないであろう」ともまた、「ただ南無妙法蓮華經と唱えて仏となることが肝要である」とも仰せられております。お題目と御本尊、これは一体不二のものでございます。これだからこそ、御經がよめなくとも、お題目だけで仏になれることを教えてやっていただきたいのであります。

この御本尊とお題目の教義は、お祖師さまが一生のあいだ身をぎせいにしてお弘めになったみ教えの根本でありまして、さきに述べました『観心本尊抄』という御書は、このご教義がこまかに説かれてあるのであります。

五、日蓮宗の安心と寺庭婦人

安心とい 「安心」は「あんじん」と読みます。ふつうわれわれが心配ごとがなくなつて、「やうこと」と安心した」などというばあいは、「あんしん」ですが、仏教の安心は「あんじん」で「あんしん」とはちがいます。どういふことかと申しますと、すなおな心で仏さまのお言葉にしたがうことができ、心おだやかに、何のわずらわされることのない、広い心の境地をいうのであります。これは仏教の最後究竟の境地でありまして、いずれの宗派でも、これを目指していろいろと教えを説いたり、行をしておるのであります。では「日蓮宗の安心」とはどういうところにあるのか以下つぎの順序でお話をすすめて行きたいと存じます。

1、個人の安心

ゆたかな 人間はだれでもこの世に生れた者は、一度は死ななければなりません。死ぬまでの一生心の世界には、いろいろな浮き沈み、かんなん苦勞がございます。欲望というものは限りのないもので、これでいい、というところはないようであります。それだけに日常みたされない心で活きているのでありますが、静かに考えてみれば、ばかなことで、得られた満足なども吹けば飛ぶようなものであります。ここに何か絶対な、変らない境地、ゆたかな心の世界を求めてまいります。そこに宗教というものが生まれてくるのであります。「苦しい時の神だのみ」という言葉があります。が、そんなときだけ神仏を頼むのは、人間の勝手さ、というものをばくろしているのです。神仏は頼んで何かもらおうとするものではないのです。ほんとうの宗教はそんなことを説いているのでは

ないのです。仏教でもキリスト教でも、世界的宗教となっているものは、みなそうであります。お祖師さ お祖師さまは、ご一生ご苦勞のしつづけで、身延にいらした晩年がわずかに、「心やすまの指針 く法華經を讀誦しておられた」と仰せられているようですが、それさえ、地方に起きたお弟子や信者に対する迫害には、心をいためているいろいろお指図をなされているような次第です。それでいてお祖師さまほど大安心を得ておられた方はございますまい。これはどこから生まれた安心心でありましょう。いうまでもなく、法華經に身も心も捧げてしまわれた結果、到達された御安心だったのであります。「ともかくも法華經に名をたて、身をまかせたまうべし」とはお弟子に教えられたお言葉ですが、御自身はそこに行きついておられたのです。すなわち、限りある命をもったお祖師さまも、法華經に名をたて身をまかせられて、無限の生命をおつかみになっていらしたのであります。久遠の仏さまに絶対に帰依し、法華經に安住せられた結果「現在は見えて法華經の行者なり。未来は決定として当詣道場なるべし」という大安心に住せられたのであります。

地球に人間が生きるようになってから、だれ一人死なぬ者はありませんでしたが、久遠のみ仏に命を託した、法華經への信心の境地は、その有限から無限の命となっていくのです。「現在は見えて法華經の行者」ならば後生は「決定として」本仏のいらせられる道場にまいることができるのであります。「当詣道場」とはそれを仰せられたものであります。われわれは、日々夜々、今日の生活の恵みに感謝しつつ、南無妙法蓮華經とたもって、このお祖師さまのごとき、ゆたかな心となつて、強く生きて行かなければなりません。ここに「個人の安心」すなわち、「わたくしの安心」が

あるのであります。

2、家庭の安心

信仰と家　しかし、個人々々といっても、われわれはただ一人で生きている体ではありません。生
庭・寺庭　まれたときから親子の關係があり、やがて兄弟、夫婦の關係が生じてまいります。つま
り、人間は家庭というものをつくって、社会的に生きているものであります。家庭というものがな
ければ、人間の個人的生活というものも、しっかりした責任のあるいとなみができないばかりであ
りましょう。いいかえれば、家庭は社会の一単位であって、家庭内での一人々々には、それぞれの
道徳というものがなければなりません。夫には夫の、妻には妻の、兄弟、姉妹、それぞれが互
いのあいだの道義というものがあって、それが家庭の秩序をたち、平和を維持していくのであり
ます。

そこで、信仰というものが家庭にどう反映していくかということが、重要な問題となつてまい
ります。個人の持つ信仰は個人の安心をもたらしますが、そこから出る生活態度は、ただちに家庭に
いろいろな影響を与えるものであります。ことにそれが寺院や教会であるばあいは、一般の家庭と
はちがった雰囲気というものをかもしだしているはずです。よく、「お寺だから」という言葉は、
よい意味にもわるい意味にも使われて、それが社会的に特殊な位置を占める存在のように思われ、
お寺の子弟というものは、とかく妙なコンプレックスをいだき「坊主になんかなるものか」、「誰

がお寺なんか継いでやるものか」といったような捨てせりふを吐く子を見かけますが、まことに残念なこととあります。お寺や教会の子は必ず坊さんにならなければならない、という規定はありませんし、それぞれの才能に応じたように伸ばさしてやることが、親の責任でもあります。しかし、ここで「一般の家庭とはちがった雰囲気」といったのは社会的特殊存在というような意味でいっているのではないのです。すなわち、釈尊のみ教えを本当に生きたつかみ方をし、それを身をもって実践されたお祖師さまの、その尊い法の血脈、信心のいのち、といったものを代々受け継いできた法城として、寺院や教会には、ひとつの権威と誇りというものがあります。これは自分のわがままから壊すことのできないものであります。この権威と誇りとを身をもって受け継ぎ守ろうという自覚のおこらない限り、寺の子だからといって無理に坊さんになる必要はありません。無理になつたばあいは、かえって逆効果になることがあります。

生活態度と しかし、だからといって、現に住職や主管をやっている方、またその妻としての婦人**宗教的安心** には、子弟たちに、寺族のもつ正しい意義と誇りを持たせる責任と義務がありましよう。ことに母としての奥さんは、家族に及ぼす影響力を考えて、十分、善導していただきたいものです。具体的にいえば、ご自分だけの信仰や安心だけで止まることなく、お子さん方にも仏教の正しい知識の手ほどき、信仰の正しいあり方を授けてほしいものです。そして家庭を明るく、正しい方向に導き、一寺揃って信仰ゆたかな家庭になるよう努力していただきたいと思ひます。その寺族から、たとえ商人、勤め人、学者、技術者、芸能人と、それぞれの畑の人を出そうと、さすがに寺

院の子弟だけあってちがう、といわれるよう養育されたいのです。つまり、住職とその妻とのものも正しい信仰、それが結実して生活態度に現われる宗教的安心（貧富の差などというものと関係なくもてるのが信仰の勝れた徳だといえます）が、子弟たちにもなにか尊いものを感じさせ、おのずと宗教的ムードのなかから生れる「安心感」を得て、一般に宗教的信仰を持たない家の子弟とは異なった人柄をつくるような心がけたいものであります。寺院や教会が、昔とちがって一般家庭化した今日では、せめてそれぐらいの光りは放っていききたいものであります。

以上のような家庭が寺院、教会内でつくられ、寺族が一致して気持よく平和にそれぞれの職分を全とうして行けたら、そこに「家庭の安心」というものがあるといえましょう。これは資産があつて、豊かな生活がしていただけるからくる安心とは、質的にひじょうに異なつたもので、正しい意味の信仰なしには、とうてい作れるものではありません。

3、国家社会の安心

信仰と社会

「家庭の安心」さえ一種の理想で、容易につくれるものでないのに、「国家社会の安心」などが寺院婦人に望めますか、とお考えになろうかと存じます。もちろん、国家社会の問題、政治や経済、あるいは社会機構の問題、または世界の国際情勢などというものが複雑にからみ合っているので、全くの無力に近い寺院の婦人に大それた希望や要求を出すものではありません。しかし、さきほども、「家庭は社会の単位」だということを通して。してみると、わ

れわれ寺院教会といえども、けっして特殊な例外に属するものでなく、社会の一員としての、日本の一国民としての権利と義務と責任とを持っていますのであります。さらに信仰的つながりのうえで檀信徒というものをもっている以上、寺院や教会は、いっそう社会的には意義も深く責任も重いのであります。檀信徒にはいろいろの職業や階級があつて、いちように扱うわけにはいきませんが信仰的なつながりにおいては、おなじ関係におかれてゐるものであります。そこには寺庭婦人としての立場もおのずから規定され、ひとつの態度が要求されてまいります。具体的なことについてはのちにもふれますから略しますが、ひと口にいって檀信徒に対するよき話し相手、よき信仰的伴侶となつてやる、ということが必要だろふと思ひます。お祖師さまは、「女人となることは物に随つてものを随える身なり」と仰せられました。これは夫に対する妻の道をお述べになつたものですが「女人となることは」というひと言に女性の女性たるゆえんをいとおおせておられるのでして、檀信徒という対人関係においても、そこに生ずる種々の問題処理においても、寺庭婦人は、「女人となること」を十分考慮していただきたいものであります。

安心の また、寺院や教会は、その土地のいろいろの公共団体、公共事業に關係しがちなものであ**反映** ります。そういうときはもちろん住職や主管者が表向きの責任者となりましようが、その夫人の位置・役柄というものも、大そう重要になつてまいりましよう。また、その土地における日蓮宗寺院、教会のグループ、あるいは、仏教会の名のもとにおけるそういうグループには、最近目立って寺庭婦人の活動される範圍が拡まつてきました。そういう際にも、家庭的信仰安心からつく

りあげられた人柄というものが、対象というもののいろいろな反映して、「和の美」とでもいうべき効果が上げられると思います。それはむろん、個人自身の深い信仰による安心感が原動力となっていることは当然ですが、自己の家庭的ムードから出る対手への影響力というものは、ゆるがせにできないものをもってあります。同宗のばあいでしたら、それが打って一丸となって、大きな日蓮宗運動になりますし、各宗合同の仏教会のばあいでしたら調和の美しさをつくり出してゆくことでありましょう。御承知のように、お祖師さまの宗教理想は「立正安国」でありまして、こういう高い理想も、じつは皆さまの、ささいな努力から築き上げられて行くものだということを十分ご承知おき願いたいのであります。この理想を「国家社会の安心」と、大きな題目で申し上げたわけであります。要はなんとしても、「個人」「家庭」の「安心」が大切であることは、申すまでもありません。

六、御廻向の意義

寺院・教会というものは、いうまでもなく布教の道場であります。たんに法要葬祭の会場ではありません。ある布教家（修法師も含めて）の努力によって新しくできた教会は、言説なり修法なりによって生まれたばあいが多くいでしょうから信徒の会合を主とした布教が中心となっていて、と思われるのですが、昔から先師によって経営されてきた寺院は、固定的な檀徒によって維持されて行くもので、しぜん、葬祭や年忌法要が営まれる方が多くなっています。法要葬祭といえども、広い意味の

布教であることはいふまでもありませんが、そこでは「廻向」ということが、どうしても中心となつてまいります。そこで、ここでは廻向ということはどういう意味か、どうして行われるのか、また、なぜ行わなければならないのか、といったようなことをお話して行きたいと存じます。

廻向の 「廻向」という言葉は、梵語のパリナーマを訳して「廻転趣向」といい、さらに縮めて廻意味 向としたものであります。すなわち、自分の一切の善根功德を転じて他に趣向せしめるから「廻向」というのであります。善根功德とは、自分への利得は考えないで、他の利得のためにする行為といったらよいかと思ひます。「趣向」はよんで字のとおり、「おもむきむかうであり」ますから、「めぐらしむかう」または、「まわしむかう」すなわち「廻向」であります。

仏教でいう廻向ということとは、もちろん対象があるわけでありますが、それはふつうに考えられているような、死者ばかりには限られていないのであります。なぜならば廻向ということ欲するのは、菩提心をおこして善根功德をしようと、つねに念願している菩薩でありまして、菩薩はつねに他人のためによいはからいをしようとしているものなのですから、しぜんに廻向というものが生れてくるわけであります。そこで『華嚴經』というお経にはこの廻向の種類を分けて、十種をあげておりますが、それを要約すると、三種廻向になるというのであります。すなわち、「實際廻向」「菩提廻向」「衆生廻向」の三つであります。「實際」という言葉は、ふだん使っておりますが、仏教から来たこの言葉も、日常使かれていたときの意味は、仏教本来の意味とは大へんちがつてしまつています。もちろん、具体的な事実という意味をもたせることもあります。本来は眞如法性

という言葉と同じなのです。「真如法性」もわかりにくい言葉ですが、平たく申せば、仏さまのお悟りになった心の世界とでもいいましょうか。それを「實際」または「真如實際」などと申しております。ですから「實際廻向」というのは、菩薩が大菩提心を發して、まっしぐらに真如の世界に歸入しようと願うときの廻向であり、「菩提廻向」というのは、その真直ぐな心から深く求める心を生んで、しだいに理解を深めていくうえにみとめられる廻向であり、「衆生廻向」というのは、菩薩が実行している行というものも衆生があつて、はじめて菩薩に修行ができてくるのだ、という感謝の利他の心を生んで廻向される廻向を申します。

生活の

きわめてかんたんな説明をしてしまいましたが、仏教でいう廻向とは、そういうような意

廻向

味でありますから、いつも死者にのみ限ったものでなく、生きている人びとにも廻向はされるものであります。住職が朝の勤行で御本尊に向い、三宝に感謝の廻向をささげたり、一天四海皆歸妙法を願ったり、世界の平和を祈ったりするのは、みなこの三種の廻向が一九となつてゐる廻向なのであります。それからまた、年忌法事などのとき、過去の精靈に對してする廻向も、住職や出座の僧侶によつて積まれた読經の功德を、自分のものとせず、その精靈に廻向する「衆生廻向」の一つであります。ですから、「たゞお経を上げてお布施をもらつてゐる」とか、「坊主丸もうけ」などと輕べつされるようなものではないのです。のみならず、その供養を志した施主も、そこに善根功德としての行を積んだのですから、それを廻向せしめるよう勧めてあげれば、両方でよいことをしたことになります、こんな功德はありますまい。どうか寺庭婦人の方は「廻向」というもの

の本当の意義を知っていたら、檀信徒の方々にも十分教えてやっていたきたいと存じます。精霊に対し　なお、お話のついでに「精霊」についてお話し申し上げましょう。というのは廻向にの廻向　ついて語れば、こんにちではほとんど死んだ方の廻向に限られているように解され、そこで死んだ人のたましいがあるのか、ないのか、というようなことがすぐに問題にされてくるからであります。

これはじつはむずかしい問題でありまして、いまの人は、あるとかなないとかの問題は、すぐ実証的に証明を求めてきますから、実証されなければ、それはないものと思ってしまう傾向があるのであります。しかし、わたくしは、法華経を信じ、お祖師さまの教えにしたがって、精霊をみとめるものであります。それは実証的ではなくて、むずかしい言葉で恐縮ですが、宗教的直観においてであります。それはどういふことかと申しますと、法華経を拝見していますと、仏さま（つまりお釈迦さまですが）は、過去のことをしばしばくわしくお説きになっているかと思うと、未来のこともしばしばお説きになっているのです。たとえば第三章の『譬諭品』では「法華経を信ぜず誹謗する者は、一切世間の仏種を断ずるものであって、のちには阿鼻地獄に入るであろう」とお説きになり、第二十章の『不輕品』では、「不輕菩薩（お釈迦さまの過去のお姿としてのぼさつ）をばかにして輕しめ、迫害を加えた者たちは、その罪によって千劫も長いあいだ阿鼻地獄に堕ちた」と説かれております。つまり、因果ということをはじょうに重んじ、過去の因によって今の果を生じ、今の因によって未来の果を招くということは、必定であるというふうに教えられているのです。で

すからお祖師さまも、「日蓮が今生の苦は、過去世で法華經を謗った罪の招き出したものだ」と仰せられ、「現在は見えて法華經の行者ならば、未来は決定として当詣道場（本仏釈尊のまします道場にまいること）であろう。」とも仰せられているのであります。

そうしてみると、われわれも現在すなおに法華經の信仰をたもっていられるのは、過去の善根功德のたまものであるかも知れず、現在なまかな信じ方で法華經のご精神にそむいていけば未来の当詣道場は疑わしいかも知れません。まあ、うぬ惚れにしても、法華經の寺院や教会に生活させていただいている限り、後生は本仏の道場へまいれると信じなければなりません。また、檀徒といっても本當に法華經のありがた味も知らずに、信仰にも入っていなかった人のあつたばあいには、その人がどういう果を招くかを考えなければなりません。その人の生前が法華經的に善かったか悪かったかは、住職が一番よく知っているはずであります。そこで御廻向ということも、真剣に考えられてきて、本物になるわけであります。こういう宗教的な直観のうえから申しますと、その人の生前から予想される未来というものが考えられ、そこに精靈ということが出てくるのであります。お祖師さまも、亡くなられた恩師道善御房に対しては『報恩抄』をお書きになって、ねんごろにご廻向なされています。わたくしどもお祖師さまの本とうの流れをくむ者は、やはり、お祖師さまのように信じ、お祖師さまのように生きて行くべきだと存じます。

七、寺庭婦人の心がまえ

寺庭婦人 寺庭婦人として、住職や主管者の妻である方々には、一般家庭の妻とは異なった心が**ま役目** えというものが必要であろうと存じます。その点について一部はまえの「安心」のところでふれておきましたが、ここでは直接、住職や主管者に対する協力の仕方、また、檀信徒にはどう

う接して行くべきかを少しく申し上げたいと思います。

住職や主管者というものは、とかく公私の用の多いものであります。勤め人のように、朝家を出て夕べに帰ってくるというような、きまった生活様式ではなく、一日中その寺や教会にいるのです。が、それでいてそれぞれ布教とか寺門経営とか、心を配る用のあるものですし、ばあいによっては役場なり学校なりに勤めている方もあります。しかし、そういう副業をもっていればなおさら仏教の根本義というものを、その副業の面に活かすということが必要で、それがなければ、仏飯の盗びとということになってしまいます。そこでどうしても寺庭婦人のいわゆる内助の功というものが求められてくるわけであります。

そこで内助の功というものは、どういうものであるか、ということが問題となつてまいります。しかし寺庭婦人だからといって、特別にこうしなければいけない、ということはなく、まえにも申しました、家庭の安心をほんとうに築きあげていって下されば、それで寺庭婦人としては十分なのですが、そのほかに大切なことといえば、住職や主管者、すなわち夫の仕事をよく理解し、その精

神の支柱となつていただくことです。代理にお経を上げたり、塔婆を書いたり、そういうことで手助けする、そんなことはむしろしない方がよいと思います。精神的支柱というのは、夫が内のなかのことは妻がいれば安心だ、という安心感をもって、十分宗門すなわち、大法のために公私とも活動ができるようにしてあげることです。もし夫があまりそういう方面に活動をしない人であつたら妻が励ましてそうさせるようにしむける、そういうことが大切なのであります。夫といっしょに情眼をむさぼっているようではならないのです。まえにも引きましたが、お祖師さまは、「女人となることはものにしたがって、ものをしたがる身なり、夫たのしくば、妻も榮ゆべし」と仰せられています。これは『兄弟抄』のお言葉で、「もの」は「夫」とも解せますが、ひとつ「道理」というふうに解してみたらどうでしょう。そうすると、「女性というものは、道理に従いながら、道理に従えるものである」というぐあいになります。「道理にしたがう」ところには、女性らしい優しさが出ますが「道理をしたがえる」というと恐しい強い女に響きますけれど、これは間違つた「道理」とすれば、いちおう「庇理屈に従っているような優しさのなかに、いつかその庇理屈を押えてしまうもの」という、いかにも女性らしいやさしさのうちに毅然たる風ぼうが出るのではないでしょうか。

このお言葉は、こう解釈しなければならぬ、というものではありませんが、こう受取つて、「女性訓」とすることもできることを申し上げたまでであります。

檀信徒の それからもう一つ大事なことは、寺庭婦人は、檀信徒に接触される機会が多いことで、相談對手 ります。したがって、檀信徒に対しては、ときによると、住職や主管者よりも、影響力が大きい、ということもあります。檀信徒は、つまらぬ事柄でなやみを持つているときなど、住職に相談するのも恥かしいからといって、寺の奥さんに話をもつてくるのが往々あります。そういうときには、よき相談對手となつて上げることです。御婦人には話しよいということは昔からいわれていて、このことにちなお檀家制度の残つてゐる状態では、寺と檀家との紐帯は、ひとえに奥さんにある、ということにもなるのであります。したがって、そういう面での寺庭婦人の役割は、まことに大きいものがあります。しかし、寺庭婦人は必ずしも専門的に仏教や宗義のことを學んでゐるのではないから、そういうことでの話對手にはなれない、とお考へになる向きもあらうかと存じます。もちろん、そういうことでの説教とか布教ということは、奥さんが矢おもてに立つ必要はないのですが、かんたんなことでの信仰相談、お友だちにはなつて上げていただきたいものです。

これはある教会の奥さんのお話ですが、自分は男の人のように、専門に勉強したのではないから人さまに理論を説いてお説教することはできないが、信仰は人並みにもつてゐるつもりだ。そして参詣に来る方々のなかには、信仰をもつてゐる人の家庭というものは、もつていない人の家庭と何か違ったものがあるだらうか、と考察する人もあらうから、内のなかからよくしてみせようと思つてゐるのです。それで来る方々にも無言の説法をしようと思つてゐるのです。ということを伺いましたが、じつに立派なものだと感心させられた次第です。みなさんがこうなれたら、宗門も大した

ものだとつくづく感じさせられました。

四無量心　そこで一つ、「四無量心」ということについてお話をしたいと存じます。四無量心とは**の心がけ**　「慈無量心」「悲無量心」「喜無量心」「捨無量心」を申します。慈無量心というのは人に良く樂を与えることで、布施の心と通じると思います。年々風水害などで甚大な被害をこうむる日本では、そのつど、いろいろ救済物資を送るということが行われますが、そういうときには卒先してやる、ということもこの心と存じます。むろん、これは対社会的ばかりでなく、個人のばあいでも、つねにこの心をもって温くあたるのが大切であります。悲無量心というのは、人の苦しみを除いてやることで、他人の悩んでいるときには、一しよにその苦をともしてやって、少しでもその人の苦をやわらげてやることをいいます。喜無量心というのは、人が苦から離れることができて、楽になったことを喜ぶ心ですが、平たく直せば、他人の幸福にはともに喜んであげる心、と申せばよいと思います。『法華經提婆品』のおわりに、「竜女が成仏して、ひろく人びとのために説法されるのを見た多くの人びとが、心大いに歡喜して、はるかにこれを敬礼した」ということが説かれております。これなどは喜無量心の現われであります。人間には他人の苦勞に同情する心持は持ち合わせていても、他人の喜びを自分の喜びのごとく喜んであげる、という心持はどうも乏しいようであります。心がけなければならぬところと存じます。捨無量心というのは、いわゆる怨親平等の心で、この「怨」を捨てることを申します。つまり、自分の心よく思っていない人に対して、その「よく思わない」「うらむ」という氣持を捨て去ることあります。

この四無量心はささいなことがらのようですが、御婦人には（男性にも大切なですが）、特に実行していただくにふさわしい心がけと存じます。寺庭婦人は多くの檀信徒に接する機会が多く、そのなかには好きな人も嫌いな人もあろうと存じます。そういうときにこそ、この四無量心を思い出していただいて、仏さまの教えの千万分の一でもよいから実践していただきたいと存じます。そうされてはじめて、理想的な日蓮宗の寺院・教会ができて行くのであります。

第三章 日蓮聖人略伝

誕生

日蓮聖人は貞応（じょうおう）元年（西紀一二二二年）二月十六日安房国（あわのくに）（千葉県）の一漁村小湊（こみなと）に御誕生なされました。

聖人の幼名は善日曆（ぜんにちまろ）、御父は武家の出身の貫名次郎重忠（ぬきなじろうしげただ）、御母は梅菊（うめぎく）御前と伝えられています。

（誕生の聖地には小湊の誕生寺が建てられ今日に伝えられています。また御誕生にまつわる伝説や伝承があつて、その遺徳を現在に伝えています。）

清澄寺入門

天福元年、十二歳のとき、志をいだいて天台宗の名刹清澄山（せいちょうざん）に上り、道善阿闍梨御房（どうぜんあじやりごぼう）に師事して名を薬王丸（やくおうまる）と改め、勉学に励まれました。

出家得度

十六歳のとき、師匠の道善房は剃髪得度の式を行い、是聖房蓮長（ぜしょうれんちょう）という僧名を授けられました。

こうして清澄寺の三宝給仕と修学の出家生活を送られるうち、いつしか仏法についての重大な疑問をお持ちになられたのです。それは「釈尊の教えによって誰人も得道するはずなのに、仏法をめぐって八宗十宗が諍論して得道ができず、人びとの現世安穩、後生善処も得られない」という当時の仏教に対する根本的な疑いでありました。

ことに御誕生の前年には承久（じょうきゅう）の乱があつて後鳥羽（ごとば）・順徳（じゅんとく）・土御門（つちみかど）の三上皇流刑。政權の座にある鎌倉幕府にも源家將軍の夭死など同族間の争い絶えず不祥な事件が起つていました。そうした社会不安に触発されて、これらの衆生の苦惱を解決に導くはずの仏教への問いと煩悶を強くもたれたのです。

（出家得度の聖地、清澄寺は昭和二十四年に日蓮宗に改宗、現在本宗の全僧侶の得度地となっています。）

智恵を祈願

求道修学の人となった是聖房運長は、この煩悶を解決するために清澄寺の御本尊、智恵をつかさどるといふ虚空蔵菩薩に「日本第一の智者となし給へ」と祈願、修学に専念されたのでありました。

諸国遊学

その後清澄を旅立ち鎌倉、京都、叡山、園城寺、東寺、大阪、奈良、高野山など各地に遊学し、

当時、新興の浄土宗、禅宗をはじめ、天台宗、真言宗、華嚴宗、法相宗、三論宗、律宗などの旧宗を学び、その教えの根底を究めました。

なかでも叡山十二年の修学は「教主釈尊の本懷はたゞ一つ法華經である」と確信を得、その教えの精隨が諸宗によって失われたために人びとの得道もなく、災禍も起るのだと、法華經弘通の固い決意を秘めて清澄に帰山したのであります。

（叡山修学の遺跡として横川の定光院が伝えられています。）

立教開宗

建長五年（一二五三）四月二十八日、清澄山において、「法華經が仏教の肝心である」と大衆にお宣べになって開宗を宣言され、日蓮宗の基を立てられたのです。聖人時に三十二歳でした。

ところがその説教を聞き知った地頭東条景信は激怒して迫害を加え、聖人は清澄寺を追われることになったのです。最初の法難であります。

（清澄山は立教開宗の聖地として旭ヶ森唱題の伝承があり、また四月二十八日を立教開宗の聖日とされています。）

鎌倉伝道

当時、鎌倉は北条氏一門が中心になって鎌倉幕府の権をこの地におき、全国から人びとが集って新興都市として繁栄していました。

この鎌倉の地に日蓮聖人は「釈尊の眞の教えは法華経であり、法華経によって末代の衆生は必ず救われる」と説き、諸宗の法義を折伏したのであります。

この頃、日昭(にっしょう)・日朗(にちろう)入門し、富木常忍(ときじょうにん)・四条頼基(よりもと)・池上兄弟、工藤吉隆(よしたか)・進士(しんじ)太郎等有力な武士が相次で入信し教団が形づくられるに至りました。

(現在鎌倉市の小町に辻説法の遺跡が伝えられ、当時の街頭の説法を偲ばせています。)

立正安国論

建長八年二月頃から正嘉(しょうか)・正元(しょうげん)年間にかけて、鎌倉には大暴風雨、大地震、旱魃(かんぱつ)、飢饉(ききん)、疫病(えきびょう)が続発し、民衆の惨状はいよいよ悪化するのみでありました。この天変地災は「たゞごとではない」と日蓮聖人はお悟りになり、その禍根を探るべく一切経を開き見、立正安国論を御著述になりました。そして文応元年(一二六〇)七月十六日、前(さきの)執権北条時頼(ときより)に献白し幕府を諫めたのです。安国論は「法華経信仰に帰正しなければ三災七難がやみがたい」という警告のうちに内乱、外寇を予言したものであり、これは第一回の諫言といわれます。

この頃には日興(にっこう)入門、比企(ひき)大学三郎、太田乗明(のりあき)、曾谷教信(のぶ)のぶ、南条兵衛七郎等が入信したのです。

(一切経の閲覧の遺跡に駿河の岩本実相寺が伝えられています。)

草庵襲わる

安国論献白の後、八月二十七日、諸宗の僧俗は数百人の徒党を催して松葉ヶ谷（まつばがやつ）の草庵を襲い、聖人暗殺を企てた事件が起りました。だが聖人はあやうく下総の富木常忍の領地に難をのがれたのです。これは松葉ヶ谷の法難とよばれ聖日とされています。

（この法難をのがれたのは日枝山王の守護であると、白猿の話が伝承されています。）

伊豆法難

その後鎌倉伝道に戻られた聖人を幕府要人は理不尽にもこれを逮捕し、弘長元年（一二六一）五月十二日、伊豆伊東に流罪となりました。御年四〇歳のことです。伝承によれば、護送の役人は聖人を狙（まな）いた。岩に置き去り水死させようとしたが、川奈の船守弥三郎に助けられて、夫妻の庇護を受けたといわれます。また当地の地頭伊東八郎左衛門の乞いによりその病気を祈り、聖人はその礼に立像の釈尊をおくられたと伝えられています。その時の釈尊像が世にいう隨身仏（ずいしんぶつ）であって、生涯の持仏とされました。

また一年有余、流謫の地にあって、聖人は五綱（教・機・時・国・序）の教義をお述べになり、日蓮宗の宗義の基本を定められたのです。

時頼は流罪の不当なることを覚り、弘長三年二月二十二日赦免し、聖人は鎌倉に帰られたのであります。これを「伊豆法難」といい聖日とされています。

(伊豆には伝承すこぶる多く、聖人の御遺徳を今日に伝えています。伊東の仏現寺、仏光寺など伊豆法難の遺蹟とされています。)

小松原法難

翌文永元年十一月十一日、安房(千葉県)鴨川の小松原にて、かねて怨をいだいていた地頭東条景信が聖人の一行を待伏せ襲撃した事件が起きました。

それは久しぶりに小湊に帰郷されて、父の墓に詣で、また仏天の加護を祈って大病の母の寿命を延べられたときのことです。ほどなく天津城主工藤吉隆の招きを受けて出立し、その途中東条の松原というところで東条景信の手兵に要撃されました。聖人は頭部刃傷、左肩を折られ、弟子鏡忍房殉死、他の者も重傷を負い、急を聞き駆けつけた工藤吉隆も戦い傷を受けて病没したと伝えられます。これが小松原の法難であります。

(安房鴨川の鏡忍寺はその殉教の聖蹟を今日に伝えています。)

蒙古の国書来る

文永五年(一二六八)に、中国大陆を征服し朝鮮を属国とした蒙古王フビライはわが国に国書を送ってきました。国書は一方的に朝貢を要求し、わが国を威嚇してきたのであります。のちにも再三にわたって蒙古の国書が来牒しました。幕府は鎌倉・京都等全国の諸大寺に蒙古国降伏の祈禱を命じてこれに備えたのです。

一方、聖人は安国論において御指摘になった外寇の徴であるとお認めになり、時の執権北条時宗ら要人、鎌倉諸大寺長老に書状（十一通）を送って法門を決すべく公場対決を促し公的法論を迫ったのであります。

またこの頃の鎌倉伝道も成果が上がり、問答の準備や門弟の信仰指導を行い、大師講（天台大師讃仰の集り）を営んで盛況を呈していたのです。

雨乞い

文永八年夏、大旱魃が起り幕府は極樂寺良観に雨乞いの祈禱を行わせました。この雨乞いをめぐって聖人と法験を競うことになり、良観は祈雨に効を奏せず面目を失ったのです。良観らは幕府要人を動かして聖人及び門弟を讒言し殺害を策しました。九月十日、平頼綱は聖人を召喚訊問しました。

この雨乞いの一件が竜口法難のきっかけとなったものであります。

竜ノ口法難

文永八年九月十二日平頼綱は突如兵を卒いて草庵を襲い聖人を捕えました。表向き佐渡遠流としながら罪人のごとく鎌倉市中を引き廻した上、実は竜ノ口（たつのくち）刑場にて暗殺しようとした事件であり、竜口法難と云われているのがこれです。

その時に聖人は平頼綱を諫曉して「日蓮を失うことは日本国の柱を倒すようなものだ」と叱咤し

たのでした。これが第二回目の諫言とされています。

このとき鎌倉一帯に怪異が起り、処刑は中止されました。武蔵守北条宣時の預りとして佐渡に流されるまで、聖人は依智にある佐渡守護代本間重連（ほんましげつら）の館に護送されたのでした。

この竜ノ口法難時には数々の伝承が伝えられています。たとえば八幡社頭の諫暁、四条金吾頼基の至誠、星下りなどがそれであります。

（竜口法難を記念して片瀬の竜口寺が建てられ現在に伝えています。）

佐 渡 配 流

同年十一月一日、佐渡の塚原の三昧堂に入られました。この配所の生活は飢えと寒さに悩まされ言語に絶するものでありました。一方、鎌倉では日朗上人ら門弟のほとんどがあるいは投獄され所領を召上げられ、あるいは退転する者も出たという金門下にわたる苛酷な法難でありました。佐渡の聖人は死を覚悟するとともに「日蓮のかたみ」として開目抄（かいもくしょう）を撰述され、「法華経色説（しきどく）」の御体験をお宣べになり、自ら身を捨てて末法の衆生を救うべく三大誓願を御発表になられたのであります。

この間に、佐渡の諸宗の僧俗が集って聖人に法論をいども屈伏させようとした、いわゆる塚原問答があり、陰に陽に圧迫が加えられたのでした。

また他方では帰依、信服する人も出て、かえって聖人を外護した阿仏房夫妻、国府入道夫妻、一

谷入道、弟子としては最蓮房、学乗房等が厚い信従を示したのです。

二月 騒動

聖人在島中の文永九年二月、鎌倉・京都において北条氏一門の同士討が起きました。いわゆる二月騒動であります。時宗は謀反を計った北条時輔、名越教時、時章を殺しました。ところが時章の無実が判明し、かえって討手の大将を処刑したという事件であり、元寇を目前にして幕府内部の不信を露わにしたのです。聖人が予言した内乱であります。

また北条宣時は数度にわたって偽御教書を佐渡に下して、聖人や門弟に迫害を及ぼしたのです。四月に入って、聖人は塚原の三昧堂から一ノ谷（さわ）に移され、翌文永十年には「観心本尊抄」（かんじんほんぞんしょう）を撰述、また大曼荼羅（だいまんだら）を図顕されて宗義の精髓をお教えになられたのであります。

（塚原には根本寺、一ノ谷に妙照寺、阿仏房の妙宣寺など佐渡法難の聖蹟が伝えられています）

佐渡赦免

文永十一年三月、佐渡遠流を赦されて鎌倉に帰られました。御年五十三歳であります。鎌倉では四月八日、平頼綱が礼を尽して聖人を招き、仏法のことや蒙古の来襲について尋ねました。聖人は来襲が緊迫していること、「今年中」であろうと答え、兵災の根源である諸宗の帰依を止めるよう幕府の蒙古対策を諫め、真言の祈禱は亡国に導くものであることなどを直言されました。これが第

三回目の国諫といわれております。

身延入山

三度に及ぶ諫言をも幕府は用いず、阿弥陀堂の加賀法印に祈らせるなど幕府の態度を見た聖人は、五月十二日に鎌倉を發ち、波木井実長公の招きに応じて身延の深山に隠棲されたのです。波木井郷に到着されたのは五月十七日のことでした。

身延の草庵

身延の西谷に御草庵を結ばれ、三度諫めて用いられずば国を去れという古賢の例によせて、門弟たちとの法門談義、仏祖への給仕、朝暮の読經に寧日のない山中生活がはじめられました。

そのうち四、五〇人が居住するようになり、三間四面の草庵も、のちに十間四面の大坊（身延山久遠寺）が建られるようになったのは晩年のことです。雨や雪の多い深山での御生活は、その寒さといい、食物の欠乏といい苦しい生活でした。辛じて門弟、檀越の送る供養の品にその露命を凌がれたのであります。

（西谷に御草庵の聖蹟がのこっています。）

元寇

文永十一年十一月（文永の役）と弘安四年五月（弘安の役）兩度の来寇があり、菅峽、対馬、博多に蒙古軍が上陸し、大宰府を侵して暴威を振り、日本全土を震撼させました。

両度の戦役は元の軍船が大台風のために難破沈没して終ったのですが、しかしその後の元軍の再来に備える幕府の財政は窮乏し、鎌倉幕府滅亡の原因となったのです。

一方、聖人は先きの外寇の予言と全土を恐怖に落し入れた元寇を見聞し、建治元年に「撰時抄（せんじしょう）」を撰述して、「いまいかなる時か」「闘諍堅固白法隱没の時、（世界は相争い正義の法が失われる）」「末法の時代である」と論じて、末法救済の教えを説かれました。

桑ヶ谷問答

建治三年の頃、鎌倉の桑ヶ谷で叡山の学僧竜象房が良観らの庇護のもとに聖人と門弟を盛んに誹謗しました。これに対して聖人の弟子三位房は問答によってこれを屈伏させたのです。これが桑ヶ谷問答です。

ところがこの問答事件に関連して四条頼基は良観らの讒言に会い主君江馬光時から謹慎を命ぜられてしまいました。また良観らは池上康光にすゝめてその子息宗仲、宗長兄弟の法華信仰を圧迫、念仏に改信するように迫り、兄宗仲は父に勘当されます。のちその父康光も聖人に帰依したのですが、四条頼基といい、池上兄弟及びその夫人たちといい、最後まで聖人の教誡にしたがって良観ら諸宗の迫害に耐えたのでした。

熱原法難

建治元年頃より、熱原（あつわら）（静岡県）の滝泉寺大衆が日興に帰伏、日弁、日秀は聖人の

弟子となつて同地を伝道したため、院主代平ノ行智との小競合が起きました。弘安二年九月、行智は農地刈取りのことから百姓神四郎ら二十人を捕えて平ノ頼綱に送り、これを弾圧したのです。頼綱の子飯沼助宗は念仏を強要したが神四郎ら三人はかえつて題目を唱えて殉教、ほかの十七人は禁獄された事件があり、これを熱原法難とよんでいます。

報 恩 抄

建治二年三月、恩師道善房が死去されましたが、聖人は報恩抄を著作してその靈前に読ましめ、報恩の意をお現わしになりました。

父母・師匠・国の恩を報ずるということは人倫の道であり、ことに仏門においては報恩を最も大事なこととしています。聖人はその恩を報ぜんがために、「法によって人によらず」という仏法の掟に従つて法華経を修行しました。聖人の法華修行の生涯の功德は故道善房の靈に捧げ、回向されたのです。これは聖人の報恩の御精神をお示しになったものであります。

（清澄寺には今も道善房のお墓があります。）

聖人の病

多年にわたる辛勞と寒氣のきびしい深山住いのために、建治三年の末頃から健康を害し慢性の痼病に悩まれて、弘安元年六月には一時重態となりました。しかし四条頼基の投薬で快方にむかわれたのでした。十月にまた再発し病状は一進一退のまゝ病臥に伏せられるようになりました。

入 滅

弘安五年夏過ぎた九月、常陸の湯に療養されるために身延を立ち、十八日に武蔵国池上宗仲の館に着きました。

聖人はすでに臨終の近きを知って、十月八日に本弟子六人（六老僧）を定め、滅後の法華經弘通を付属されたのです。また最後の談義として門弟に立正安国論を講じ、經一丸（のちの日像上人）に京都弘通を命じられました。

かくして十月十三日、大曼荼羅をかけ、その前に隨身仏をおかれて、唱題のうちに辰ノ刻（午前八時ごろ）安祥として御入滅されました。時に聖寿六十一歳でありました。

翌十四日、葬送、荼毘に付し、ご遺言によって墓所は身延に建られました。

（御入滅の聖地には池上本門寺、大坊本行寺、荼毘所が現在に伝えられています。）

第四章 信行とお給仕

一、お給仕の心がまえ

御給仕の 御本尊へのお給仕は出家であれ在家であれ、法華信仰に生きるすべての人に要求される
あり方 ものですが、住職・管理者及び寺族はことに毎日々々が御本尊にお給仕する生活である
ので、とくに固い心がまえを要求されます。本堂の莊嚴・整備は本来、住職・管理者、教師のつと
めでありましょうが、実際には寺庭婦人の日常の仕事の一分となっています。

いうまでもなく、本堂は御本尊をおまつりするお堂で、お祖師さまが「生身（しょうしん）の釈
尊」とおっしゃったように、久遠実成（くおんじつじょう）の釈迦牟尼世尊（しゃかむにせそん）
が在（いま）すところですから、いつも清潔で厳肅でありたいものです。幕末の学匠、優陀那日輝
（うだなにちき）上人は、出家に対し勤行の心得として五方便・十正修といふことを示しました。
今、勤行の内容の十正修に入る以前の心得として示された八五方便Ⅴを挙げますと、

- 1、御本尊を奉安すること（それによって本尊を鏡として、自心を照影する）
- 2、道場を清浄ならしめること（道心を尊び、本地の仏土をこのところに顕す）
- 3、身を淨め、法衣を整えること（自己の心性を清浄ならしめ、法理を顕す）

4、香・華を供養すること（御宝前への供養のなかで、香と花と灯明の三は最も心気を資け、道念を養うものである）

5、鑿（さん）・磬（けい）の調節（鐘や太鼓や鑿（かなまる）や磬は仏家の法器であり、世間のものとは異なる樂器であるから、自らも悦びを得、人々に感動を与えるように心掛けなければならない）

と教えています（『充洽園礼誦儀軌』）。このなかで、2、4は寺庭婦人にとって大切な役目でありましょう。

御本尊へ 日蓮宗のほとんどの寺院はお木像の御本尊を奉安しております。その形式には大曼荼羅のお給仕 御本尊をそのまま木像にしたのと、本仏であるお釈迦さまを中心に奉安したものとがありますが、ひとつの御本尊に相違ありません。また、紙に書かれたり木彫にそのまま写した大曼荼羅御本尊も実体は同一なのです。「御本尊の意義（四十五頁）参照」御本尊をおまつりする内陣は莊嚴に、そして清潔にいたしましょう。お祖師さまのお木像には十一月十一日（小松原御法難会）の頃から真綿のお帽子をおかけしましょう。仏天蓋や木蓮華などは時々ほこりをとりました。

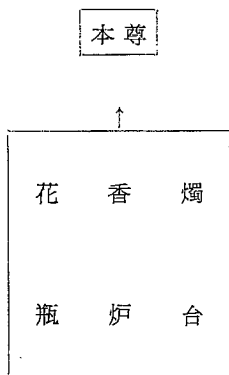
花と香 枯れた花は目につきやすく、それは参詣の方の信をも軽くさせる恐れがあります。また、と燭台 毒々しいものやすぐ散らばるようなものは避けるべきでしょう。花がもちにくい季節には青い木ものだけでも心がこもっていればよい印象を与えます。最近、造花が巧妙に造られるようになりましたが、もし使う際には不自然にならぬよう気をつけたいものです。

香には香木（沈香・白檀など）をたく焼香、線香のほか塗香（現在の寺院では殆んど用いていない）等がありますが、いずれも上品なおりを御本尊にささげその清浄の功德を受けるのです。本堂に入るとほのかにたきこめられた優雅な香りによって清浄な心に生き返るのが理想でしょう。香炉もきれいに布などで拭ききよめます。

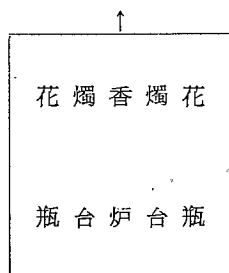
灯明は仏陀の慈悲の光をあらわすものです。線香もそうですが、必ず垂直に立てなければなりません。燭台もきれいにしましょう。

仏具はすべて、一直線にそろえるものはぴしっと一直線に、対称的になるものは形よく揃えねばなりません。燭台・香炉・花瓶の配置には三具足と五具足との二つがあります（左図参照）。どちらによるにしても、必ず中心を御本尊の中心に揃え、対称的になるよう確かめましょう。

（三具足）



（五具足）



このことは本堂全体にもいえることで、隅々にまで気の配られた本堂には荘嚴の雰囲気のみちているものです。

日常の 皆さんも日常なさっておられることでしょうが、毎朝まず最初にお茶やお水をお供えし、**お給仕** また仏飯等をお供えます。器は質素なもので結構ですから、荘嚴味をもつものが望ましいでしょう。果物や菓子などをお供えするときは、御本尊さまへの感謝をこめてきれいに捧げましょう。

△檀信徒の教化▽などと申しますと何か大げさに思いますが、こうした日常の信行の心構えが人々の胸を打つことになるものであります。そうした意味で、寺庭婦人の果す役割は大変大きいと思います。よく「寺門の興隆は奥さん次第だ」などといわれますが、檀信徒の皆さんと気軽にまた頻繁に接触なさるとき、第一に大切なことは敬虔な信仰でありましょう。どうぞ、檀信徒の皆さんとともに信仰の道を歩みながら、相談相手になっていただきたいと思います。

二、御本尊とお仏壇

仏壇の 「広辞苑」の△仏壇▽のところを見ると、「仏像や位牌を安置して礼拝するための壇」と意味 解説してあります。一般に、仏壇とは御先祖の位牌を安置するところ、というように考えられているようです。確かに御先祖の霊をおまつりするわけですが、仏壇にはまず御本尊を勧請して、私たちの御先祖の霊も御本尊に救っていただくようお願いせねばなりません。非常に熱心な

信徒の方は、仏間をしつらえてそこに御本尊とお仏壇を安置しておりますが、本来、お仏壇の構造は本堂で礼拝するのと同じ態度である筈です。

皆さんのお内仏では必らず御本尊を奉安していると思いますが、檀信徒を指導する際もその点を第一にして頂きたいと思ひます。

御本尊の 旧家などのお仏壇には木像の御本尊を奉安しているお家もあります。それらは本堂の木まつり方 像の御本尊を模したものであります。

しかし、これから御本尊をおまつりしようとする方には、お曼荼羅をおすすめします。お祖師さまが親らお書きになった大曼荼羅御本尊は百五十余幅も現存していますが、日蓮宗ではお祖師さまのお書きになられた「臨滅度時の大曼荼羅」を、美術印刷によって複製し、家庭用に授与しています。

これは、各寺院から宗務院に申し込めば、管長猊下から授与されることになっております。

○臨滅度時の大曼荼羅は、弘安五年十月十三日、お祖師さまが御入滅なさるとき
枕辺にかけさせられたと伝える。

○御 頭 示 年 月 日 弘安三年 太才三月 庚辰

幅 尺 丈五尺三寸三分 幅三尺三寸九分（十枚継）

現 在 宝 藏 鎌倉市大町 妙本寺

○授与を受けられる複製御本尊の大きさは二種類である。

A	縦	二十センチ	横	十三センチ
B	縦	十五センチ	横	九・五センチ

お仏壇

お仏壇の形や大きさによって御本尊の奉安や位牌等の安置が決まると思いますが、あくまの莊嚴で、①お仏壇の中心には御本尊をおまつりすること、②お祖師さまのへおすがた（お木像）は御本尊の真下に奉安すること、③お位牌・過去帳等は、御本尊・お祖師さまよりもひくく両側に対称的に置くようにすること、の三点の注意が肝要です。

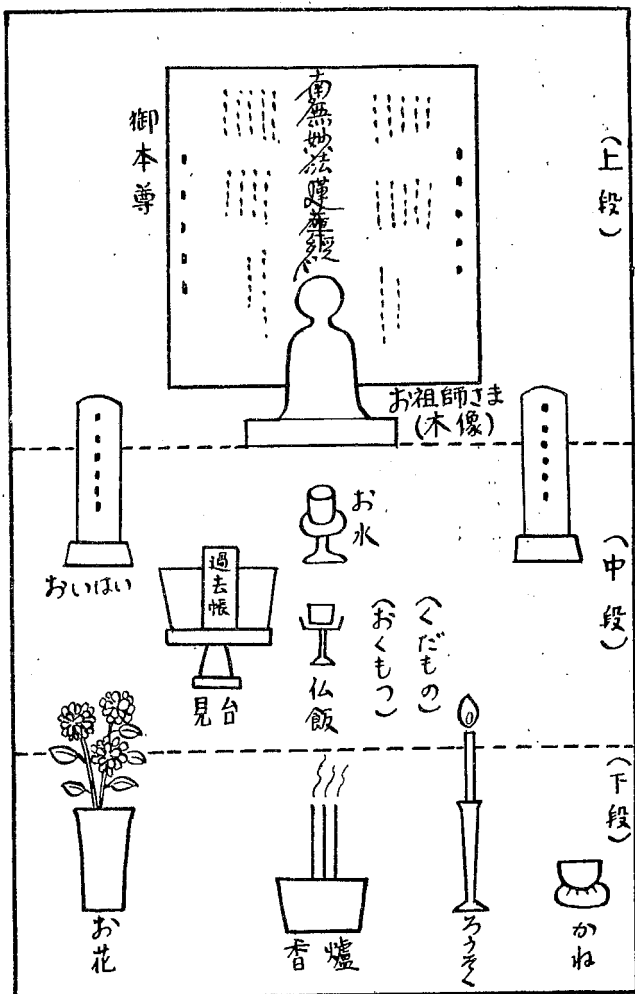
御本尊やお祖師さまは必ず住職・管理者に開眼していただいてから奉安するように指導いたしますししょう。

お仏壇だから、先祖の位牌さえりっぱにすればよいというので、不釣り合いに大きくすることは厳しく誠めねばなりません。

お仏壇の莊嚴は、以上のことを念頭に置いていただければよいと思いますが、図示すると次のようになりましょう。

お仏壇の お仏壇のお給仕も御本尊を中心として、清潔と整頓、莊重とを基本とすることは、1、
お給仕 お給仕の心がまえのところで述べたとおりです。

しかし、とくに注意したいのは、お仏壇の狭いところへ、祖父母や父母のお位牌をおまつりして



— 正しい仏壇の在り方 —

いるので、余計に、親近感が強く、さまざまものをたくさん供えたりして整頓しにくい点があることです。

花瓶・香炉・燭台はなるべく簡素なものを選び、仏壇に釣合いのとれたものに指導しなければなりません。とくに、お位牌は釣合いのとれた大きさにしませんと、御本尊やお祖師さまのおすがたを見下すような恰好になり、信仰的に望ましくない結果になります。

お花はむれて枯れ易いから気をつけること。仏飯・果物・菓子などは早目に下げるのが肝心です。

朝夕の朝と夕には家族全員が必らず御本尊に礼拝するようにしたいものです。信仰の第一歩は、礼拝　まず自分の心を見つめることです。御本尊の鏡に照らして、常に反省し、常に前進して行く心ほど強いものではありません。御本尊に祈る心は、身体の健全と豊かな人間性を作りあげていくでしょう。

日蓮宗では、毎朝八時を礼拝の時間と定め、日本中の人々が、毎朝八時には、どこにいても何をしていたも、一斉に御本尊・お祖師さまに信仰のまことを捧げるよう呼びかけています。是非あなたも毎朝八時礼拝をいたしましょう。そして檀信徒にも指導をいたしましょう。

三、日常の勤行

寺庭婦人の日常はあわただしい毎日ですが、たとえ十分でも結構ですから、勤行をつとめたいも

のです。

おつとめ 勤行は日々に仏のみ教を受持することによって御本仏久遠実成の釈尊の永い間の御修のこころ 行と御本仏となられた功德のすべてを、私たちが譲与される帰依のあかしであります。お祖師さまはこのような意味で法華経を帰依の教法とされましたが、その中心を如来寿量品に定め教法の肝要は南無妙法蓮華経の五字七字にあらわされることをお示しになりました。ですから、私たちも、この教法のこころに依って行くのではありません。おつとめの前には必ず口をそそぎ、心を正すことは当然行なうべきことです。

優陀那日輝上人は勤行のつとめ方を八十正修（じゅっしょうしゅう）として示されました。これはすべての法要の基本となるものですから、日常には必ずしも具体的にすべてを行じるわけには行かないかも知れませんが、少くともその心持でおつとめしなければなりません。

八十正修の心持を簡略に述べてみましょう。

- 1、勧請 道場をしつらえ、心を清浄にして御本尊の来臨影向（らいりんようこう）を念ずる。
- 2、礼拝 御本尊に心から敬礼し帰依することを誓う。
- 3、讃歎 御本尊の仏徳をたたえ、われらに行法の心をお示しあらんことを願う。
- 4、読誦 經典を読誦し、仏陀のみことばをそのままだく。
- 5、運想 末法の私たちに御本仏の大慈悲をもって賜った御題目を行ずることを一心に念ずる。
- 6、唱題 御本仏より賜った肝要の法、南無妙法蓮華経を一心に行ずる。

7、回向 上来、受持し読誦した教法の功德をもって御本尊をたたえ、私たちの信行の成就を祈願する。

8、発願 この無上の教法に私たちが帰依し、更にすべての人々に分ち与えるよう願を發す。

9、帰依 仏・法・僧の三宝に帰依することを誓う。

10、奉送 御本尊の來臨を感謝し、いつも念ずるときに來臨あらんことを冀い、謹んで法要を終了する。

日常のお つとめ 日常にもそのような心持で勤行をなさることが望ましいのですが、日常の勤行作法の一例を示してみましよう。

〔礼拝〕

開経偈 (「無常甚深微妙の法は……」)

方便品

自我偈 (如来寿量品第十六の偈)

運想 (「唱え奉る妙法は……」)

正行 (お題目 三十遍―百遍ぐらい)

御妙判 (お祖師さまの御文章を適宜に拝読する)

回向 (簡要な回向文を唱える) (本書一四四頁参照)

〔礼拝〕

これはほんの一例ですから、時間のないときは、お自我偈とお題目でもよいと思いますし、進んではもつとくわしくお経文を誦読できればなおよいと思います。なお、お経の読み方は、あまりゆっくりでもなく、せつかちでもなく高すぎる声でも低すぎる声でもなく、文々文句を明瞭に、清々（すがすが）しい音声であるように心がけましょう。私たちが勤行している周辺には、法界のすべての衆生が聴聞していることを思い、一心専念に、心を散らすことなく、お経の一字一句ごとに仏顔に接するつもりで誦読しなければなりません。ことに早く誦経をすることを誇ることは意味がありません（もつとも、修法の場合は例外です）。また、回向文は宗義の精神になつたものが望ましく思います。

寺院は御本尊が中心であり、教師・寺族が檀信徒とともに正しい教法を受持し、また他に伝えて行く道場です。その心持を一分でも失ってはなりません。そして、子弟・子女をこの心で指導して行くのは寺庭婦人のつとめであり、それは寺庭婦人自身の日常の勤行によって全うできるものであることを銘記せねばなりません。

日常の作法 日常生活の心がけもそれに尽きるのですが、例えば御飯をいただくときにも、簡単な八食法（じきほう）✓を誦えたり、少なくともお題目を三遍ほど唱えてから、感謝の心でいただきます。

四、寺庭婦人のあり方

寺庭という　△寺庭▽という言葉は、一般の△家庭▽ではなく、寺を中心とした△僧とその妻▽言葉の意味　の生活のあり方を考えて造語されたものでありましょう。真宗の場合を除いて、僧侶の妻帯が許されたのは明治五年（一八七二）のことですが、この明治政府の処置は、廃仏棄釈の風で弱まった寺院の影響力と、加うるに仏教僧侶の頽廃に拍車をかけて、国教としての神道を強化していくように考えた下心ある宗教政策でもあったのです。△寺庭▽というものは、その成立の時から多くの問題をはらんでいたわけです。明治の著名な僧のなかには、妻帯しても妻の入籍は許さず、その子供が妻の姓を名のっている例もあります。また、明治生れの女性で幼児の頃は髪を短かく刈って男子として育てられた方も現存しております。寺に幼ない女子がいることは住職が妻帯していることを意味し、それをばばかつてのことであつたのです。このような事情を知っておられる方もお年寄りにはあることと思います。寺庭婦人の地位は長い間僧侶の宗教活動の影にかくれていたのです。そして、寺庭婦人の先覚者達は、その社会的地位を確立するために、多くの努力と苦心をかさねて来られ、今日の寺庭婦人のあり方の基礎を築いたのであります。こうした寺庭婦人としての先覚者のご苦勞を、のびやかに今日生活しておられる寺庭婦人の方々は、かたときも忘れてならないと思います。

公的なものとし　△寺▽というものは、いかなる性格の場所なのでしょう。最近では世襲（せし）ての寺院の性格　ゆう）（自分の子供に寺を譲ること）化がすすみ、若い寺庭婦人のなかには△寺▽が一般の△家▽と変りないものであり、財産相続が可能なものと思つてゐる人も少くありません。

物に随いて物を随うる身なり」(兄弟鈔)「箭の走る事は弓の力、雲のゆく事は竜の力、夫の仕業は妻の力なり」(富木尼御前)などの多くの御文章を遺されています。それは夫にただ従属するのではなくお互いに、扶けあうべき立場を示されたものであり、今日もこの御言葉は寺庭・家庭を問わず、夫婦のあり方として生きているのです。△寺庭▽というものが日蓮聖人の伝統を受け継ぐ宗門に現われて百年を経たわけですが、まだまだそのあり方の根本的な意義を顕わすことはできておりません。僧の立場から、その妻の立場からも、宗門人のすべてがそのことに心を配らねばならないときでありましょう。

子弟の教育と △寺庭▽は僧と妻だけによって成りたつのではなく、血を分けた子供と、そして法婦人の立場 △を伝える弟子とがそのなかに入ってくるのです。たとえ血を分けた子供であつても法を伝え、大聖人の弟子となる立場にたつかぎり、血とは関係なく弟子とならねばなりません。

昔はすべて師と弟子という関係によって法灯は伝えられて来たのです。在俗の家その他から、弟子となつて寺に入り、住職につかえる立場の者が寺に起居をともしることにはしばしばあることでしょう。しかし、ここで考えねばならないのは、血を分けた子と、この法を伝える弟子との関係であります。弟子は単なる使用人ではなく、大聖人の弟子となり、法を伝えるべき道を選んだ者なのであります。血を分けた子と平等にあつかうというような単純な問題でもありません。僧となる修行がともなわねばならず、しかもその教育の責任は住職にあると同時に寺庭婦人も分ち受けもたねばならないでしょう。血を分けた子を弟子とする場合も同様です。そして今日宗教家となる道はき

わめて厳しいものであるといえます。僧職者は人生の助言者であると同時に信仰の導き手ではなくてはなりません。そのような人格と識見を身につけることは、尋常一様な努力で到達しうるものではなく、また生涯その願いをもった精進をつづけねばならないのです。坊さんにでもなるかとか、坊さんにしかねないなどという言葉が語られることは歎かわしいことです。真に日蓮聖人の御精神を伝え、現代の人々の苦悩を救う導師となる願いをもった子弟を輩出せねば、宗門の発展はありません。そのためにはたすべき寺庭婦人の役割は重大であるというべきであります。

社会に解放された世界

△寺庭▽が一般の家庭と違った世界であることを、寺庭婦人はなによりもまず覚悟せねばなりません。そのなかでも特に自覚しなければならぬのは、寺は宗教活動の場であるということです。最近のように核家族と呼ばれるような少単位の閉鎖的な家庭が望まれている風潮のなかでは、特にこのことは考えておかねばなりません。宗教活動の場である以上、檀信徒が常日頃心安く訪ね、心にある喜びも悲しみも、悩みも、すべてを訴え語りあっていける場でなければなりません。人々が親しみやすく、信頼をもって語りあえる場をつくっていく上で、寺庭婦人は大きな仕事をなさねばなりません。住職を扶け、その宗教活動の重要な支えとなるのは、この場合においてです。ときには住職ではできぬ事も、婦人の立場では可能な場合もあるのです。例えば女性の悩みや子供の問題などの相談相手は、寺庭婦人の受けもつべきもののひとつであります。

第五章 檀信徒への接し方

一、寺院婦人の立場

寺院というものに人々 寺に生活していると、一般の人々が寺院というものをどのように見ているはなにを求めているか のかということ忘れがちです。現在の寺院仏教のあり方に対して世間には強い批判があります。それは期待を裏切られたか、或は過大な期待を寄せていることのあらわれでもあります。期待をもたなくなったとき、批判は止むでしょうが、そうあらしめてはなりません。期待に対してはどうしても応えていかねばならないのです。その期待とはなんでしょうか。第一に、そこに住む人々は、俗な世間の欲望から生れる葛藤（かつとう）から解放された人々であろうということ。例えば財産や地位や名誉にとられない人たちであることを願っているでしょう。なぜならば、そうした欲望にかりたてられて現代人は疲れはてゝいるからです。せめて寺院はそこから解放されたオアシスであって欲しいのです。第二に、人間は人間として平等であることを、現実的に示してくれるところであることを望んでいます。第三に、人生や職業や、知識の根源的なもの、いいかえるなら生きるものとしての経験の総和のなから、なお自からつかみとることのできない問いを問いかけ、それに応えてくれることを望んでいます。第四に、病めるものは病いとその苦痛から解放されるこ

とを、貪しい者は貪しさから脱出することを、富を更に得たいと願う者はその願いの叶うことを、家庭や社会生活のなかでの人間関係に悩み苦しんでいるものはその葛藤から解放されることを願って、寺へ来るのです。それは神仏への祈りであると同時に、仏につかえて寺に住む人々へのなにかの助力を求めているのです。第五に、生と死、特に死というものに対して根本的な応えをあたえてくれるところであることを望んでいます。死は人間にとって必ずやってくるものでありながら死を語るところは宗教の場において他にないからです。第六として、そこが日蓮宗の寺であることを知って来る人は、法華経と日蓮聖人の教えについて、教えを得たいと期待して来るでしょう。そして当然それは仏教全体のなかで、あるいはすべての宗教のなかで、日蓮聖人の教えとは、何であるのか、どのような位置を占めるのかを教えてもらいたいと期待して来るでしょう。それは住職が応えるべき問題でもありますが、寺庭婦人がそのことを全く知りませんといって通ることはできないのです。その外にも様々な期待と願いが寺院とそこに住む人々にむけられていることを自覚しなければなりません。昔は寺は教育の場であったり、わからないことは和尚さんに聞いて来いというように、争いごとの仲裁や困ったことの相談事はいうまでもなく、なにもかもが持ちこまれてきたのです。寺への期待のなかにはそうした過去の寺院のあり方への郷愁があるのです。

人々は己れの求めて 愚痴や不満をそのまま聞いたとしても、その人が一体なにをもとめて寺へや
いるものを知らない ってきたのかわかりません。その人本人が求むべきものを意識していないの
です。落語におれの行くとことどころとういって通りがかりの人に聞く話がありますが、人は自分

き処を知らないことが多いのです。しかしそれは教えてやることはできません。自分であ
も悩み考えぬかねばならないことなのです。自分の力で求めるものをつかむために助言でき
は、その同じ悩みを自分で解きあかした人です。寺庭婦人は、まず自分自身の人生と真剣にと
くむことによってのみ、このような人々の助言者となり得るでしょう。ただ漫然と日を送るなら
は、人々に対してもただ漫然とした助言しかあたえることはできません。そして何かを教えるとい
う立場にたつて上からものを言うならば、反発をかうだけでしょう。

他人（ひと）の悩みを己れの悩みとすることができるよう人間になりたいものです。

寺庭婦人の このように考えてきくと、寺庭婦人はただの家庭の主婦という役割だけでなく、寺
立場の重さ 院というものによって課せられる重大な役割を荷なうものであることがわかってきま
す。また寺庭婦人としての責任の自覚が高まれば、夫である住職の立場に対する理解がより深まる
ことにもなるでしょう。お互いの理解が深まることによって、△寺庭▽は真の人間的な結合の場
であると同時に仏教者としての共同の使命をいだいている伝道弘通の核であることをお互いに確認し
あうことができるのです。

現代の家庭と マイホーム主義といわれる核家族のあり方は、△寺庭▽という立場とは全く反対の
寺庭の違い ものです。自分だけが幸せであれば良いという今日の風潮は、結局自分も幸せにな
れないことになるでしょう。不当に個人のプライバシーを犯しあうことがあってはなりません
が、個人の尊厳をお互いに尊重しあうと同時に、協力しあい、協同しあうことによってのみ解決できる

問題もあるはず。マス・コミがつくりだしたマイ・ホーム主義のもっとも悪い一面は、家庭の社会的あり方を断ちきってしまい、極端なエゴイズムを正当化してしまったことです。仏教者の在り方は僧職にあらうと在家にあらうと、このようなエゴイズムとは全く反対なものであります。宮沢賢治が書き遺しているように、「世界全体が幸せにならなければ、私の幸せはありえない」という生き方こそ、真の法華信仰の立場であります。そして、このような信仰の立場に立つて現代を觀れば、自づから為すべき使命が無限に湧きたつてくるはずであります。

二、人と接する心の基本

礼儀を重んず　日蓮聖人は「教主釈尊の出世の本懷は人の振舞にある」とまで仰せられています。**礼儀を重んずることの意味**　「『人の振舞』とは簡単にいえば人間の挙措進退、行住坐臥ということになります。人間はその文字が示しているように、人と人との間に生活しているもので、——平凡には立ち居ふるまいという形に現われたものと、その形のなかに包まれた倫理的なものと、両方を含めて『人の振舞』ということになるのです。」（茂田井教亨著「日蓮書簡に聞く」より）礼儀というものは作法にかなうことだけになりたつものではありません。本当の礼儀は、不輕菩薩が告示しになったように、人間を深く敬まう心の問題なのです。形ばかりの礼儀を心得ている人は、かえって偽善者に見えたり、四角ばった人間味の薄い人に見られがちです。だからといって、礼儀を形に現わせぬようでは、日蓮聖人のいわれている釈尊の本懷たる「振舞」とはなってきません。礼を失するよう

な人でも、なんとなく生きて行ける時代ではありませんが、それは心にもない、形式だけの礼儀が、日本を支配してしまった、その長い歴史が生み落したものでありましょう。誰をせめるのでもなく、仏教者は自からを恥ずべきなのです。修行をつんだ老禪僧が寺を訪れ、室の入口で正座し、完璧な振舞で挨拶されたとき、それだけでその方に全幅の信頼を置くことができたという話を、ある住職が語っています（日蓮宗現代宗教研究所「所報」別冊1号・「都市における伝道の諸問題」酒井謙祐述）。このことは礼儀は心だけでなく、心を表わす形もまたいかに大切なものであるかを示しています。日蓮聖人の「問注得意鈔」には問注所へ出頭した時の顔色に至るまで富木氏へ指示を与えておられますが、礼儀は挨拶や言葉ではなく、顔色立居振舞のすべてでありましょう。打ちあけた話とか、腹をわってとか、ざっくばらんととか、人間と人間とが裸になってつきあおうとするときこそ、実は自ずから生れる△礼儀▽というものが人間相互の信頼をつくりだすのです。要するに日常生活の立居振舞いから、いつわらざる心魂にいたるまで、不軽菩薩の精神に貫らぬかれています。とが法華經的人間の△礼儀▽の根本でありましょう。

心は常に柔軟でな 自我や自己顯示の欲望が強い人は、他人（ひと）の心を深く理解することはできません。主張すべきことを引っこみ思案で語らないことはいけません。ただがむしやらに自己を主張する人は、自分の意志を相手に伝えることも本当はできないのです。寿

量品の偈に「質直（しちじき）にしてこころ柔軟に一心に仏を見たてまつらんと欲して自から身命を惜しまず」とありますように、素直で柔軟な心と自分の身命を捨ててもお求めてやまぬ心の傾

斜がなくては仏を見奉ることはできません。その仏とは一切衆生のなかにましますということをして忘れてはならないのです。いかに邪惡な人と思つても、身の氣のよだつ惡鬼の形相の者であつても、心柔軟に、質直に、そして身命を惜しまず見奉ろうとするとき、はじめてそこに仏の姿が顯現するのです。檀信徒であれば當然のことですが、たとい未信の人であつても、縁あつて八法華經を信ずる者Vに接する機会があたえられた以上は、この機会は一人の人の運命を左右するほどの邂逅（であひ）となるやもしれないのです。その法華經を信ずる者とは、寺庭婦人であるあなた自身のことなのです。それはあなた自身が偉大であるからではなく、あなたの信ずる法華經の功德の大いさによるのです。いかなる人間にとつても謙虚さはもつとも美しいものです。寺庭婦人は身を飾ることよりも、なによりもその心を美しく飾ることに不斷の自省を心がけるべきでありましょう。

人を信ずることは 人と接する心の基本は、何よりも相手を合掌礼拝するように信ずることであり心の架け橋である。まず、相手を信ずることなくして一方的に信じられることはありません。また信賴關係のないところではいかなることが語りあわれても、それはおたがいの心に触れあつていくものではないのです。しかし世間には社交的ということが美德のように言われていますが、仏教者には社交は不要です。言葉を飾り、形だけの礼儀作法で人と接しあつたところで一体何になりましょうか。また世間には他人（ひと）の信賴を受けながらそれを裏切つていく人があります。しかし虚飾に満ちた人氣を集めたり、あるいは人の信賴を裏切つていくようなことは、仏教者の為すべきことではありません。一方、人を信ずることによって裏切られたからといって悔やんだり、その人を

恨んだりしてはならないのです。信じた人がたとい裏切ったとしても、それは自分の信ずる力が足りなかったのだ、自分の心が通じなかったのだ、と反省すべきでしょう。もしその人が再度あなたの前に現われたとき、あなたは本当にその人から信頼される人となることができるはずです。なぜ人を信ずることがこのように大切であるかということ、人と人とを結ぶものは、信頼関係でしかないし、信頼されるためには、いかに言葉巧みに説明するかということではなく、ただひたすらに人を信ずることの外にないということだからです。このことは夫婦・親子・兄弟の間においても同じであります。自からの心を質直柔軟にして身命を惜しまず本仏に帰依し奉るということは、二度や三度、三度や四たび裏切られたとしてもそれに屈するようなことではならないはずです。だからこそ「身命を惜しまず」と経文に示されてあるのだと思います。そのような生き方ができたならばこの世界は全く新しい様相を示していくのであります。よし、あなた自身の生活が明るく生き生きと変わってくるのであります。

三、現実を見る心・学ぶ心

相手から学びそ 人と接することは、相手を理解することからまずはじめなければなりません。人への理解する はそれぞれの生い立ちがあり、心の歴史があり、誇りがあると同時に、心にはかぎりがあります。人の心の機微・心の驕（ひだ）に触れるところまで、相手を理解してこそ、はじめて自分の考え方なり信仰のあり方なりが、相手に伝わっていくのです。人と接し、その相手から人生のこと、職業のこと、精神の歴史など数かぎりない経験と心の変遷を聞くことによって、どれほど生きた知識を得ることができるかはかり知れません。寺庭婦人の立場というのは、学ぼうとする心さえあれば、無限の可能性があるので。また相手を理解するということは、理解する自分自身の力と相対的な関係にあるものです。学ぶ心がなくなるとは、人を理解することはできません。また人と接する以上は、誰にもましてその人に関心を集中し、理解しようという努力がなければならぬのです。ちょうど教場の先生にわからないことを聞くのと同じように、自分の理解力を超えた問題に対しては、虚心に説明を受けるだけの熱心さがなければならぬでしょう。一人一人の人間への生に、深い関心を抱だくことができれば、人を理解することはできません。そのことをある文学者は△愛▽と名づけています。人間を愛するということは関心をもつことであり、それを理解することなのです。人間への限らない△愛▽がなくては、△法▽を伝えることはできないのだといえましょう。

書物から学ぶ努力 学問というものが役にたたないものであるとか、学者は机上の空論しかいわぬをおこたらぬこと ものであるというあやまった風潮があります。学問や学者の話のなかには役にたたぬものもありますが、学問を罵倒（ばとう）する習風は改めねばなりません。また宗門の出す書物はむずかしいからやさしくしろという声が必要以上に高いのはどういふわけでしょうか。むずかしかったら理解力をもつよう努力しなければいけないし、なおかつわからないときは著者なり、身近の教養をもった人に説明を求めるだけの熱意が必要です。明治生れの先駆的なある寺庭婦人は、五十才を越えても小学生がするような読み書きの勉強をしたといわれます。勉強をすることは一生の仕事なのです。本を読み、勉強をし、自分の力でものを考えることができることは、人間としての喜びのひとつでなければならぬはず。右から左に役にたつ本、例えば電車の中で読んだ話が、訪問先ですぐ話題として応用できるもの、すぐ説教の材料になるようなものを今の宗門人は求めています。しかしそれはすぐ役にたつても、永く役にたつものではありません。すぐ役にたたぬ本ほど長い間にかぎりない糧となる場合が多いのです。少くとも勉強をすることは宗教活動にたずさわるものの日課でなければならぬはず。寺庭婦人もまた同じことです。素朴な人生体験の知識だけでは、特に今日の青年の心をとらえることは困難でありましょう。宗門人が伝道活動を強化していくためには、一般的なものを含む学習運動が広がらねばなりません。日蓮聖人もまた信徒教化の主たる活動は、「止観」の学習会で行ったといわれます。日蓮聖人の主だった信徒、その主要著述である御遺文を書き送られたのは、この学習会で勉学に励げんだ富木氏などであったの

です。鎌倉時代においてさえ、富木氏等は、あれほど難解な「開目抄」や「本尊抄」を理解できるように、学習されたのです。僧職者の教化活動というものは、浮浪者や精神薄弱者、犯罪の罪を問われている者から、学者や実業家・政治家など、世俗的榮譽や位人臣を極めた人まで、平等に行わなければならないものです。それだけの見識をもつためには、不断の勉学が必要であることはいうまでもありません。そうした基礎があつてはじめて、生きとし生けるすべての人と接し、その人を八理解√することができなのです。理解する力こそが教化する力であるということを認識しておく必要があるでしょう。

ただの常識と、これは他宗であつた実話です。ある村に一軒の寺がありました。その村の一人の青仏教者の常識、年は酒ぐせが悪く酔つたあげくに、小言を言つた老人を殴り殺してしまいました。

当然警察にとられ刑に服すことになりましたが、その青年の家族は村八分にされてしまい、子供は学校へも行けなくなつてしまつたのです。その村に一軒しかない寺の住職は、宗門の役職にあつてほとんど村におらず、寺庭婦人、その宗で云うところの八坊守（ぼうもり）√さんがふだんお寺をとりしきつていたので、村八分にされた家族の人は、寺へ来て子供が友達にいじめられて学校へ行けなくなつたことを泣いて訴えていたそうです。時折訪ねてきたその家族の若い主婦が、ふと来なくなつてしまいました。そこで近所の人からどうしたのかと聞いてみると、その村に十二・三軒しかない新興宗教のS会で、その罪を犯した青年の家族の問題を討議した結果、罪はせめられてもその人を憎んではいけない。ましてその家族を憎むことはいけない。みんなが村八分にするなら

ば、S会の信者だけでその青年と青年の家族を守ろうということになり、子供は会員の子供の手で守られ、学校へ行くようになったというのです。村へ帰ってそのことを知った住職は「敗けた！」と叫んで歎いたそうです。なぜこの住職は歎いたのでしょうか。このような時にこそ、宗教は人間を救う力をもたなければならぬのに、その寺の檀家の人たちも寺庭婦人も、その青年と青年の家族に、救いの手をさしのべるだけの確固たる宗教心をもちあわせていなかったのです。長年の教化も、この場に生きては来なかったのです。その住職は長い間そのことを深く反省していたということです。社会というものは、秩序をもったものであり、法律によって規制されるものであることはいうまでもありませんが、法律は万能ではありません。また世間でいうところの常識もまた、人を救うなんの力もなく無責任なものです。犯罪者やその家族は、ひどいやつだと社会的にせめられるのが常識です。小学生にもわかる常識かもしれません。しかし、悪いのだなどという考えは、あたりまえすぎてなんの役にもたたないのです。実は常識を超えていく人間の智慧こそ、仏教の教えなのです。敗北感にうちひしがれた住職の心は推察するにあまりあるでしょう。女性の場合は特に世間態や常識や感情にとらわれて、人間を本当に信じ礼拝することができぬ場合がままあります。寺庭婦人は常に心柔軟に、ことの真実を観るような心がけていかねばなりません。

四、接する人の様々な立場について

多様なものをいくつ 寺庭婦人が面接しなければならない人々は実に多様であり、その人々がもったに分けてみることにしている問題はその一人一人の顔と同じように違うのです。しかし、違うこと

を前提として、問題を分けて考えることも、人と接するうえで一応しなければならぬ心の準備でありましょう。法華経信仰という立場からみれば、①信仰を持つている檀信徒の人②他宗の仏教の信仰を持つている人、③仏教以外の宗教を信仰している人、④自分の宗教をもっていない人、などに分けてみることもできます。また、①青少年や幼児たち、②男性と女性③老人と壮年、など世代別にみることもできます。次に①会社勤めしている人、②自分で商売や事業や農業を営んでいる人、③学校の先生のように知識的な仕事をしている人、④医者や、弁護士のように特殊な技術をもった自由業の人、⑤警察官や、県庁職員のような公務員の人、⑥政治家のような公職をもった人など職業を主として分けることもできます。また、①親としての問題②子供としての問題、③夫としての問題、④妻としての問題、⑤姑としての問題、などその人のかかえている問題によって分けることもできます。新興宗教が発展したのは八病・貧・争・Vという三つの基本的な人間と社会の悩みをとらえたからだといわれるように、こうした問題のとらえ方もあります。例えばこのように多面的な問題が複雑にからみあって一人の人間の悩みというものを形づくっているわけですが、多面的なことに多面的に答えていくと同時に、複雑なからみあった問題を解きほぐして、本質的な問題の核心を探しださねばなりません。

しかし人と接するとき、悩みはその人自身が解決するのであるという原則を忘れてはなりません。そのために第三者が為し得ることの第一歩は、先にも述べたように、その人の悩みなり問題をより深く理解することであり、そのためには充分に相手の話を聞き・学ぶということです。

自からを知 知識だけでは理解する力とはならないとしても、車の運転手の悩みを聞き、それを理
らしめる道 解するためには、「車」や「運転」についての知識が若干でもあることの方が望まし

いことはいうまでもありません。今までの実践的布教家は、相手の問題を具体的に理解していくこ
とをせずに「心掛け」や「利益」や「因縁」などに問題を転換し、あるいは抽象して解決をはかっ
てきました。それもひとつの方法であるかもしれませんが、旧来のそうしたいき方は今後批判にさ

らされていくでしょうし、そうした方法では問題が解決できない人達が多くなっていくでしょう。

人間が宗教に求めるものは、生きていくことから生れるすべての八苦／＼から解放されようとい
うことです。しかし、先に示したような安易な解決では、本来の宗教―法華経信仰への道を閉ざ
してしまうことになります。己れの苦が萬人の苦に連なり、萬人を苦から解放することが己れの
苦を救うものであるという日蓮聖人一代の宗教体験を空文化してしまうことになります。まず接し
た人を可能なかぎり理解することによって、その人のもっている問題のなから、法華経信仰へ入
る最も近い道筋を探しだしてあげなければなりません。あるいは信仰をより深める道筋を自から発
見させなければなりません。接しているあなたが相手を五十パーセント理解し得たとき、相手の人
は自分自身を九十パーセント認識し得るでしょう。何よりもまず人間は己れ自からを知ることから
自分の生きる道筋を発見できるのです。そのために寺庭婦人の立場を自から深く知らねばならな
いでしょう。

問題の中の 寺庭婦人として接する人々は様々な立場に分類できるということを書いてきましたが二、三の例 そのなかから二、三の例をあげてその基本的な態度について考えてみましょう。まず日常的に接するのが檀信徒であることはいうまでもありません。檀信徒の寺院に対する考え方や態度は、伝統や住職の個人差、地域性などがあって一般化できない面もあります。しかし今後のあるべき檀信徒像というものは一応考えてみるができます。今までは家を単位として八檀家Vというものが寺院を支える組織でした。しかし今後は、例えば先祖伝来檀家であったとしても、その伝統だけにたよって、教化伝道をないがしろにしてはなりません。特に若い人々は寺院に対して、あるいは宗教に対して、距離をもった見方をしています。また個人の信仰は何人も犯すことはできない。自主的なものであることが保障されているのですから、若い人がいずれの宗教を選ぶか、あるいは宗教から離反していくかは、本人の意志に任かされているのです。ですから、基本的には檀家の家族の一人一人が宗教心を培っていくように、個別的な問題に注意をはらい教化への道筋を考えていくべきです。そのこまやかな心配りは寺庭婦人が荷負うべきひとつの役割です。また檀信徒のなかには、住職や寺院を私物のように見たり、その立場を軽んずるような人もないわけではありません。財力をもって、あるいは社会的地位を傘にして、寺に対する特殊な立場や発言をする人をそのままにしておくことは、住職が高いところから指導教化してやるのだというような態度をとるのと同様にあやまった寺院のあり方を生みます。仏の前において人間はすべて絶対平等であり、道を求める点においてまた等しく精進を心得る者でなければならぬのです。布施のたかによって応待

の態度、顔色が変わるようでは恥しいことです。素朴なことですがそのためには仏教徒としての本当の心の修養を日々心がけねばならないでしょう。そして、心に悩みが生じたときは、安心して相談に乗れるような、そういう人柄を身につけ、檀信徒に接していかねばならないのです。

次に他宗の僧侶や信徒に接した場合は、自分が日蓮宗の寺庭婦人代表であり、自分の応待の仕方ひとつで、宗門が評価されるのだと心得るべきです。そしてなによりも親切な心配りが必要でしょう。そうした基本的な信頼を基礎としてこそ、法華経信仰の正しさが相手に伝わるのです。改宗せしめるということはなかなか困難なことですが、人間的な親しみと信頼が、相手の心を開かしめ、それがやがて法門の真理を語りあう場をつくりだすはずです。また自からの法華経信仰に絶対的確信が裏づけられた場合には折伏という教化の方法も可能でありましょうが、そのためには自からの不断の精進がなければ不可能なことです。

仏教外の宗教を信じている人に対しては、相手の宗教と信仰をまず人間的な意味で尊重する態度を持つべきです。その上で仏教を理解せしめ、法華経信仰の正しさを説得しあるいは折伏していくべきであります。

また無宗教の人に対した場合は、具体的にその人の関心や現実の生活に側した問題から充分に話を聞き相手を理解していくことをしなければなりません。相手の考え方を一方的にせめたり、宗教が有用か無用かなどという空論で争うことはもともと意味のないことです。

いかなる人に対しても見下すような態度をとることは絶対にいけません。慇懃非礼な態度もち

ろんあってはならないことです。不輕菩薩品の教えにまつまでもなく、人を敬う心を片時も忘れたならば、仏教者として、なかなかすぐ日蓮聖人のお示しになった法華經の信仰に生きる者として自かを恥ずべきであります。

五、話の心・人と接する心

「話」は話 最近「話術」ということがさかんに云われます。それを解説した本まででていませう。でも人とか、対人恐怖症の強度の人には、心理学的な療法や訓練が必要ですが普通の会話や自分の意見を述べるのに「話術」は不要です。言葉というものは、その人の人柄の現われであって、正しい信仰に導かれるならば、言葉は自然に正され、平静な表現、心をこめた表現きびしく意志を通す表現など、自然に言葉となって発露されるであります。誰でもが経験するように、自分より偉い人（そう思っている人）の前に出ると、緊張してしまって思うように言葉がでて来なくなったりします。友達や近親の心安い間柄では自然な会話ができるのに、人が大勢いるとなかなかものを云うきっかけがつかめなかったり、ひっこみ思案になって言葉を発することができなくなったりします。このことでもよくわかるように、会話というものは心のもち方によって変わり、その雰囲気によって変わるものなのです。おずおずとしてももの云えない人は、それだけ環境や相手の人に対して鋭敏に反応していることであって、くりかえし述べてきたように、接する相手を「理解」するうえでは秀れているとも云えるのです。人の心の動きの機微に鋭く反応し得ることは

秀れた面接者となる素質があるのだと思つて、自信をもつていただきたいものです。カウンセリングの達人といわれる人はとつ弁の人の方が多いのです。人と接していくうえでは雄弁である必要は毛頭ありません。むしろ人生の様々な悩みを語りあい、そのことによつて相手の人に悩みを解決する力を与えていくような人となるのには、おしゃべり屋さんではできないことです。「話じょうずは聞きじょうず」と云われている通りなのです。話術などというものに心を配る間があったら、どうしたら人に親しまれ、信頼され、心やすくなんでも話しかけられるような人間になれるか、ということを反省していくべきです。そのためにはなによりも心を正しく保つことのできるような信仰を求めていかねばなりません。信仰はしているけれど人から親しまれもせず、自己主張ばかりが外に出て、おしゃべりだなどと云われるようでは寺庭婦人として失格でありましょう。

人の憂いを己れ どのようににたくさんの本を読んで知識をたくわえても、また財産をふやしたり、**の憂いとする人** 世間で高名な地位を得たとしても、それだけでは本当に人から信頼されることも愛されることもできません。苦勞を重ねれば重ねるほど、人の苦しみや悩みを理解し得るものです。このような人のことを昔からあの人は苦勞人だからなどといつておるのがこれです。しかし、なかには自分が苦勞したのだから他人もそうすべきだし、自分が克服できた問題だから誰にでもできるはずだといつて、人の苦しみを理解しないばかりか、それをおしつける人がおります。昔の軍隊がそうでしたし封建的な職場などには今でも残っている悪風です。こんなことでは人間は悪の循環を絶つことができません。思いやりのある人、やさしい人となるためには、自からは人に先じて

苦しみを受け、人の喜びの支えとなって、他人の喜びを喜ぶということがなければならぬでしょう。人の喜びを己れの喜びとできる人こそが、実は人の愛を愛うことができるのです。それは、自からを省りみるはかりとなりましょう。同情はよせやすいものですが喜びをともにすることはむずかしいことだからです。

ヒューマニズムを 人の心の根底にヒューマニズム（人間主義）としての法華経がしっかりと根づ心に根づかせる いていなければ、その上に飾りたてられた知識や思想など、何ほどの意味もありません。ヒューマニズムだけでは、社会の問題に対して法華経的救済のあり方を求めることはできませんが、こと個別的な人間の問題に関するかぎりには、ヒューマニズムの眞の発現によってこそ解決の道を探し求めることが可能でありましょう。人と接することは、人間と人間のふれあいであり、すべてのことの出發です。そこでは「技術」であるとか「方法」であるとかというものは主役ではありません。しかし人間の関係を深めるためにはあらゆる経験と知識が役だつものであることはいうまでもないでしょう。自分の経験のなかにとじこもっているだけでは経験の内容を深め普遍することはできません。ひとりよがりな考えにおちいつてしまふでしょう。自分の経験を人の経験や知識によって正し、普遍していくことによって、はじめて正當な自己の考えというものができあがっていくのです。千万人が声を大にして語っても一人自分の考えの正しさを主張できるということを、宗祖日蓮聖人は御生涯を通じて教示せられたのですが、そのような強い信仰・信念は、かたときも勉強を忘れず精進された裏づけがあつてはじめて可能であつたのです。ただひとつのことを

思い込んで命がけに自己主張したなどという単純なものではありません。常に自己の考えや行動が正しいか正しくないかを自からに厳しく問いつめていかれて、はじめてあの果敢な信仰の主張が生れたのであります。そのことは「開目抄」にくわしくお述べになっておられるところです。ともすると日蓮宗の信仰には自からを省みない自己主張がともないがちですが、それはあらためていかねばならないものでありましょう。自己を他に主張する前に、自己を問いつめることが先でなければなりません。またただ円満な人柄だけを心がけていったのでは毒にも薬にもならない、むしろ社会的には無責任な人間になってしまいます。責任を負っていくことは必ずしも万人に認められることではありません。利害の關係・愛憎の關係というものが人間の社会に渦まいている以上、その中で本当の正しさを主張することによって摩擦を生ずることもやむを得ないでしょう。誰にも良い人だと思われようとする人は、結局自己を失ない、正しいと思うことを心に保つことができなくなってしまう。テレビや新聞が普及した今日では、そこから流れでくる情報や見解に対して、自分の考えをはっきりと持たねば時の流れに押しながされていきます。流されぬためにはおこたらず学び、自から考えるという力を養っていかねばなりません。寺庭婦人に求められ、期待されているものは、決して輕輕のものではないのだということを、しっかりと心に刻んでおいていただきたいと思ひます。

第六章 仏事の知識

仏事は日常の社会生活と密着しておりますので、歴史的な変遷もあり、また地域の風俗・慣習によつてそれぞれ多少とも特色があるようです。要は、日蓮宗の宗義を正しく理解し本来の趣旨を違えず行なうことが肝要だと思います。

一、法要と葬儀

亡くなった方の葬儀を行なうのは、日蓮宗では、靈山浄土（りょうぜんじょうど）に葬送する儀式の意味です。会衆が多数の際は、葬式を了えてから、告別式（参会者がおわかれ

の意を表する）を行なう場合もありますが、一般には葬式と告別式とを同時にやっているようです。しかし、その中心はあくまで葬式ですから、必ず僧侶が肝要の法である南無妙法蓮華經を受持し、法華經を誦誦し、御本仏に靈位を靈山浄土に摂取引入していただくよう回向し、また、靈位に靈山浄土に引入されるよう教訣（引導）をあたえるのです。葬儀はこのような意味を得て始めて修する意義があるのですから、質素であっても豪華であってもその本義を忘れてはなりません。

最近、一般に葬儀が派手になり、世間的な儀礼の面が強くなっていることは好ましい傾向とは言えません。最近の葬式改革論や無用論はこのような傾向への反撥でありましょう。住職を補佐する

寺庭婦人は、葬儀についての具体的な相談を受けることも多いと思います。そのときはその本義に適うよう指導していただきたいものです。

中陰（ちゅういん）

人が亡くなった後、七七日の喪中を中陰、または中有（ちゅうう）と言います。遺族は死亡の日から数えて七日目毎に修福や忌みの行事を修することになっているところから、この期間を八忌中〳〵と言ひ、四十九日を八忌（いみ）明け〳〵または八満中陰〳〵と言ひます。一説には、死して後、未だ次生を受けない間は靈が特定存在をするのでその間修福をするといっています。大乗仏教ではそのような形にとられず、靈位に対する心からの回向をするよう説いています。

忌日（きにち）と年回

忌日は初七日忌から七七日忌（尽七日忌ともいう）まで七日目毎のほか、百箇日忌があります。年回は、死亡の翌年が一周忌、死亡の年から数えて三年目（一周忌の翌年）が三回忌、以下七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、三十七回忌、五十回忌を数え、あとは大体百年を逐って数えます。

阿仏房の子、藤九郎守綱は父の一周忌にその舍利を身延山に分骨し、翌年、三回忌にあたる弘安三年七月二日に再び身延山に登詣しております（千日尼御返事、定遺一七六五頁）。その他にも年回の回向の例があり、お祖師さまが年回の追善を行なわれていたことを知ることができます。

年回の法要は追善供養、仏果増進、追孝報恩等の意趣で為されるわけですが、要するに年忌は修善を勧奨する為の一応の定めで、修善を行なうにいつでなければならぬとは言ふことはありません。

から、志の存するところ、歳々、月々、日々、時々、いつでもその「時」と言うべきです。

戒名（法号・法名）

法華信仰への帰依は本門の授戒を受けて確認されます（「帰正式」参照）。

このとき授与されるのが法号で、通常、戒名といわれます。現在ではほとんど死亡してから授与されていますが、本来は生前に受けて置くべきものです。お祖師さまの檀越の富木常忍は建治年中、常修院日常と号し、四条金吾の妻は日眼女と称せられるなど、法号を授与されていた例が多いようです。

現在、法号をつける際、信仰的・年令的条件等によって次のような呼称をつけています。

水子 流産、死産の子（男女ともに水子といい、水女とはいわない）

嬰子・嬰女 生れた年に死亡した子（男は嬰子、女は嬰女）

孩子・孩女 二、三才の男女（男は孩子、女は孩女、以下男女の別は類推せられたい）

童子・童女 四才より十四才までの男女、

信士・信女 十五才以上の男女、

居士・大姉 成年以上の男女で、信仰篤く宗門（または寺門）に功勞のあるもの、或は社会活動

に功績高きもの。いわば、学・徳・財にすぐれたものに授与される

大居士 右の中で殊に勝れた男子で、特別の場合以外は授与しない。この法号の際は院殿をつける。

法師

所化・学生等の未だ教師となっていない僧

法尼

普通の比丘尼

上人

能化・教師級の僧

大法尼

高德の比丘尼

聖人

六老僧・派祖等に用い、一般には遠慮することになっている。

大聖人

宗祖のみに用いる

法名は授与されるものであって、個人的な願望で勝手に変更すべきものではありません。よく問題になるのが信士・居士、信女・大姉ですが、信士とは信仰に入った人の意味、居士とは、もともと在家の学徳・高き人や富豪の意味であったようなので、信仰厚く世間的にも優れている人をそう呼んだのでありましょう。しかし、以上あげた呼び名はいずれも尊称であって、各々それに相当した尊称で満足すべきでしょう。また、今後の課題として、入信の自覚と法名の授与との関係を強化すべきであろうかと考えます。

逆修（ぎゃくしゅう）

「逆」とは「あらかじめ」の意味ですから、「予修」といってもよいわけです。生前にあらかじめ死後の冥福を折って法要を行なうことを言います。

この際、授与される法号を「逆修法号」と呼び、また法要を逆修しなくても、未亡人などで授けられたときにも「逆修法号」と呼んでいます。

塔婆

塔婆は語源的には八卒都婆（そとば）で、ストゥーパ、即ち、古代印度において仏舍利を奉安した仏塔の意味です。この塔が中国を経て日本に入り、三重塔・五重塔となったと

いわれています。が、現在では△卒都婆▽||△塔婆▽は板塔婆・角塔婆を指し、建造物はただ△塔▽と呼んでいます。

塔婆がどのようにして作られるようになったかはあまり解明されておりません。しかし、塔婆の切り込みは五輪塔から来ていると思われるので、仏舎利の供養の形が模されて塔婆造立となり、死者に対する供養となったものと考えられます。最近の調査では、少なくとも平安時代末期頃には笹塔婆供養が行なわれていたと考えられていますので、日本仏教の特殊な供養のあり方でありましょう。塔婆の上部の切り込みは、下から地・水・火・風・空の五大を表しています。

位牌（いはい）

死者の霊をまつるために板に法名をしるし、各家庭の仏壇に安置して礼拝供養し、または寺の位牌壇におさめたりする。もともと儒教で二、三世の頃、官位姓名等を記して神霊に託させる習慣を、仏教が依用したものとみわれ、わが国には禅僧が伝来し、江戸時代に一般化しました。

表面に戒名と没年月日、裏に俗名・年令等を書く場合が多い。位牌をつくるときは、仏壇の大きさ、御本尊とつり合うように心掛けなければなりません。

墓

お墓の歴史は古く、現在でもさまざまなお墓の形があります。寺院等に残っている由緒のあるもの、古い形をとどめているものはとくに大切に保存したいものです。世間にはお墓に埋葬してしまつてそれっぽなしという例もないではありません。人類の文化がすすむとともに、海へ葬る海葬や鳥葬などは行なわれなくなり、丁重に葬るようになりました。死者に対しても人間としての

誇りを失いたくないものです。終戦後、ソヴィエトで捕虜として死亡した人に対して、ソヴィエト人がお墓を大変にきれいにしていたといつて感謝していた老僧もありました。まして、日蓮宗徒はお墓を清潔に、そして喜びにつけ悲しみにつけお詣りし、人生のさまざまな流れを克服して行きたいものです。

お墓はあまり豪華にすることは望ましくありません。それよりも清潔で行き届いたものにするのが大切です。また、寺庭婦人は寺族とともに、墓域を神聖なところとしてつねに管理せねばなりません。

諷経席（ふぎんせき）

葬儀や法事を寺院で行なうとき、僧侶の会葬列席者があれば、上座に別席を設け、読経焼香のできるようにしつらえるのが礼儀です。これを八諷経席（宋音で八ふぎんせきと呼ぶ）と言います。なお、諷経席に坐するには必ず正装であるべきで、また読経は低音に唱和する程度であるべきでしょう。

二、法衣と法要式具

袈裟（けさ）

もともと比丘（びく）（出家）は三衣一鉢を所持するものの限度としていました。しかし、氣候の寒い中国や日本では印度と同様の生活型態は不可能となり、三衣は次第に象徴化されて現今のような袈裟の型態になったと考えられます。八五条（かちじょう）とか八七条（はちしちじょう）とかというのは汚塵中に遺棄された弊衣をもって作った糞掃衣（ふんぞうえ）の原意をとどめていま

す。紫・紫金・茶金・緋金等の色衣（しきえ）が用いられるようになったのは官位によって一定のものを着用するように定めた為です。

一般に用いているのは△五条▽△七条▽等ですが、その他に△九条▽から△二十五条▽までのものもあります。袈裟は布を切断し、長・短にたった衣を五条は一長一短、七条は二長一短として縫い合せます。この長短縫合のたて長の布を横について作りますが、そのたて長の一筋を条と呼びます。五条を△安陀会▽、七条を△鬱多羅僧▽、九条から二十五条を△僧伽梨▽あるいは△大衣▽等と呼んで、これらを△三衣▽と総称します。第一級の礼装には本宗では普通、七条を着用しますが九条・二十五条等を用いることもあります。

色には、素紫、紫金欄、紫金紋白、茶金欄、茶金紋、茶紋白、緋金欄、緋金紋、緋文白等の種類があり、それぞれの僧階に応じて着用します。この他に△木欄色▽（もくらんじき）があって、これが本来の袈裟のすがたでありましたが、一般には沙弥用または喪服用として用いられています。

△折五条▽はもともと五条袈裟を折り込んで用いたもので、唐の武宗が破仏を行なったときに始めて用いられたといわれますが、本宗では日清戦争の時、従軍僧が襷掛（たすきがけ）に用い、従軍袈裟といわれました。その後、活動に便利なので日常用いられていますが、現行のものは簡便に作られています。

各部分の名称を挙げると、五条袈裟の両端についている細い紐を△威儀紐▽と呼びます。△横被▽（おうひ）は五条袈裟の修多羅のつけてある幅の広い帯様のもので、肩を越して前で結びま

す。△掛絡▽（から）は象牙などで造られており、七条袈裟の左右を連絡する為の丸い環。△力紐▽（ちからひも）はまた鈎紐（つりひも）ともいい、掛絡に付てあつて前部の乳（ち）と結ぶ組紐。「袈裟の数え方」は、一幅・二幅、または一肩・二肩と数えます。

法衣

袈裟の成立と関連して、現今の法衣は中国で形作られたもので、もともとは俗服に発するものと考えられます。法衣には四種あります。（一）袍裳（ほうも）は袍と裳との二部から成り、はじめに裳をつけ、袍を着、帯を締めます。（二）直綴（ちきとつ）は（一）の袍裳を綴じあわせたもの。（三）素絹（そけん）ははじめ天台宗で官位をもつものに使用され、等身の丈（たけ）に作られましたが、のち一身半のものも用いられるようになり、諸宗で着用されるようになりました。前者を半素絹、後者を長素絹（大法会に着用）等と呼びますが、着用の際は石帯（せきたい）を用います。四道服は折五条とともに明治末年に用いられるようになった略服で、日常用いられます。

法衣の付装具

燕尾（えんび） 儀式用の僧侶の冠（かんむり）で、後方の纓（えい。ひも）が燕の尾のようであるところからこの名があります。なおこれは、法服と一連の礼装で

すから、式後の挨拶の時と雖も、式場内に於て脱ぐべきではありません。

角帽子（かくもうす） 形から名づけたもので、略燕尾とも言います。大体に於て、七条の場合は燕尾、五条の場合は角帽子となつて居ります。

縹帽子（はなだぼうし） 本宗では普通、裏頭（かとう）または襟巻といっています。羽二重大幅八尺を二つに折りつて四尺の重ねとし、その両端を縫つて袖の形の輪とします。使用の場合は、

四分の一を両方から中央へかけて折り、更に中央より二つに折り、輪袈裟のように前へ袈裟の上へ垂らします。但し、七条以上の場合には袈裟下へ垂らしても宜いことになって居ります。猶、袖の形をしていないものは単なる首巻きで、正儀のものではありません。

指貫 又は**差貫**（さしぬき） 裾に細い紐を指し貫き、その紐を括って裾をふくらませて用いる儀式用の袴。この紐のないのを「切袴」「半袴」などと言います。よくこの切袴を指貫と言って居りますが、それは誤りです。

座具（ざぐ） 梵語で「尼師壇」と言い、法要の場合、御宝前に進んで拝礼焼香などするとき拡げて敷いて用います。

念珠 数珠 むかし或る国王が仏に對し、「煩惱を消滅する良い方法はあるまいか」と問うたのに對し、仏が「むくろじの実を百八箇連らねて一連とし、南無仏・南無法・南無僧と唱えて一箇づゝ繰り、これを飽きずに繰返せば、おのづから百八の煩惱が消えて、福を得ることが出来るであらう」と教えたのが数珠の起原だとされて居ります。

数珠にはその珠の数によって四種の別があるとなつて居ります。上が千八十箇、最勝が百八箇、中が五十四箇、下が二十七箇です。またその質にも、むくろじ、蓮の実、水晶、菩提樹の実など色々あり、菩提樹の実が一番功德があるとされて居ります。然しこれは一応のことで、「至心よく万行に適し、散心、一事も適せず」で至心に念誦すれば功德に變りのある筈はありません。

本宗の念珠には左の三通りの別があります。

1、本装束（ほんしようにぞく） Ⅱ水晶のみで作った長連の房仕立てのもの。

2、半装束（はんしようにぞく） Ⅱ水晶以外の珠で作った、やはり長連の房仕立てのもの。

3、普通仕立Ⅱ1・2でない一般のもの。

右の1・2を合して装束数珠と言ひ、色衣五条乃至七条の場合はすべて装束数珠を用いることになつて居りますが、特に厳儀の場合、導師は必ず本装束を用いることになつて居ります。装束数珠は坐立ともに二環にして房を下に垂らして持ちますが、特に大きいものは親珠を左手の拇指の上に置き、房を外に垂らして持ちます。数珠を両手にかける場合の左右は、数取のない方が上位で右手数取のある方が下位で左手です。なお、古式の数珠には緒止の方には珠はありません。また、最近の研究によれば、数珠の起源は随唐の頃、称名などを数えるためにはじめて用いられたものであるといわれ、律の中にも記述がなく、南方仏教徒もこれを用いておりません。

中啓と雪洞（ばんぼり）装束数珠を用いる場合には必ず中啓。素絹五条以下の略装の場合は雪洞を用いることがあります。葬儀に会葬参列の場合は黒骨、御大葬には鈍色（にぶいろ、薄黒い色）の骨のものをを用います。中啓または雪洞を以て歩行する場合には、右手に要の部分を持ち、末広の方をやや下げて腰の辺に置きます。合掌その他の所作の場合には必ず胸の襟に挿します。礼拝の時は末広の方を左にして膝前一尺の辺に織き、経席では御経机の上下に載せて置きます。

袈裟や法衣は「福田衣」「功德衣」等と言ひ、貴重なものでありますから、その取扱ひの慎重敬虔であるべきは言うまでもありませんが、特に袈裟は七仏伝来と言われるほどですから、まず一揖

して徐ろに抜げて着用し、たたみ終った時にも一揖して藏うべきものとなって居ります。また簞笥からの出し入れを始め、その他の取扱ひ一切、すべて自分の手で行い婦人の手に触れさせないと言
うのが、古風でありました。現にそれを実行している殊勝な人も少なくありません。婦人の手に触
れると穢れる——と言うような古い考えでなく、袈裟は比丘六物の随一でありますから、これをみ
づから処理することは当然であり、且つ僧風として尊い習慣でありますから、是非これを実行し、
伝承永続させたいと存じます。

三、仏 具

梵鐘（ぼんしょう） 鐘樓（しゅうろう）に釣られている、俗に言う（つりがね）のこと。時を報じ
たり、一山の大衆を集めたり、その他非常を報じたりする為に用います。

半鐘（はんしょう） 梵鐘と同じ形で、梵鐘より小さく、二尺四五寸位の高さが普通で、大ていお
堂の一隅に釣られあり、法要等の合図に用いられます。

鑿（きん） 俗に言う「うちならし」。礼盤の左側前方、大衆席の首座の前に据えられ、その首座
の席を「鑿座（きんざ）」と言います。

磬（けい） 礼盤の右側にある用具。本来は固い石で作られたものと言われ、あまり余韻の長く引
かないのが良いとされています。

木魚（もくぎよ） 現在本宗ではあまり用いませんが、魚の形に模したのは、魚は昼夜とも目をつ

ぶらないところから、僧衆の情眼を警める意を寓したのだと言われて居ります。

木鉦（もくしょう） 本宗独特のもので、極めて近世の考案になるもの。木魚の哀調を嫌い、本宗の読經の調子に適すべく創案されたものでしょう。

板木（ばんぎ） 大きなお寺や学校などで、起床や食事やその他の合図に打ち鳴らす厚い板。広く外部に聞こえるような所に釣り下げ、撞木（しゅもく）を以て打ちます。

天蓋（てんがい） 天井から懸垂した宝蓋。本来は御本尊の頭上に覆うて懸垂したのですが、後にその前方や外陣の方へも懸垂されるようになり、やゝ形も違いますが、御本尊の上に釣るのを「仏天蓋」、その他へ釣るのを「人天蓋」と言つて居ります。

幢幡（どうばん） 御堂の天井から長く釣り下げた一對の莊嚴具。本来はキレで作ったものですが、現在は一般に六角形で三段に作られ、瓔珞を下げ、総金箔を置いた華麗なものが多いようです。**柱かくし・柱かけ** これが本来の幢幡ですが、やはり一對で、キレを以て作られ、大てい左右の丸柱などに掛けられるところから、俗にこのように言います。これに形の上から「和幡」と「唐幡」とがあります。

引鑿（いんきん） 手に持つ小さな鑿。声明（しょうみょう）の時の発音（はっとん）、付唱、起立、座拜等、すべてこれによって進退しますが、特に昇退堂等の場合、大衆を指揮誘導する役の「引者」（いんじゃ）が持つものであるところからこの名があります。

鈴（りん） 御仏壇用の小さな鑿を言います。「りん」とは宋音です。

水引（みづひき） 御堂の内陣と外陣とを画する辺の上部及び左右に垂らす幕のようなもの。大たい大柄の模様の金襴で作られ、中央に縫取の紋章か華蔓（けまん）が付けられます。

拝敷（はいしき） 御宝前の焼香机の前に敷かれている畳莫藁で、座具に型取って作られ、この上に乗って礼拝や焼香をします。文字通り礼拝用の敷物ですから、法要中式場を周旋奉行する知堂と雖も、これを踏むことは無作法として誠められて居ります。

打敷（うちしき） 御宝前の壇上荘嚴用の敷き物。但し、三角に前へ垂れる物は、浄土系慣用の物ですから、本宗ではこれを用いることを嫌います。

衣絨（えこく） 俗に言う「花皿」のこと。本来は散華する為の花を盛る器ですが、法要具としては、「散華」のほか、御経本・香盒等を載せます。猶、紐は赤が前方です。

五具足・三具足 香炉一箇、燭台と花瓶各一对の五箇が五具足で、並べ方は、香炉が中央、その左右が燭台、その外側が花。香炉、燭台、花瓶各一箇づつが三具足で、並べ方は、中央がやはり香炉、向って右が燭台。（八五頁の図参照）

香爐 香爐は本来は香を盛って炷く為の器ですが、多くは線香を立てるので、俗に「線香立」と言います。然し蓋のある香爐は、線香でも横たえるものとなって居ります。その場合「火点」は左です。

常香盤 近來はあまり見かけませんが、木製の四角な箱型のもので、その中へ特定の用具を以てこの字を連続した形に抹香を盛り、一方に火を点じて終日薫じているようにします。今でも古いお

寺にはあるでしよう。

三方 三面にくり方があるから三方の名があるわけで、このくり方が裝飾ですから、紙を垂らして隠さないのが本義です。但し供える物により、三方を汚す恐れのある場合は、紙を斜め二つ折りにしたものを前後に二枚敷き、耳を四方に立てるようにします。

香盒（こうこう） 「香合」とも書きます。円形等の小さな香の入れ物です。

曲桌（きょくろく） 導師用の折疊椅子。前方に杵（くつ）を脱いで置く小さな台が付いています。本来は瓦敷きの立礼の堂内で使用するもので、畳敷きの堂上で用うべきものではありません。

四、建造物

本堂 御本尊を奉安した御堂、お寺の根本中心の御堂の儀。飛鳥・奈良時代の建築で言えば金堂（こんどう）に相当する中心建物。

内陣（ないじん）と外陣（げじん） お堂内部の正面の一部が框（かまち）によって高くなって居り、その框を結界（けっかい）と申しますが、この結界から内部が内陣、外部が外陣です。

須弥壇（しゅみだん） 御本尊を奉安する為に装置された高い壇で須弥山（しゅみせん）に型取ったところからこの名があります。中央がくびれた形に作られているのが本来の形です。

向拝（むかひ） はい。ごうはいのつまった音） 御堂正面の入口。お堂に昇らずして御本尊に向って拝を為し得る場所の義。

大門・山門・仁王門

大きなお寺で、その境内が内廊と外廊とに区切られている場合、その外廊にある門のことで、一山の正門であるからこれを「山門」とも言い、仁王尊が安置されていれば、「仁王門」とも言います。また、この大門に通ずる参道、即ち大門通りを直ちに「大門」と称しても居ります。

中門・二天門

右の内廊にある門を「中門」と言いますが、この中門には多く、四天王のうちの持国（東方）・毘沙門（北方）の二天王が安置されて居りますので、安置されてある場合は「二天門」とも言います。

仁王（におう） 仁王とは金剛力士のことで、「守護」という義から「仁王経」になぞらえた名称と言われ、向って左が「密迹金剛（みっしゃくこんごう）」、同じく右が「那羅延金剛（ならえんこんごう）」となって居ります。

総門 山門よりずっと手前にある、寺境を総轄する門で、山門よりは簡素なのが常です。

庫裡（くり） 「庫」とは、物品を蓄えて置く府庫の義、「裡」とは屋裡の義で、寺僧の居住する僧房や、食事を調理する厨房（台所）などを含めた寺院の付属建物で、現今一般には、住職や寺族の居住する建物のこと。故に庫裡と同一屋根の下にあっても、専用の客室ならば庫裡のうちではないわけです。

方丈 文字通りには一丈四方の建物のことで、これは維摩居士の居室が一丈四方であったことに基づく名称でありますが、一般に住職の居室を指します。また直ちに住職を指して「方丈さん」な

ぞとも言います。

客殿 主人が賓客と対面する殿舎の義で、表御殿とも表座敷とも言い、正面は主人の座として一段高くなっているのが常で、寺院の客殿には大たい正面に御本尊が安置されてあります。身延で言え、祖師堂へ向って右手遙かに大玄関の見える建物がそれです。

書院 本来は読書に都合の良いように採光などを考慮した建物の義ですが、形式としては書院造りの建物のことで、その特徴は大略次の如くです。

- ・ 一棟の建物を数室に区切り
- ・ そこには襖障子（カラ紙）をはめ
- ・ 上位の室には床（こと）と棚を設け
- ・ 室の外部には入側を設け
- ・ 室と入側の境には敷居を入れて明り障子（あかり障子）をはめ
- ・ 入側の出入口には杉の板戸をはめ
- ・ 入側と漏縁との境には明り障子と雨戸を立て
- ・ 外部より入口として玄関を設ける。
- ・ 室と室との境には敷居、鴨居をつけ
- ・ 鴨居の上には欄間を造り
- ・ 床（ところ）の傍には書院窓をつけ
- ・ 室と入側には畳を敷きつめ
- ・ 側の外には漏縁（ぬれ縁）をつけ
- ・ 室内・入側等の随所に屏風や衝立を用い

この建築様式は足利時代に創案完成されたもので、右のような本格的書院造りでないまでも、日本従来の住宅客間等の建築は多かれ少なかれこれに拠らぬものはありません。

第七章 特殊法要式と年中行事

一、特殊法要式

寺院の日常活動では、法要・回向、或は修法などが中心ですが、特殊な法要式も行なう場合があります。これらの中には、あまりしばしば行うものではないものもありますが、教化活動の基本として重要なものであります。新しい教化のあり方を御住職が試みられるよう、寺庭婦人は積極的にこれに協力すべきであります。

得度式

一定の修行を積んだ在家者が剃髪し、出家となる式で、導師・両阿闍梨の執行のもとに授戒を受け、授経・授服・授名を受けます。「初心忘るべからず」という言葉がありますが、僧侶となるときは必ず得度式を行ない、得度者の覚悟を明らかにせねばなりません。

度牒下附

得度者に対して、宗門は得度の確認をし、度牒（どちうよ）を清澄寺で下附します。お祖師さまが御修行、開教なさった霊地・清澄山の御宝前で度牒を受けることは得度者にとって素晴らしい感激であります。

住職認承式

日蓮宗教師が始めて住職となるときは、祖山（身延山久遠寺）において行なわれる、住職承認式に登山せねばなりません。たとえ、年少であろうとも、住職として活動する折り目になりますから、寺族は総代・世話人と共に、新住職に添って登詣すべきであります。

晋山式（しんざんしき）

寺院の法灯を継承する式。法類・法契・檀越・信徒参列のもと、新住職が法灯相続を誓い、檀越等は外護の誠を誓います。今では一般に区別なく用いて居りますが、本末制度のあった時代には、一般末寺は「入寺式」または、「入院式」と言い、「入山式」または「晋山式」の語は本山以上の場合に限られたものでした。

出家の葬儀・年回

出家が逝去したことを遷化（せんげ）といいます。遷化とは「化導をこの世界から他の世界へ遷すこと」ですから、在家とは葬儀の意味も異なり、引導を受けることなく入歎徳（たんどく）生前の徳をたたえること）が諷誦されます。

住職の本葬は必ず後住職が決定してから、大抵は晋山式終了後、同日におこないます。それは法灯を明かにすることを第一義とするためで、それまでは仮りに密葬をとり行なうのが普通です。年回の法要も「増円妙道位隣大覚」（ぞうえんみょうどう・いりんだいかく）を祈るものです。

帰正式（きせいしき）

在家が入信したときも、帰正の式を挙げ、本門三秘の妙戒を受け、信徒となったことを確認せねばなりません。別に大袈裟な形式や振舞いなどは必要ですが、現在では、いつ信徒となったのか、御本人がどれほどそれを自覚しているのか甚だ曖昧です。これからの教化活動にはこの入信の式が是非とも必要なわけです。お祖師さま滅後、先師はそれを行なっていたことを窺い知ることができますが、今後はそれなりの時代性を考え合わせることも必要かと思えます。

成年式（せいねんしき）

最近、各地で成人式が行なわれており、寺院で行なっているところもあります。宗徒として成年に達した満二十才に、あらためて成年の自覚をもち、法華信仰によって生きて行くことを目標とすることは大切なことだと思います。宗徒の自覚を人生の折々に確認して行く式を確立して行くことは、寺院にとって今後の課題でありましょう。なお、何か記念になるものを授与することが望ましいと思います。

結婚式

日本人の平均的慣習からすると、結婚式は神前で、葬式は仏式でというのが多いようです。しかし、こうした傾向になったのはさして古いことではなく、明治時代の頃までは各自の家の仏壇の前などで三三九度の盃を行なったようです。宗徒である以上、結婚式も法華信仰の儀にのっとって行うべきです。最近では仏前結婚式の例も多くなつて来たようですから、人生の新しい門出にふさわしい式であるように心を配りたいものです。式にはお数珠を授与します。

開眼式（かいげんしき）

もともとの意味は新たに仏像の眼を開く意で、新たにできた仏像・仏画像等を供養して仏の霊を迎える儀式です。御本尊や宗祖日蓮大聖人御木像を新たにおまつりしたり、諸尊像をおまつりするときには、開眼の式を行なうよう檀信徒にも教化しましょう。また、寺院の仏具等を新たに造ったときにも同様です。

地鎮式（じちんしき）

寺院・教会が伽藍を建立するときに、建立の地を鎮（しず）めるために行ないますが、在家の場合も日蓮宗の式で行なうべきです。

起工式 地鎮式に準じて行います。

除幕式

頌徳碑・記念碑などの建設が終つて公開する前にする祝いの儀式。普通、その像・碑などを白布でおおっておき、ゆかりの人が白布を撤去します。

入仏式（落成式・開堂式）

御本尊を寺院へお迎えして安置するために営む式で、本堂等の落成式や開堂式も同様の形式で行ないます。寺院の丹精は檀信徒の資助によることが多いので、檀信徒とともに行ない、信仰増進をはかるのが一般の在り方の方です。

畜生済度式（ちくしょうさいとしき）

牛・馬・犬・猫などの家畜を埋葬したり、また弔霊をする場合は、人間に準じて簡単に行ないます。また多数に対して行なうときは施餓鬼会などの法要に準じて行ないます。これは、「有情」（うじょう）ということばがあるように一切の生けるものに対する仏陀の慈悲をいただく心持ちに発するものなのです。

二、年 中 行 事

お祖師さまの報恩法要など、日蓮宗徒として思いをあらたにして記念しなければならない日があります。普通、各寺院では孟蘭盆会・宗祖報恩会などに大法要を行なっておりますが、その他の日にもたとえ寺族だけであっても、ともにお釈迦さま、お祖師さまの御生涯と御教示を思い起し、信仰の増進をはかつて行きたいものです。

釈尊涅槃会（しゃくそんねはんえ）二月十五日

釈尊の涅槃（ねはん）即ち御入滅を偲ぶ法会。涅槃とは、もともと迷いのなくなった境地を意味

します。江戸時代には、各寺院で涅槃会を修したものでらしく、釈尊が涅槃に入ったとき、その周囲に諸菩薩はじめ、仏弟子・国王・大臣・天部・優婆塞（うばそく）・鬼神・畜類などの五十二類等が集まった状況を写した涅槃図が寺院に所蔵されることが多いようです。それは、陰暦二月十五日は現在の四月上旬頃にあたることも一つの理由であつたかも知れませんが、私たちも大切なお釈迦さまの日を忘れてはならないでしょう。総本山身延山久遠寺・大本山池上本門寺などで大法要を行ないます。

宗祖降誕会（しゅうそ・ごうたんえ）二月十六日

お祖師さまが貞応（じょうおう）元年（一二二二年）二月十六日、千葉県小湊で御誕生になられたことをお祝いする日。お祖師さまは、久遠実成の釈尊の敎命を受け、上行菩薩のおはたらきをなさるため御誕生になられたのです。お釈迦さまがお涅槃になった二月十五日の翌日、二月十六日に御誕生なさったことは何とありがたいことでしょう。

御誕生の霊地、大本山小湊誕生寺をはじめ、総本山身延山久遠寺・大本山池上本門寺など各寺で大法要を修行いたします。

彼岸会（ひがんえ）

春分の日、また秋分の日、または同日を中心とする一週間の間に行ないます。彼岸（ひがん）とは梵語の音写で、波羅蜜多（到彼岸）の意味ですが、一年に二度、昼・夜の時間が同じくなる時正という最好時に、日頃のおこたりを反省して、仏道精進の機会として定められたものです。

釈尊降誕会（しゃくそんごうたんえ）四月八日

お釈迦さまはルンビニの花園で摩耶（まや）夫人を母としてお生れになりましたが、そのとき竜が天から降りてきて香湯を濯（そそ）いだということから、△誕生仏▽に香湯・五色水・甘茶（あまちゃ）などをそそぎます。最近では△花祭▽といってもあまり通じないようになってしまいました。各地の仏教会などの花祭の行事なども行なわれていますが、四月八日には花御堂（はなみどう）をおまつりして、お釈迦さまのお誕生の日を心からお祝いしたいものです。私たちは仏教徒として、お釈迦さまを心から讃仰せねばなりません。

開宗会（かいしゅうえ）四月二十八日

建長五年（一二五三）四月二十八日、お祖師さまが勉強によって確信した法華信仰の立教を清澄寺において宣言されたことを記念する法要。この日を境として、お祖師さまは数々の法難におあいになりましたが、法華経の本懐を説けば必ず難にあうことを知りながら、立教の宣言をされたのです。私たちにしても、この月には自己の信仰を反省する日なのです。

立教開宗の霊地、清澄寺で大法要が営まれるほか、諸本山で厳修します。

伊豆法難会（いづほうなんえ）五月十二日

弘長元年（一二六一）五月十二日、お祖師さまが伊豆へ流罪されたことを記念し、お祖師さまの法華経色読の御生涯を思い起して、私たちの信仰の確信を誓う法要。霊地、伊東の仏現寺をはじめ

め、諸本山等で法要が行なわれます。

孟蘭盆会（うらばんえ）七月十五日

七月十五日（地方は月遅れの八月十五日が多い）に行なうお盆の法要。孟蘭盆（うらばん）とは逆さまにつるされたという意味で、祖先が苦しみを受けず、靈山浄土（りょうぜんじょうど）に住することを願います。実際には施餓鬼会（せがきえ）とかねて、七月または八月に日を定めて行なう例が多いのです。孟蘭盆会は、お釈迦さまの十大弟子の一人、目連尊者が地獄の苦しみにあう母を供養したことからはじまったといわれます。

また、七月（または）八月の十三日から十五日まで、檀信徒が精霊（しょうりょう）をおまねきするようしつらえた精霊棚に回向するため、棚経に住職・主管者等がまわります。

施餓鬼会（せがきえ）

法界Ⅱ万霊（法界のすべての霊）に回向を施す法要。実際には孟蘭盆会とかねて行なうことが多いのですが、法界万霊を供養するには、いつ行なってもよいわけです。あらかじめ、施餓鬼棚を作り、供物をそなえ、小幡・水・米を用意します。

松葉谷法難会（まつばがやつほうなんえ）八月二十七日

お祖師さまが文応元年（一二六〇）八月二十七日、鎌倉松葉ヶ谷（まつばがやつ）の御草庵を焼打ちにされた日を記念して行ないます。

竜口法難会（りゅうこうほうなんえ）九月十二日

お祖師さまが幕府の迫害を受け、文永八年九月十二日、片瀬竜ノ口（現在、藤沢市片瀬 龍口寺所在地）において頸を切られんとしたとき、奇瑞が現れて難をまぬがれたことを記念する日。竜口法難の靈蹟、竜口寺において法難会が行なわれるほか、諸本山等で法要が営なれます。

佐渡法難会（さどほうなんえ）十月十日

お祖師さまは龍口法難の後、相模の依智（今の厚木市）の本間氏の邸にとどめられ、同年十月十日、依智を起って佐渡に配流されました。その御苦難を思い起し、信心の増進を祈る法会です。

御会式（おえしき）十月十三日

また、宗祖涅槃会ともいう。お祖師さまは弘安五年十月十三日辰の刻（朝八時頃）池上宗仲の邸で御入滅あそばされました。しかし、それは非滅の滅をお示しになったのであって、実はお祖師さまの肉体は滅びても、御本身は末法万年の私たちをお導きくださっているのです。私たち門下はお祖師さまの御生涯を思い、そして御化導をあらわして行く義務があるのです。

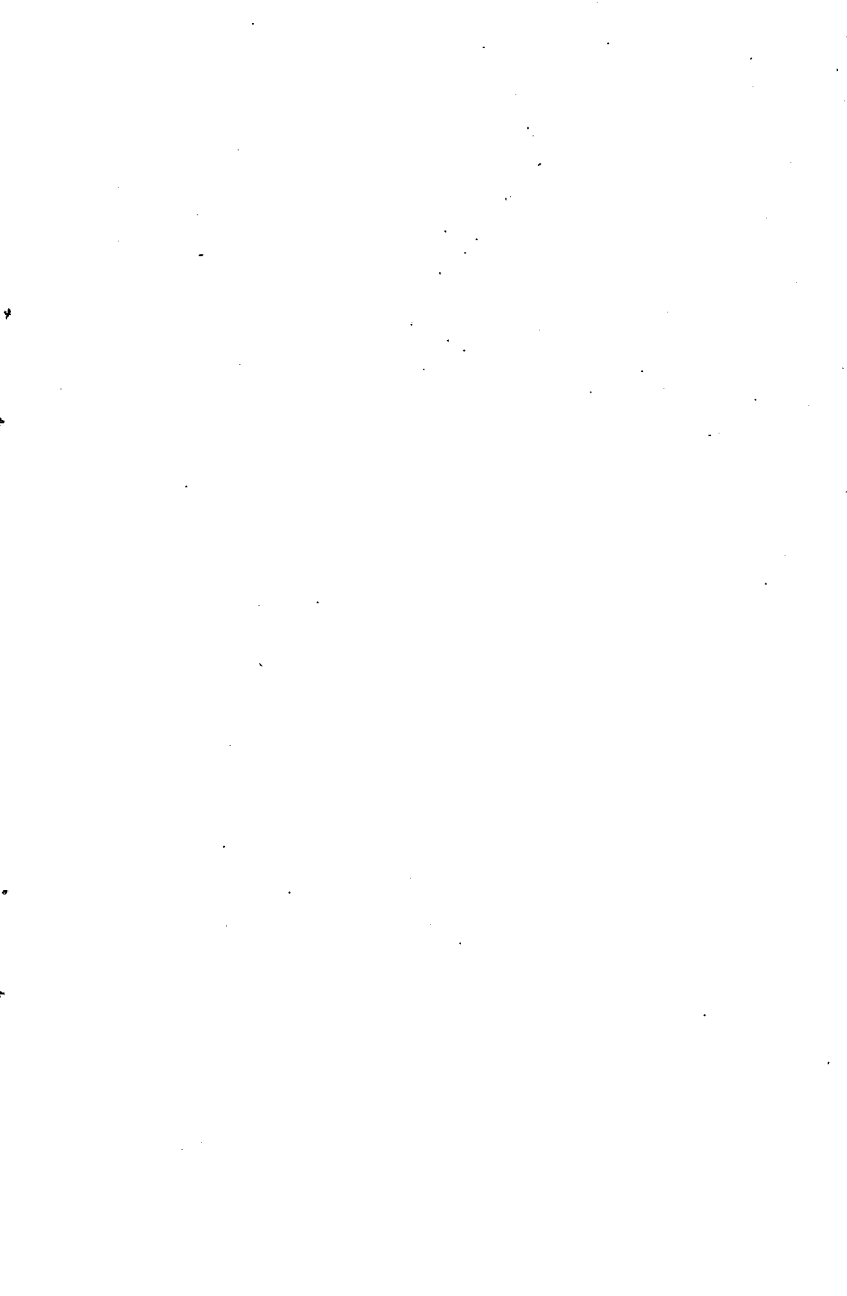
御入滅の靈地、池上本門寺（東京都大田区）、総本山身延山久遠寺をはじめ、すべての日蓮宗の寺院は必らず、お祖師さまに対する報恩の法会として、御会式を行ないます。

東条法難会（とうじょうほうなんえ）十一月十一日

または小松原法難会ともいう。文永元年十一月十一日、房州東条の松原大路で地頭、東条景信等によってお祖師さまは襲撃されました。弟子一人が殺され、数人が重傷を負ったということです。東条法難の靈地、小松原鏡忍寺をはじめ各本山等で法会が営なれます。

釈尊成道会（しゃくそんじょうどうえ）十二月八日

お釈迦さまがお覚（さと）りを開かれたことを記念する法会。お釈迦さまは難行・苦行をしていろいろな人に教えを乞いましたが、真理は誰も覚っていないことを知りました。三週間の間、菩提樹（ぼだいじゅ）の下で静観を凝らし、十二月八日の未明に大悟されたのです。このお覚りの御本意は、法華経に来てはじめて顕示されました。



附

I 回 向 文

II 宗門のこよみ

III 日蓮宗の機構

III 寺庭婦人のための参考書目

V 聖跡巡拝の手引き

回 向 文

朝夕のおつとめの後の回向の一例を示します。釈尊の御聖日（八日・十五日等）には「釈尊回向を、宗祖の御聖日（十三日等）には「宗祖回向」を、先師上人の命日には「先師回向」を、先祖の命日には「一般回向」を、それぞれ唱えて、心からの回向をいたしましう。

釈 尊 回 向

上來じようらい慎うやましみ恭じゆじつて受持たてまつし奉みようる妙法蓮華經、讀誦どくじゆし奉たてまつる一乘妙典。鳩あつむる所の功德くどく、南無本門壽量むほんもんじゆりようの本尊ほんぞん久遠実成くおんじつじよう本師釈迦牟尼ほんししかむに仏ぶつに回向えこうし慈恩じおんに報酬ほうしゆし、以もつて恩山おんざんの一塵いちじんに報ほうじ徳海とくかいの一滴いつてきに謝しゃし奉たてまつる。世尊せそんは大恩だいおんまします。希有けううの事じを以もつて哀愍教化あいみんきやうけし、我等われらを利益りやくし給たまふ。無量億劫むりようおくこウにも誰たれか能よく報ほうずる者ものあらんや。手足しゆそくを以もつて供給くききやうし、頭頂づちようを以もつて礼敬らいききやうし、一切いっさいを以もつて供養くやうするとも皆報みなほうずること能あたはじ。大慈大悲報恩謝徳だいじだいひほうおんしやとく南無妙法蓮華經。

宗 祖 回 向

上來じようらい慎いつしうみやま恭うやまつて受持じゆじし奉たてまつる妙法蓮華經みよほうれんげきやう、誦誦どくじゆし奉たてまつる一乘妙典いちじやうみよてん、鳩あつむる所の功德くどく、南無末法唱導師本化上行高祖日蓮大菩薩なむまつぼうしやうどうしほんげじやうぎやうこうそにちれんだいほさうに回向えこうし慈恩じおんに報酬ほうしゆし、以もつて恩山おんざんの一塵いちじんに報ほうじ徳海とくかいの一滴いつてきに謝しやし奉たてまつる。日月にちがつの光明こうみやうの能よく諸もろもろの幽冥ゆうみやうを除のぞくが如ごとく、斯この人世間ひとせけんに行ぎやうじて能よく衆生しゆじやうの闇やみを滅めつし、世間せけんの法ほうに染そまざることを、蓮華れんげの水みづに在あるが如ごとくならん。大慈大悲報恩謝徳だいじだいひほうおんしやとく。南無妙法蓮華經。

先 師 回 向

上來じようらい鳩あつむる所の功德くどく、○○上人しやうにんに回向えこうし慈恩じおんに報酬ほうしゆす。仰おほぎ願ねがはくば○○上人しやうにん、一念いちねん三千さんぜんの妙土みよとうどに於おいて加拝かはい法音ほうおんの供養くやうを享うけ、普現色身三昧ふけんしきんさんまいに入いつて淨仏国土じやうぶつこくどの化用けやうを施ほどこし給たまはんことを。在在諸仏土常与師具生ざいざいしよぶつとじやうよしぐしやう。南無妙法蓮華經。

一 般 回 向

上來鳩る所の功德、○○精靈に回向し報地を莊嚴す。仰ぎ願はくば精靈、白業縁起の宝土に於て回向供養の法樂をうけ、無始の重障を滅除し、親り諸仏を見奉ることを得て妙法を聴受し、三因を開発し三徳を資成し、この宝乘に乗じて普く法界に遊び、疾く道場に趣いて仏知見を開き、宝蓮華に坐して等正覺を成ぜんことを。南無妙法蓮華經。

宗門のこよみ

正月

一日 元日。初詣

小寒 寒修行始る

十三日 身延山御頭会、曳馬式

二月

節分 追儺会

十日 日蓮宗大荒行堂成満会

十五日 釈尊御涅槃会

十六日 日蓮聖人御降誕会

三月

春分の日 彼岸会

その前後一週間 春彼岸

四月

〔度牒交付式〕

六 日 身延山千部会（六・七・八日）

諸山千部会

〔住職認証親授式〕

八 日 釈尊降誕会（灌仏会・花まつり）

第一期信行道場始る（身延山に於て）

二十八日 開宗会

五 月

六 日 身延山釈尊御降誕会（六・七・八日）

十二日 日蓮聖人伊豆御法難会

日蓮宗普通講習（身延山大学に於て）

六 月

一 日 身延山祖師堂御更衣

十五日 立正大学開校記念日

十七日 身延山開闢会（十五日・十六日・十七日）

二十四日 清正公忌

七 月

十三日 孟蘭盆会。（十三・十四日・十五日・十六日）

二十五日 第二期信行道場始る(身延山に於て)

八月

十三日 月遅れ孟蘭盆会(十三・十四・十五・十六日)

十五日 日蓮聖人御慈母忌

二十七日 日蓮聖人松葉ヶ谷御法難会

九月

十日 日蓮聖人第二回国家諫曉

十二日 日蓮聖人竜ノ口御法難会

十七日 身延七面山大祭(十七・十八・十九日)

秋分の日 彼岸会

その前後一週間 秋彼岸

十月

一日 日 御更衣

十日 日 日蓮聖人佐渡配流

十一日 身延山宗祖御涅槃会(十一・十二・十三日)

十二日 池上本門寺お会式

十三日 日蓮聖人御命日

諸山御会式

日蓮宗教学研究発表大会

十一月

一日 日蓮宗大荒行堂始る

十一日 日蓮聖人小松原御法難会

月遅れ諸山お会式

十二月

八日 釈尊成道会

日蓮宗の機構

祖山 身延山久遠寺は祖山とよび、本宗の総本山であります。総本山の住職を法主（ほっす）とい
い、常に日蓮大聖人の靈廟を格護されております。

靈蹟寺院 日蓮聖人の御生涯において重要な聖蹟、誕生、出家、法難、入滅を記念して建立された
由緒寺院 寺院で、十一ヶ寺あります。宗門史上顕著な歴史を持った寺院を由緒寺院と呼びます。

また寺院の伝統によって大本山、本山の呼称があり、現在四十二ヶ寺あります。

宗門制度 日蓮宗は日蓮聖人の教えによって開かれた伝統教団であり、今日の宗教法人法によって「日蓮宗」という教団を構成したものであります。また本宗の宗教活動や教団の宗務を取扱う機関として中央に「宗務院」、地方に「宗務所」が置かれています。

△**管長**▽ 教団の最高の統理者であります。

△**宗務内局**▽ 宗務を執行するために内局が置かれ、その代表者を宗務総長といひ、一切の宗務を指揮監督する最高責任を負っています。

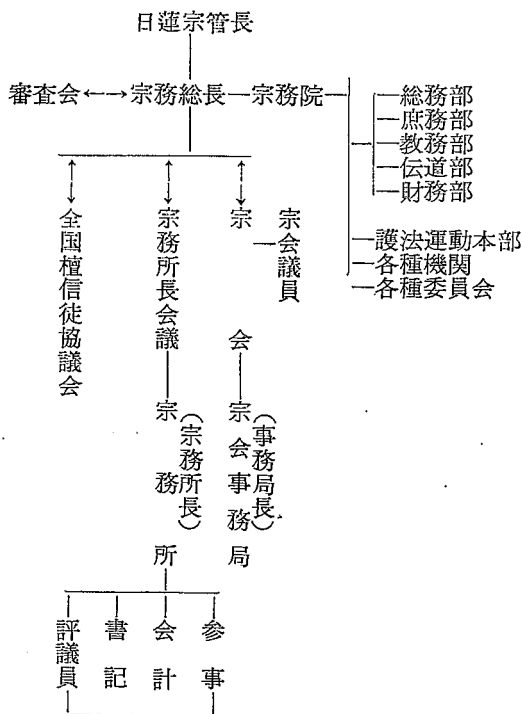
△**宗会**▽ 本宗の重要な宗務を議決するために全国から選出された宗会議員四十五名で構成し、議長をおいて事案を議決しています。

△**審査会**▽ 審査会は本宗僧侶の非行及び種々の紛争を審査し、僧侶の姿勢を正した正常な寺院経営を行わしめるために調停または処分判決する宗門の裁判機関であります。

ほかに監査会・宗務顧問会・各種の審議会・委員会などがあって、重要な宗務案件はこれらの機関で決められるしくみになっています。

宗務所 宗務所は地方の布教や社会教化、宗務執行のために設けられたもので、宗務所長が総括しています。全国に七十四の宗務所があります。

＜教団機構略図＞



護法運動 教団の體質を改善し、正法を護持する教団再建のために、昭和四十一年より「護法運動」を行っています。本部は宗務院におき、各地方には支部が宗務所に置かれています。

祖廟輪番 日蓮聖人御入滅後門弟の祖廟輪番の故事によって、全国の僧侶、檀信徒は輪番奉仕をすることになっており、祖廟輪番本部（祖山にある）の指示で参拝奉仕を行っています。

社会教化事業 本宗ではいろいろな社会事業教化を行っています。たとえば保育、里親、幼稚園、青少年保護、教諭、茶華道、書道教室、青年会、小供会、日曜学校、老人ホームなどの社会教化があります。

現代宗教研究所 現代における教団の諸問題を解明するために、いろいろな調査、研究を行い本宗の教学布教に寄与しています。研究所は宗務院に置かれております。

立正育英会 本宗の次代を荷う人材を養成する為に設けられ、学業優秀な者に奨学金を支給しています。

開教庁 アメリカ本土、ハワイ、カナダ、南米ブラジルに本宗直属の一五の教会を有し、開教以来百年を経て二世三世にとゞまらずアメリカ人の教化にも相当の実績を持っています。

教育機関 本宗の教師育成のために種々の教育機関があります。その主なものは次の通りです。

△学校▽立正大学（大学院、大学、短大）身延山短期大学、身延山高等学校において宗学教育を行っています。

△信行道場▽清澄山で本宗の得度を受けた者に教師、教師補、補教の資格を与えるため、この道

場において三十五日間の修練を行ないます。

△布教研修所▽ 護法運動を推進するために布教の仕方や組織などの高度な伝道理論、技術を研修させ、組織推進員の養成機関で、研修期間は六ヶ月であります。

△加行所▽ 本宗の修法を授けるため加行所（荒行堂）が設けられています。百日間の苦修練行を行い、加持祈禱の秘法を伝受した教師には、修法師の資格が与えられます。現在身延山と中山遠寿院で開設されています。

△検定試験▽ 所定の宗学教育機関を経ず他学の卒業者の登用制度として、宗学の理解に応じた検定試験制度があります。普通試験（甲乙二種）高等試験（甲乙二種）があり、合格者には相應の資格が与えられます。

△布教院▽ 本宗伝道のために有能なる専任の布教師を育成する機関で、口説布教ことに本宗独自のクリ弁（祖伝）を習得させ高座説教の技術をもって興宗の一助とすることを目的とします。年一回（十五日間）由緒寺院にて開設されます。

△沙弥講（僧風林）▽ 本宗僧侶の志す者で、小学五年～中学三年までの者の僧風教育を行います。年一回夏休み中に開設され、お経の読み方や法衣の扱い方など基礎を教えます。

寺院・教会・結社 本宗には現在約五千ヶ寺があつて、日蓮聖人の教えをひろめています。またその責任者として寺院には住職、教会には担任、結社には教導があり、また、檀信徒総代、世話人をおいて寺院・教会・結社を護持しています。

僧侶・檀信徒 本宗の發展のために精進し、一致協力して日蓮聖人の教えをひろめている者には、

僧侶と檀信徒があります。

現在およそ僧侶一万八千名、檀信徒は一八〇万世帯があります。また寺院・教会・結社に所属する僧侶・檀信徒によって、いろいろな組織、例えば信行会・護持会・檀信徒協議会等が持たれています。

檀信徒協議会 全国の地区より選ばれた檀信徒の代表が本宗の發展のために協議し、宗門の事業に協力して行く機関であります。

宗門関係の学校事業

立正大学学園（東京都）

大学院、大学、短期大学、高校、中学があります。立正大学は明治三十七年創立、立正精神（真実・正義・和平）で一貫した教育を理想としています。その歴史も江戸時代の檀林からはじまって今日に至り学問研究、教育に充実した環境を与えています。本宗唯一の総合大学で、大学院（文学研究科）大学（仏教学部、文学部、経営学部、経済学部、）短期大学部（夜間）があり、仏教学部は高度の宗学教育を行って本宗の有能な僧侶を養成しています。

また奈良立正女子美術学院（奈良市）があり、工業美術、デザイン（商業、服飾、染色）等女子の芸術教育を行っています。高校・中学を併設しています。

身延山短期大学々々園（山梨県）

本学は短期大学（三年制）高校、別科があり、その歴史も江戸時代の西谷檀林から今日まで、宗祖大聖人に給仕し、人間形成を目標に行学兼備に務めています。大聖人の聖地として自然環境に恵まれ、本宗の僧尼信徒の子弟の宗学教育を専門的に行っています。高校を付設しています。

堀之内学園（東京都）

東京立正女子短期大学は仏教の知見・深敬・知恩の三精神で、女子の人間教育と専門職を育成することを目的とし、ことに実用英語を中心に一世紀の家政学ともいべき秘書学と一般教養を授けます。定員二〇〇名。本校は高校・中学を一貫して女子教育にあたっています。

立正学園（東京都）

立正女子大学・家政学部・教養学部・短期大学部があり、人間愛を中心に女子の一貫教育を目的として、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学が昭和二年に創設され、今日に至っています。家政学部には家政科・児童科・教育学部には初等教育・中等教育があつて教員を養成しています。

法音寺学園（名古屋）

日本福祉大学、（社会福祉学部）女子短期大学部、立花高等学校からなり、仏教精神を基調とした社会福祉事業の専門職員の養成を目的として昭和二十八年に創立されました。

日本福祉大学は、社会福祉専攻をする単科大学で、社会福祉の研究と教育に力を入れ、社会福祉の高度な理論と専門技術を教えています。女子短大は教育科、生活科があつて女子の専門職知識を与えています。

参考書目

(寺庭婦人の入門書、また欠くことのできない主要なものにとどめた)

法華經と日蓮聖人御遺文

真訓 妙法蓮華經 (平樂寺書店)
対照

坂本幸男 法華經上・中・下 漢訳と梵語の訳と対照
岩本 裕 久保田正文 妙法蓮華經 (岩波文庫)

江南文三 日本語の法華經 (宝文館)
久保田正文 妙法蓮華經 初心者向け
江南文三 訳 (大蔵出版) //

立正大学日蓮 昭和 日蓮聖人遺文全四卷 (身延山)
教学研究 定本 現在に伝えられるすべての御遺文を集録、
所編 最も権威がある

日蓮聖人御遺文 (靈艮閣版 山喜房仏書林再刊) 右書の底本となったもの
立正安国会編 日蓮大聖人 御真蹟対照録三卷 (立正安国会) 御真蹟遺文をそのまま集録したもの
御真蹟

浅井要麟編 昭和 日蓮聖人遺文全集全三卷 (平樂寺書店) 書き下しに改め遺文や人名等を解説
新修 日蓮文集
兜木正亨校注 日蓮文集
姉崎正治校注 日蓮聖人文抄 (岩波文庫) 初心者向けに集録、註を加える
(岩波文庫) 絶版

日蓮聖人の御伝記を知るために

室住一妙著 日蓮大聖人と俱に (教育新潮社)

鈴木一成編著 日蓮聖人正伝 (平樂寺書店) 日蓮聖人の御遺文による聖人伝

執行海秀著 日蓮聖人とその思想 (//) 初心者向

久保田正文著 日蓮聖人御伝 (大法輪閣)

高木豊著 日蓮とその門弟 (弘文堂) 実証史学的研究

清水竜山著 日蓮聖人の生涯 (新潮社) 信仰的聖人伝 (絶版)

山川智応著 日蓮聖人伝十講 (新潮社) // (//)

高橋智遍著 日蓮聖人伝小考 伝説を集めた日蓮聖人伝

塩田義遜著 日蓮聖人の生涯 (信立寺刊)

日蓮聖人の御遺文を読むために

室住一妙著 開目抄に聞く (教育新潮社)

茂田井教亨著

日蓮書簡に聞く

(平樂寺書店)

//

日蓮聖人の書簡

(平樂寺書店)

//

日蓮聖人御消息文講話

(山喜房仏書林)

△日蓮聖人御遺文講義▽全十八卷(竜吟社刊・日蓮聖人御遺文研究会再刊)

△日蓮聖人遺文全集講義▽全二十九卷(大林閣)

執行・坂本他

国訳一切経・諸宗部二十五(大東出版社)

古典日本文学

仏教文学集

(筑摩書房)

日本古典
文学大系

親鸞集・日蓮集

(岩波書店)

法華経を理解するために

望月敏厚著

法華経講話

(平樂寺書店)

中川日史著

法華経の常識

(平樂寺書店)

久保田正文著

法華経に聞く

(教育新潮社)

//

法華経講話

(河出書房)

日蓮宗の歴史を知るために

影山堯雄著

日蓮教国史概説

(平樂寺書店) 碩学による概説

宮崎英修著

法華の殉教者たち

(平樂寺書店) 平易な日蓮宗の殉教史

宮崎英修著

苦しみを乗り越える力

(教育新潮社) 易しく宗門史を説く

立正大学日蓮
教学研究所編

日蓮教団全史上

(平樂寺書店) 詳細な研究

執行海秀著

日蓮宗信仰の種種相

(教育新潮社) 初心者向け各派の展開

日蓮宗の教義を知るために

立正大学日蓮
教学研究所編

日蓮宗読本

(平樂寺書店) 初心者向けではあるが、日蓮教義の基本を示す

茂田井教亨著

日蓮宗入門

(教育新潮社)

馬田行啓著

日蓮聖人の宗教と哲学

()

北尾日大著

本化宗学綱要

(平樂寺書店)

塩田義遜著

日蓮宗学概論

(平樂寺書店)

望月歆厚著

日蓮教学の研究

(平樂寺書店) 日蓮教学の諸問題の専門的研究

浅井要麟著

日蓮聖人教学の研究

() 日蓮聖人教学の基礎的専門研究

茂田井教亨著

観心本尊抄研究序説

(山喜房仏書林) 日蓮聖人の主著・観心本尊抄の根本的研究

執行海秀著

日蓮宗教学史

(平樂寺書店) 教義の展開の概要

望月歆厚著

日蓮宗学説史

() 教義の展開の詳細な研究

法要式・布教のあり方を学ぶために

日蓮宗編

宗定日蓮宗法要式

(日蓮宗々務院)

宮崎英修編著

新編日蓮宗信行要典

(平樂寺書店)

片山日幹編著

信行要典

(北山本門寺)

凌雲日尚

道風軌範(犀浦沙弥訓)

(日蓮宗伝道組合) 絶版

日蓮宗現代
宗教研究所編

説教のしかた

(日蓮宗々務院)

//

諸宗教理解の手引

() //

中濃教篤著

新興宗教とは何か

() //

近江幸正著

伝道のあゆみ

() //

佐藤智雄著

新らしい布教法

(平樂寺書店)

仏教理解のために

執行海秀著

日本仏教の源流

(日蓮宗々務院)

講座八仏教V

(大蔵出版社)

野村耀昌著

法華経史話

(平樂寺書店)

兜木正亨著

法華経史話

() //

中村瑞隆著

釈尊の思想

(平樂寺書店)

浅井円道著

伝教大師

() //

勝呂信静著

日蓮思想の根本問題

(教育新潮社)

心の糧のために

藤井日静著

救国の宗教を生きる

(教育新潮社)

菅谷正貫著

哲学と宗教

() //

渡辺公允著

いのちをみつめて

() //

榎井恵学著

生活の中の仏教

() //

浅野晃著

雨ニモマケズ

() //

藤井日達著

仏教と平和

() //

金子日威著

仏法と世法

() //

岩間湛良著

この心で活きる

() //

前野前光集

宗教へのいざない

() //

すぎえりゆう著

地上光あり

() //

紀野一義著

業の花びら

() //

成川文雅著

知りそして行なう

() //

岩間湛良著

人生には必ず活路がある（大東出版社）

辞書

田中智学監修

本化聖典大辞林三卷

（国柱会）

柴田一能
山田一英編

法華辞典

（山喜房仏書林再刊）

宇井伯寿監修

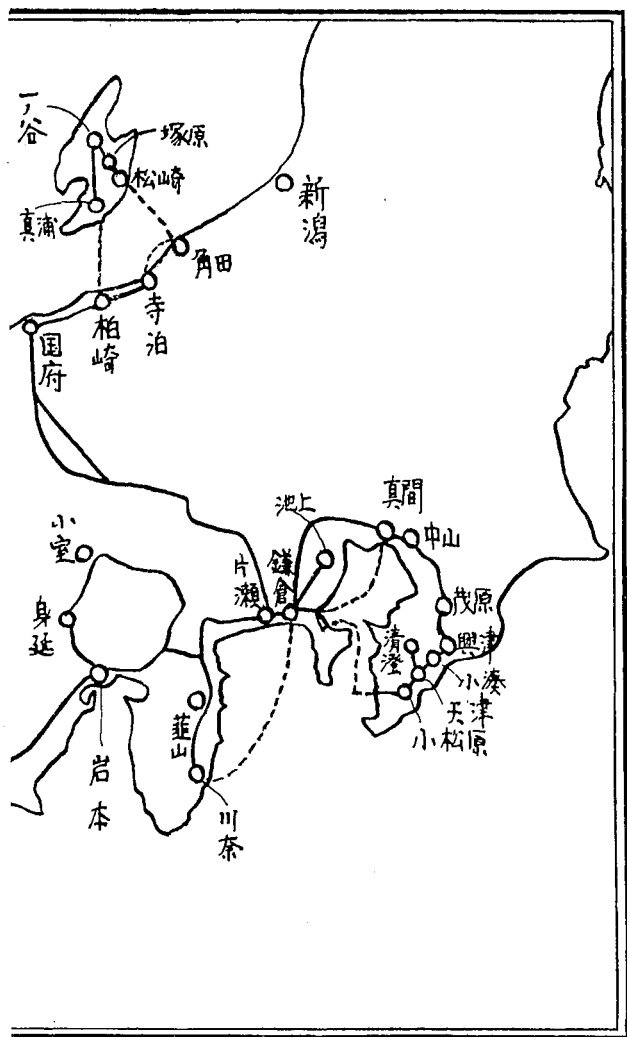
仏教辞典

（大東出版社）

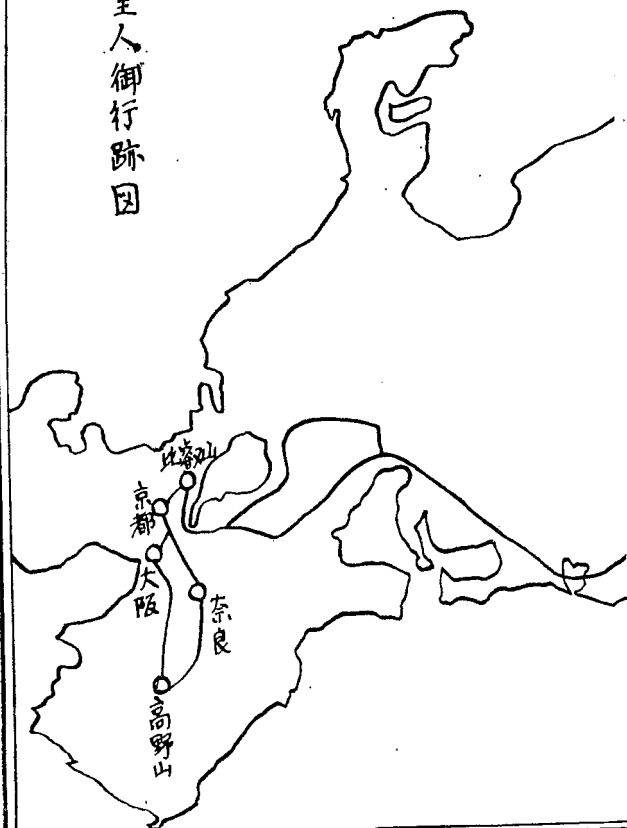
中村元監修

新・仏教辞典

（誠信書房）



日蓮聖人御行跡図



聖跡巡拝の手引

日蓮聖人ゆかりの聖跡をたずねて、数人で、あるいは団体で参詣する方が今頃多くなってきました。それもいくつかの聖跡を選んで、バスやタクシーを利用し、巡拝するようであります。ハイキングをかねた若い人達は参拝を含めたコースをとっているようです。

檀信徒の方がたや巡拝で希望のかたのために、日蓮宗のご聖跡のあらましをご案内いたします。本宗のご聖跡を訪れ参拝する上でも、また檀信徒の方がたや未信徒の方がたをご案内する上でも、ガイドブックとしてご覧頂きますように願って編集をしました。

団体参拝や少人数の巡拝にいたしましても、一般の観光とちがつて、さすがに大聖人ゆかりのご霊地に参りますと、身も心もすがすがしく、清浄な感を深くいたすものであります。すでにご参詣の方には一生の思い出となり、いつかなつかしい思い出となつて花が咲くこともあります。もう一度行ってみたいと思っておられる方もあります。これから参詣される方もあると思います。どうぞ、ご一緒に巡拝して、大聖人の御在世を偲び、法華信仰をたしかめて行くようにおすすしめします。

大聖人ゆかりのご霊跡は、大聖人ご入滅後、本宗の僧俗一同が昼夜、七百数十年お護りしてきたものであります。(大聖人のご霊蹟はすべて八日蓮宗に帰属しております。)大聖人以来の法灯がどのように格護されてきたか、百聞一見にしかずの格言のとうり、参拝してはじめてわかるので

あります。また大聖人滅後の先師の偉業、有名な檀越の信仰を今日に伝えている山緒ある寺院、遺跡もたくさん保存されております。

そこで、一応これだけは知っておきたいと思われるものを選択して載せることにします。

大聖人ご一代のご聖跡のあらましは、

- (1) 房 総
- (2) 鎌 倉
- (3) 伊 豆
- (4) 佐 渡
- (5) 身延山と周辺
- (6) 東京（池上）と周辺

と、六つに分けられるのですが、大聖人滅後の先師の偉業を伝える遺跡は全国的に分布しております。

△房 総▽

誕生寺 （千葉県安房郡天津小湊）

大聖人ご誕生の地に誕生寺が建立されています。その由来は建治二年（一二七六）に勝浦の城主佐久間重貞公が大聖人のお弟子の日家上人を外護してお堂を建てたことにはじまって、今日見るよ

うな立派な大堂が建立されたのであります。

総門、仁王門、祖師堂、釈迦堂、本堂、客殿、信徒会館などがあります。当寺には大聖人のご真筆をはじめ由緒のある宝物が格護されています。ほかにご誕生のとき涌出したという八誕生井戸、聖人の幼年の八薬王磨の像を伝えています。

主な行事には、二月十六日蓮聖人降誕会 四月十六日千部読誦会 六月五日宗祖夏衣御召替会 八月一日靈宝物虫弘会 十月五日宗祖冬衣御召替会 十一月十二日御会式 七ツ児詣り

名勝八妙ノ浦は天然記念物に指定され、大ダイ、小ダイの大群が棲息、保護されています。昔大聖人が妙ノ浦（たえのうら）で鯛を獲ることを禁じたことから起ったと云われ、堅く守られているものであります。遊覧船が数分おきに出ておりますから、鯛が船べりまで来るのが見られます。

誕生寺附近には、大聖人ゆかりの聖跡が多く、聖人のご両親墓所は八妙蓮寺にあります。また小松原法難のときのがれて聖人が養生されたと伝える八日蓮寺があります。

〔交通〕房総東線、小湊駅下車、バス五分、徒歩二十五分

〔宿泊〕誕生寺参籠一〇〇名 近隣の旅館も十数軒あります。

清澄寺（千葉県安房天津小湊町）

聖人の出家得度の地であり、立教開宗の聖地であります。当寺の周囲は千古の樹林にかこまれた深山で、大聖人の修学当時を今日に伝えています。

春の桜、四季を通じて咲くツツジ、自然の美しさといい、真夏でも涼しく、山頂から太平洋の大

海原を展望するのもまた格別であります。

当寺はもと真言宗に所属していましたが、日蓮聖人立教開宗七百年（昭和二十八年）に日蓮宗に転じましたが、大摩尼殿、参籠殿、信育道場等があり、境内には聖人剃髪の髮塚、凡血の笹、御師道普房の墓所があります。

△旭ヶ森△は大聖人が立教開宗のとき太平洋の朝日を拝してお題目を唱えられたと伝え、聖人の銅像が造立されています。またその横道を通じて仏舍利塔が太平洋を眼下に見降す位置に建っています。

〔交通〕 房総東線、天津駅下車、バス三十分、タクシー二十分

〔宿泊〕 参籠することができます。

妙覚寺 （千葉県勝浦町興津）

城主佐久間重貞公は文永初年疫病が流行したことをうれいて大聖人をまねき、法華經の修法によってたちまちに疫病の流行がおさまった。その不思議に感じた城主佐久間公は大聖人の門に入り、愛児二人をお弟子とされました。妙覚寺の名は大聖人の命名と伝えられている古刹であり、大聖人の房総伝道の霊跡であります。

祖師堂妙覚殿に日法上人の作、祖師像が安置されています。江戸時代には大きな堂塔があったが数度の火災にあつて焼失、境内の老松にありし日をしのびれます。

鏡忍寺 （千葉県安房郡鴨川町広場小松原）

大聖人が九死に一生を得た小松原法難を記念して、鏡忍寺が弘安四年に建立されました。鏡忍寺という寺号はお弟子の鏡忍房の殉教にちなんで付けられたもので、地頭東条景信の迫害と聖人の法華経弘通が容易でなかった当時のありさまが偲ばれます。

当寺には総門、仁王門、客殿、祖師堂、書院等が平地にあって、静かな偉観を見ることが出来ます。また、寺宝には富木殿御書、註画讀五冊等の宝物も多く、大聖人法難当時を現在に伝えています。

附近には△上人塚▽とよばれる、天津の城主工藤吉隆公の殉教埋葬の塚があり、また△掛松寺▽はご法難のとき工藤吉隆公の郎党に聖人が隠まれ、傷の手当を受けた場所と伝えています。

〔交通〕房総東線・西線、鴨川駅下車、バス七分、タクシーあり

〔宿泊〕鴨川に旅館あり、当寺に参籠施設を建設中、収容人員五十名程度、

（中山法華経寺、真間弘法寺については、△東京附近▽の項参照）

藻原寺（千葉県茂原市茂原）

茂原の城主斎藤兼綱公は大聖人に帰依し、その邸を寺としたことにはじまって、六老僧日向上人が兼職された由緒ある名刹であります。

△鎌 倉▽

鎌倉市内には大聖人の伝道の聖跡をはじめ、お弟子や檀越の遺跡も多い。

本覚寺 (鎌倉市小町)

大聖人がご赦免になって、佐渡から鎌倉へ帰られ滞在された夷堂の故地に建てられたと伝えられます。のち身延山からご遺骨を分骨、安置して八東身延と呼ばれています。

妙本寺 (鎌倉市大町)

大聖人の檀越、比企大学三郎能本の邸に、文永十一年、法華堂を建立したのにはじまります。比企氏は鎌倉幕府の側近でありました。しかし、二代將軍頼家の意を受けて北条氏の専横をのぞこうとして、逆に比企一族は滅ぼされました。その菩提のために当寺が建立されたのであります。比企一族の墓所、一幡の八袖塚(そでづか)▽八竹の御所跡▽等を伝えています。

ぼたもち寺 (常栄寺) (鎌倉市大町)

文永八年竜口法難の際、聖人が竜ノ口の刑場へひかれていく途中、こゝに往む機敷の厄がごまのぼたもちを供養したと伝えていきます。

妙法寺 (鎌倉市大町)

大聖人が鎌倉伝道の折、松葉ヶ谷にご草庵を営まれ、その旧地を記念して建立されたもので、もと松葉ヶ谷の法華堂と呼ばれていました。

安国論寺 (鎌倉市大町)

大聖人が松葉ヶ谷の草庵で、立正安国論を著述になった故地を記念して建立されたものであります。

長勝寺 (鎌倉市大町)

松葉ヶ谷の地主石井長勝の邸址であり、大聖人はこゝに寓居されていたと伝えられています。境内には松葉ヶ谷の法難のとき大聖人の危難を救われた帝釈天を祀っています。

御猿島法性寺

松葉ヶ谷の法難のとき、白猿の先導によって難を免かれたと伝える故地にちなんだ建立されたもので、山頂には日朗上人の墓所があり、名越旧街道のほとりには鎌倉五名水の一つ「日蓮水」があります。小町小路には大聖人の有名な「辻説法跡」が伝えられています。

妙長寺 (鎌倉市材木座)

伊豆法難のとき船出をされた場所を記念して、建立された聖跡であります。

実相寺 (鎌倉市材木座)

六老僧の日昭上人の墓所があります。この地は弘安五年に建立された浜土(はまど)の法華寺の旧地であります。法華寺は現在の玉沢妙法華寺(静岡県三島市玉沢)として伝えられています。

光則寺 (鎌倉市長谷)

北条時頼公の近臣宿谷光則の邸址であります。大聖人は立正安国論を上書する際、宿谷公にそのとりつぎを依頼されたのであります。裏山には竜ノ口法難のとき捕えられた日朗上人の「土牢」跡があり、当時がしのべれます。

境内には梅、海棠、牡丹などがあり、季節には、実に美しい花を咲かせます。

近隣には四条金吾頼基公の邸址、△収玄寺▽があります。

靈光寺 (鎌倉市津)

大聖人が極樂寺良觀と法驗を競い、雨乞いをされた△雨乞いの池▽の靈地に建立されたものであります。その傍を流れる川は竜口法難の際、平頼綱の使者と執権時宗の使者が行き合ったところから名付けられた△行合川▽があります。

このように鎌倉市には大聖人の伝道の聖跡、ご門弟の遺跡が数多く散在しております。

竜口寺 (藤沢市片瀬)

大聖人の竜ノ口法難を記念して建立された由緒寺院であります。鎌倉連山を背後に、名勝七里ヶ浜、江ノ島を眼前にした觀光の最勝地であります。

当寺の由来は大聖人滅後、お弟子の日法上人が刑場跡に一堂を建立したのがはじめてであり、のち大本堂が建立され、今日に至ったのであります。山門、大本堂（敷皮堂）、大書院、五重塔など関東随一と称される大伽藍を擁しています。ほかに日法上人の彫刻された宗祖ご尊像、大聖人がお坐りになったという△敷皮石（しきがわいし）▽が伝えられています。刑場跡の五輪塔など、見るべきものが多くあります。

主な行事は四月七・八日千部大会 八月十日施餓鬼供養 九月十一・十二・十三日竜口法難会
十一月二十一日報恩御会式などであります。

〔交通〕東海道線、藤沢駅より、バス十分、江ノ島鎌倉觀光電車、藤沢駅より三分、タクシーあり

〔宿泊〕竜口寺は参籠ができます。附近に観光旅館施設が多い。

妙純寺 (厚木市金田)

竜ノ口の首の座をまぬがれた聖人は翌十三日相州依智の郷、本間重連の館に預けられましたが、その夜、明星のような光り物が降るといふ不思議がありました。そこで、のち八星降り▽とよばれるようになったのであります。後年、本間重連公はこの館を寄進され、妙純寺が建立されました。

〔交通〕新宿、小田急線本厚木駅下車、バス金田下車

本興寺 (横浜市戸塚区上飯田)

大聖人鎌倉への途、ご休息されたところと伝えられています。

△伊 豆▽

仏現寺 (静岡県伊東市玖須美)

伊豆法難の際、伊東の地頭八郎左衛門祐光が熱病に悩んだので、大聖人はその平癒を祈禱されたところ快癒しました。伊東氏は秘かに聖人を毘沙門堂にかくまい、のち本堂が建立されました。当寺には海中出現と伝える立像釈尊、旅人を悩ます天狗をこらしめた日安上人の伝承と天狗詫状があります。また、近くに俎岩が所在すると伝えています。

地頭伊東祐光の邸趾には△仏光寺▽が建てられています。

〔交通〕国鉄伊東駅下車、バス十分

蓮着寺 (伊東市富戸篠ヶ浦)

伊豆ご法難の際に捕えられた大聖人は伊東に流されるはずのところ、狙岩に捨てられたと伝えられ、その場所として当寺が建立されました。境内には「お経岩」「袈裟掛けの松」「祖師送りの浜」などの遺跡が伝えられています。

この辺一带を八日蓮岬▽とよび、天城山を背景にした半島の海岸線、断崖など自然の風景は美しい名所となっています。

〔交通〕伊東駅前よりバス、蓮着寺入口下車、徒歩十五分、(伊豆急行の便あり)

蓮慶寺 (伊東市川奈)

狙岩にたゞ一人捨ておかれた大聖人の危難をお救いし、三十日余の間かくまったのは川奈の船守弥三郎夫妻であります。

のち船守の子孫が船守一家の菩提のため一字を建立しました。

境内には弥三郎夫妻の墓所、すぐ近くには大聖人をかくまった八お岩屋▽があり、祖師堂が建立されています。

〔交通〕伊豆急行、川奈駅下車徒歩十分

妙法華寺 (伊豆三島市玉沢)

日昭上人(六老僧)の開山、弘安七年鎌倉浜土にあった日昭上人の庵を移して寺とされました。江戸時代には徳川お万の方や紀州頼宣、水戸頼房など諸公が諸堂を寄進二百六十余棟と伝えられる

ほど壮大な伽藍を建立されたのであります。

当山には「撰時抄」「註法華経」「聖人説法図」など聖人のご直筆、ご遺物などが数多く宝蔵に格護されています。

また鉢泉も湧き出ていますので静養地ともなっています。山間の静かなたゞずまいは参詣者の憩いの場所ともなっております。

〔交通〕 東海道線三島駅前よりバス二十五分

〔宿泊〕 参籠一〇〇—一二〇名

実成寺 (静岡県田方郡中伊豆町柳瀬)

日興上人のお弟子であった日尊上人の開山、日尊上人は日興上人のご勘気をうけたのでありますが、止暇断眠の伝道によって三十六ヶ寺を建立、その法勲によってご勘気をとかれたと伝えられています。

〔交通〕 修善寺または伊東駅前よりバスで八幡下車、〔宿泊〕 小人数の参籠可能

△佐 渡▽

根本寺 (新潟県佐渡郡新穂村大野)

文永八年、佐渡に配流された日蓮聖人謫居の霊跡であります。大聖人が配所のご生活をなさいました塚原三昧堂の跡は△戒壇塚▽とよばれて保存されています。飢えと寒さに悩まされながら諸宗

の僧と法論を行ない、重要な御書である「開目鈔」などを著述されたところがあります。

境内は広く、本堂、祖師堂、選仏堂、三昧堂、仁王門、宝蔵、鐘樓堂、経蔵などがあり、遺品、寺宝も多数のこされています。

〔交通〕 佐渡汽船新潟港より両津へ二時間二十分、直江津港より小木港へ三時間

〔宿泊〕 参籠可能（一五〇名前後）

阿仏房妙宣寺（新潟県佐渡郡真野町阿仏坊）

塚原三昧堂に居した大聖人の教化を受けてお弟子となり、夜中ひそかに食物を運んで大聖人をたすけた阿仏房夫妻の開基になるお寺であります。夫妻の至誠は全信徒の範とされています。のちその子藤九郎盛綱は父母の志を継ぎ妙宣寺を建立、曾孫の日満上人は北陸道七ヶ国法華の棟梁と仰がれました。

境内には仁王門、本堂、祖師堂、宝蔵があり、新潟県唯一の五重の塔があります。大聖人のご真蹟、御真筆ご本尊を所蔵、日野資朝筆細字法華経（重要文化財指定）があります。

〔宿泊〕 参籠可能（一〇〇名前後）

妙照寺（新潟県佐渡郡佐和田町市野沢）

日蓮聖人は佐渡へ配流された翌年、文永九年四月頃、塚原三昧堂から一の谷（いちのさわ）へ移られました。この地、聖人は文永十年四月、「観心本尊抄」を著して御本懐をお述べになり、また大曼荼羅御本尊を御図顯なさいました。宗徒としては非常に重要な御霊蹟であります。

その他、△本光寺▽（畑野町）は△日朗坂▽とよばれる坂の近くにあつて、日朗上人が大聖人に赦免状を捧持したところと伝えられ、「御腰掛石」「赦免松」があります。

妙照寺から沢一つ越えると、袈裟掛松の靈蹟△実相寺▽があり、宗祖曼荼羅本尊等を伝えています。島の西南端、小木港には日朗上人が赦免状を携えて一泊されたという△安隆寺▽があり、大聖人が着岸された松ヶ崎には△本行寺▽があります。両津の△妙法寺▽には「楊子（ようじ）御本尊」が伝えられています。佐渡への往復に通られた越後路には、柏崎の△番神堂▽、寺泊の△法福寺▽、さらに角田浜の△妙光寺▽などがあります。

△身延山周辺▽

身延山久遠寺 （山梨県南巨摩郡身延町）

日蓮聖人のご靈廟の聖地、日蓮宗の総本山であります。身延山は大聖人の晩年九ヶ年をおすごしになった山であり、お弟子お檀越のご信仰をお導きになられた山であります。大聖人はこの身延山中に大坊を建立なされ、久遠寺と名づけられました。のち身延山は今日に至るまで日夜絶えることなく法華經修行の根本道場となっております。

総門、三門、菩提梯、甘露門、本師堂、祖師堂、御真骨堂、仏殿納牌堂、大玄関、鐘樓堂、宝物館、水鳴楼、法喜堂、大客殿、書院など総本山としての偉容を見ることが出来ます。また総本山の周囲をとりかこんで三十数余の宿坊が立ち並び全国からの檀信徒のための参籠の場所となっています。

す。

△御廟所▽ 聳ゆる老杉にかこまれた大聖人のご遺骨埋葬の聖地であり、のち大聖人を追慕してご廟塔が建立されました。久遠寺歴代法主の墓、六老僧の墓、直檀の墓があります。老杉を用材にして建てた法界堂、常経殿など直弟子の祖廟輪番奉仕にちなんで今日に至るまで僧俗の給仕奉仕が行われています。

△ご草庵跡▽ 大聖人ご在世当時、お住いになられたご草庵の跡であり、一面に古こけむして七百年の昔を偲ぶことができます。

△思親閣・奥之院▽ こゝは大聖人の故郷安房国小湊のご両親を追慕された聖跡であります。境内には△御手植の杉▽、元政上人の慈父の遺骨と自らの黒髪を埋られた△元政塚▽があります。この思親閣への道は久遠寺より徒歩で二時間三十分かかります。ロープウェイで八分の眼下には富士川を望み、富士山を真近に見ることができます。

△祖廟輪番奉仕▽について 本宗では、祖廟輪番奉仕を実施しています。申込の受付は、身延山久遠寺内祖廟輪番本部で受付けていますが、くわしくは同本部または管区の宗務所あて問合せ下さい。

△七面山▽ 六老僧の日朗上人が波木井公と共に登山されて、法華經の守護神である七面天女を祀られました。のち登山する者を守護し靈驗顯著であったため老若男女に崇敬されています。

身延より七面山まで徒歩九時間の道のりですが、途中、角瀬（すみせ）までバスがあり、

三時間と五時間で登山できます。ことに隨身門より拝するご来光は莊嚴であり、山頂より見る雄大な景観は素晴らしく、その神秘にうたれます。

身延山の周辺には、養珠院お万さまのゆかりの八大野山本遠寺、宗祖の教化によって改悔した善智法師の八小室山妙法寺、善智法師の教化されたところには八下山上沢寺があります。

領主波木井実長公の開基になる八円実寺、武田氏武将穴山梅雪の下山城跡には八本国寺など大聖人やご門弟の遺跡が数多くあります。

〔交通〕東海道線富士駅、中央線甲府駅より身延線乗換え、身延駅下車。身延山までバス二十分タクシーあり。

〔宿泊〕宿坊の参竜、旅館への宿泊、いずれも可能。

本門寺 (静岡県富士郡北山)

六老僧日興上人の開山で、日興・日頂両上人の墓所があります。重須郷主石川孫三郎の帰依を保て、この本門寺を草創、三十六年間の日興上人の伝道の聖跡であります。老杉におゝわれた広い寺域は昔日を思わせ、富士山の雄姿を見ることができます。

当山には寺宝も多く、お弟子の日法上人の彫刻という八生御影尊像、宗祖真筆・ご本尊等十余点、宗祖筆の「貞観政要」(国宝)「藍紙金字細字法華経」(重文)等が格護されています。

〔交通〕身延線富士宮駅下車、バス本門寺前下車

実相寺 (富士市岩本)

日蓮聖人が立正安国論を草されるために実相寺所蔵の一切経を読まれた霊跡であります。もと天台宗でありましたが、当時の学頭が大聖人に帰依し、本化の法灯が受継がれるに至ったといわれます。

〔交通〕富士駅下車、バスで岩本下車。

△東京とその周辺▽

本門寺 （東京都大田区池上）

大聖人ご直檀の領主池上宗仲公のご寄進により本門寺が開創され、関東随一の巨刹として重きをなしてきました。毎年十月十一、十二、十三日の宗祖ご報恩会は△お会式▽と呼ばれて全国の檀信徒が参拝、参籠いたします。

本堂に安置されている祖師像（国宝）は大聖人七回忌（正応元年）に造立されたものでお弟子の日法上人の彫刻になるといわれ、まのあたり大聖人のお姿を拝することができます。ほかに宗祖ご直筆、ご遺物など多数の寺宝が格護されています。

境内は広く、本堂、御真骨堂、書院、五重塔（国宝）本門寺公園、宗門の有名な檀越の永眠する墓地、体育館、信徒会館、伴虎館などがあります。本門寺は今次大戦中米軍機の爆撃を受けて全山焼失、幸い五重塔や宝物は戦災をまぬがれました。今見る主な建物は全国の檀信徒の浄財によって再建されたものであり、今なお復興途上にあります。

〔交通〕 東急池上線、池上駅下車

〔宿泊〕 本門寺参籠二〇〇～二五〇名

大坊本行寺 (東京都大田区池上)

池上宗仲公の邸であり、日蓮聖人ご入滅の靈跡であります。弘安五年十月十三日朝、辰の刻、大聖人が六十一才のご生涯を終えられた臨滅の地であります。臨滅の際、六老僧をはじめご門弟、檀越が集り悲しみのうちに葬送、茶毘に付したのであります。「ご臨終の間」には御寄掛の柱があり臨滅のとき庭前には桜が咲き乱れたと伝えられますが、御会式には八お会式桜が咲いて往時を思わせます。

附近には宗祖の茶毘所に大きな宝塔が建立され、裏山には養珠院お万さまの墓や加藤清正公のお妹の墓などがあります。

〔宿泊〕 お会式参籠五十名

法華経寺 (千葉県市川市中山)

富木常忍・太田乗明両人は日蓮聖人の有名な檀越であり、両人は自分の邸を寺となし、法華寺・本妙寺と称しましたが、この両寺を合せて法華経寺が建立されました。境内は本堂、法華堂、五重塔など整然と立ち並び、往時を偲ぶことができます。

△聖教殿△には大聖人の重要な著述「観心本尊抄」「立正安国論」(国宝)など数多くの日蓮聖人ご真筆が格護されております。

△遠寿院大荒行堂△は本宗の祈禱修法の根本道場、毎年百日間の加行が行われているところとして有名であります。

弘法寺 (千葉県市川市真間町)

建治二年日頂上人(六老僧)によって真言宗から改宗されました。安置されている釈迦像は日蓮聖人の開眼になるものと伝えられ、崇敬されており、寺域は千余年の歴史を誇る古刹であり、また境内にある手児奈靈神は「真間の手児奈(てこな)さま」として知られています。

〔交通〕総武線市川駅、または常盤線松戸駅よりバスか或は京成電車、市川真間駅下車

本土寺 (千葉県松戸市平賀)

当山は池上本門寺、鎌倉妙本寺とともに三長三本といわれ、日朗、日像、日輪三上人の誕生地であります。

〔交通〕常盤線―北小金下車

△霊蹟・由緒寺院△

孝勝寺 (仙台市東九番町)

開山は日門上人で、藩主伊達公の外護によって創建され、先代萩で有名な政岡の局の墓があります。

〔交通〕東北本線仙台駅下車

妙国寺（福島県北会津郡一箕村滝沢）

日什上人生涯の地で、上人の御廟所があります。会津落城の際、城主が蟄居していたところでもあります。

久昌寺（茨城県常陸太田市新宿）

当山は有名な水戸光圀公の寄進によって建立されたものであります。水戸檀林として江戸時代に宗門の学僧を輩出したところとして知られています。

〔交通〕 水郡線常陸太田駅下車

妙顕寺（栃木県佐野市堀米町）

中老僧天目上人が唐沢城佐野氏、若田部源五良光盛の寄進によって開創されました。

〔交通〕 両毛線佐野駅下車

妙興寺（千葉県千葉郡泉町野呂）

日蓮聖人御在世中、曾谷氏によって七堂伽藍が建立されたと伝えられます。慶長元年（一五九六）には池上十二世日尊上人によって野呂檀林が創始されたのであります。

日本寺（千葉県香取郡多古町南中）

大聖人の檀越富木日常上人の隠居地であり、千葉胤貞公の寄進によって諸堂が建立され、正中山に対し正東山と称しました。のち中村檀林がおかれたところであります。

正法寺（千葉県山武郡大網白里町小西）

小西城主能登守胤繼（日源居士）によって建立され、天正十八年（一五九〇）に小西檀林が造られた旧地であります。

妙法寺（東京都杉並区堀之内）

日朗上人が伊豆ご法難の際、大聖人を偲んで刻んだと伝える祖師像が安置されています。大聖人伊豆流罪赦免の時の御年令にちなんで、四十二本のけやきの丸柱で祖師堂が建立されました。東京都重文に指定されています。

〔交通〕新宿駅よりバスで妙法寺前下車

題経寺（東京都葛飾区柴又町）

「柴又の帝釈さま」とよばれて有名なお寺で、法華經の守護神、帝釈天を安置しております。庚申の日には門前は市をなし、大変賑わいます。江戸名物の一つになっています。

〔交通〕京成電車、柴又下車

蓮永寺（静岡市沓谷二丁目）

大聖人の檀越松野氏の寄進によって、六老僧日持上人が開創され、のち養珠院お万さまが現地に移したものであります。

本覚寺（静岡市池田町）

中老僧日位上人が弘安年間に持仏堂へ本尊を安置し、伝道されたことにはじまって現地に建立されたものであります。

本立寺（静岡県田方郡菰山村菰山）

大聖人伊豆流罪中、宇野英久公は大聖人に帰依し、のち当地に移り一寺を建立したことはじまつて、江川家の香華寺となったものであります。

海長寺（静岡県清水市村松町）

もと天台宗の古刹でありましたが、中老僧日位上人の教化を受けて改宗、海長寺と称するようになったものであります。

玄妙寺（静岡県磐田市見付町）

開山は日什上人。日什上人は天台宗の学匠でありましたが、大聖人の御書を拝読して本宗に転じ各地に伝道されましたが、遠州見付にこの寺が建立されたものであります。

妙立寺（静岡県浜名郡湖西町吉美）

日什上人の開創になるもので、境内には徳川家康宇津山城攻めの旧跡があります。ほかに紺紙金泥の法華経、涅槃像の画幅（重文）があります。

妙成寺（石川県羽咋市滝谷町）

日像上人が北陸に遊化されたとき、真言宗・石動山天平寺の上首、満藏法師が帰依して弟子となり、日乗と名を改めて一字を創建したのが当寺の沿革であります。のち前田家の帰依を受け、七堂伽藍が荘麗であります。重要文化財の指定を受けている五重塔や祖師堂・書院などの堂宇もあり、多数の寺宝を格護しています。

〔交通〕北陸本線金沢乗替、七尾線・羽咋乗替、北陸鉄道・柴垣下車

妙顕寺（京都市上京区寺ノ内通）

日像上人は大聖人の御付嘱を受けて京都伝道に上り、三度の法難に屈せず当寺を建立されました。本宗の京都伝道の最初の寺であります。のち、法華宗号及び勅願寺の綸旨を賜りました。莊重な堂宇であり、数多くの寺宝を蔵しています。

妙覚寺（京都市上京区新町通鞍馬口下ル）

日像上人の開創になる由緒寺院であります。

立本寺（京都市上京区七本松通仁和寺街道上ル）

日像上人の開創、妙顕寺、妙覚寺、立本寺の三山を三具足山と称しています。

本法寺（京都市上京区小川寺内上ル）

世に「なべかぶり日親」の異名のある日親上人の開創になるもので、のち本阿弥光悦（芸術家）が私財を投じて大檀越となったお寺であります。

本圀寺（京都市下京区柿本町）

日印上人によって鎌倉に開かれた寺をその弟子日静上人が京都に移して本圀寺を建立、六条門流とよばれる門流の源をなした名刹であります。

本満寺（京都市上京区寺町今出川上ル）

日秀上人の開創。近衛公の嫡男に生れた日秀上人は、その外護を得て当山を建立された由緒ある

寺院であります。

瑞竜寺 （滋賀県近江八幡市宮内町日触）

関白秀次公の母、瑞竜院日秀尼の開山であり、豊臣氏の外護によって建立されたものであります。のち門跡寺院として由緒あるお寺であります。

頂妙寺 （京都市左京区仁王門通新鉄屋町）

日祝上人の開山であり、細川勝益公の外護による由緒ある寺院であります。

妙伝寺 （京都市左京区東大路二条下ル）

日意上人の開山、大聖人のご遺骨を分骨して「西身延」と称されました。

報恩寺 （和歌山市真砂町二丁目）

和歌山城主紀伊大納言の建立になるもので、紀州藩の頼宣公夫人や歴代夫人の墓所であります。

妙国寺 （大阪府堺市材木町東三丁目）

永禄年間、日珖上人の教化に帰依した三好豊前守之康が領地を寄進し、日珖上人の父、油屋伊達常言、兄常祐が一寺を建立、徳川家康らの保護を受けて、南海における一大道場となったのであります。

国前寺 （広島市尾長町）

安芸国浅野公の帰依を受けて日勝上人が新たに諸堂を建立し、国前寺と改称されました。由来は日像上人の伝道によって、真言宗の寺院が改宗して境忍寺と改めたと伝えられています。

寺庭婦人の手帳

■昭和36年7月1日初版（寺庭婦人のしおり）

■昭和44年4月1日改訂再版

■印刷 昭和46年5月1日増刷

■編 著 現代宗教研究所
所 長 茂田井 教 亨

■発行者 日蓮宗宗務院教務部
部 長 田 中 日 堂

■発行所 日 蓮 宗 宗 務 院
東京都大田区池上1-32-15
TEL東京(751) 7181(代)

■印刷所 堀田印刷有限会社
堀 田 和 雄
台東区池之端2-4-19
TEL東京(03) 822-0526

1

1/3

〔交通〕 山陽本線、広島駅下車

光勝寺 (佐賀県小城町)

文保元年（一三一六）千葉大隈守平胤貞の創建で、中山法華経寺第三世日祐上人が開山であります。鍋かぶり日親上人を中興の師と仰いでおります。

なお、福岡市の東公園には、日蓮聖人の大銅像があつて有名であります。これは明治二十七年に造立されたもので、銅像護持団によって護持されています。

